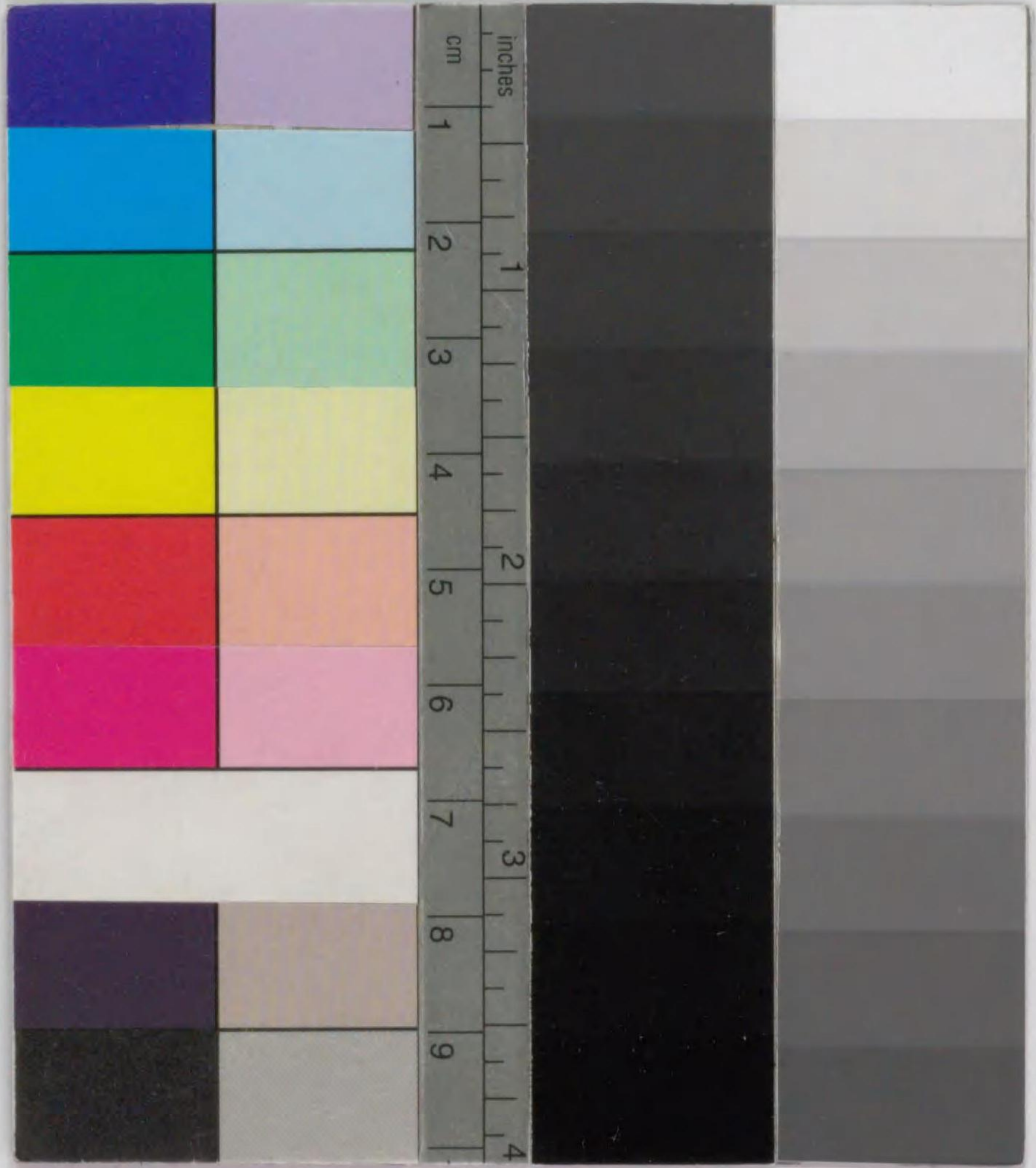


569

569-61



1200501517075



450



世界大衆文學全集

あゝ越えたい他二篇

尾崎士郎



改造社



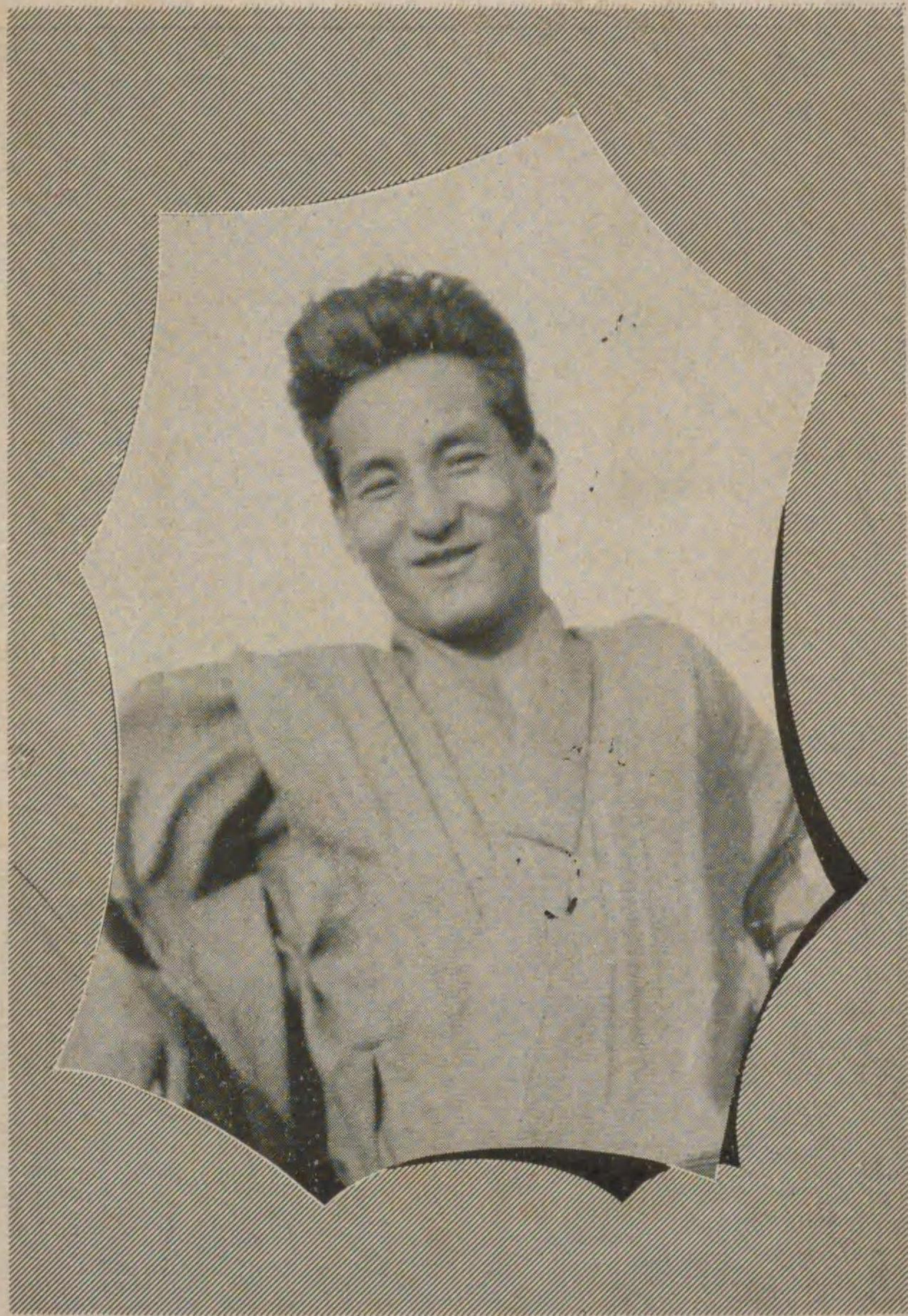
7



「私好なきラブ・ユウイテ、この優い顔と賢き美しき眼を御
遊覧せよ」(一四四頁参照)

私好なきラブ・ユウイテ、この優い顔と賢き美しき眼を御
遊覧せよ





者 譯

小 序

569-61

〔一〕「あの山越えて」は、「オーバア・ゼ・ヒル」として知られてゐる。原作者ウィル・カー
トンはアメリカの抒情詩人で、通體的な人情を基調としてゐることに於て、彼の境地は他の
追隨を許さざるものがある。それ故、彼の聲名が風靡してゐるのは、ひとりアメリカだけで
はない。この書は、彼の原作と、彼の詩篇と映畫化すためにつくられた筋書とを混成して築
きあげた物語である。従つて構想の上には多少の變化と潤色を加へられてゐるが、大體に於
て、カートンの詩を散文に書換へたといふだけのものである。しかし、原作者の意圖は反つ
てこの物語によつて一層強く表現されてゐるやうに思ふ。この作品が映畫物語であるにも拘
らず、何處かに鋭い實感と迫力とを持つてゐるのもそれがためであらう。原作は全く「自傳
的體験」に基くものである。唯、ところどころに不自然な箇所、倒へば、父のベントンが倅の
ある牢獄の中を深夜おとづれるといふやうな——があることは詩的情緒を小説的現實に轉
化するための無理を飛び越えた結果と見るべきであらう。

〔二〕ブラック・ビュウティは、英國の女流作家、アンナ・シウエルの原作である。（この作家
の名前はこの作以外にはまるで知られてゐない）黒馬の自叙傳であるが、これは馬の愛情を
描いたものとして既に古典的な價值を持つてゐる。内容の印象を強めるために全篇の小節を

無視して、これを三篇に分類した。極めて小部分ではあるが、冗長な個所にはなるべく省略を加へた。家庭文學としてのあらゆる要素を具備してゐることに於ては、世界を通じての模範的な通俗小説であらう。

(3) ピーター・パンは前の二篇がいづれも大時代の感情を備へてゐることに對して、全く現代の作品である。古典的價値の上に立つ現代の作品である。作者、ジェームス・バアリーについては彼が現英國文壇に於て元老的地位を保つてゐるといふだけで充分であらう。英國の子供達にとつてはピーター・パンは最も親しむべき偶像である。しかし、嚴密に言へばこの物語は子供の「桃太郎」であるよりも以上に父と母の「桃太郎」である。本書は夢の國の場面の約三分の二を省略した。子供の物語としてよりも以上に大人の物語としての小説的效果を重んじたからである。(その省略方法については萬事バアリーの研究家である村上正夫君の意見に従つた)

昭和五年四月

尾崎生

目次

あの山越えて (カートン作)

第一章 二十年 前	八
第二章 馬 泥 坊	三五
第二章 あの山越えて	六四

ブラツク・ビュウテイ (シウエル作)

青 春 篇	一〇四
苦 闘 篇	一〇三
流 轉 篇	二四四

ピーター・パン (バアリー作)

第一 卷

ピーターが侵入するまで	三三六
夢の國の地圖	三三三
魔法の海岸	三四四
提灯のあるわけ	三四四
「ピーター」といふ名前	三四五
大きくならぬピーター	三四五

不意議な冒険をする子供達 三四七
その晩の出来事 三四八

第二卷

箱の中におる影法師 三五二
生れた日から逃げ出したピーター 三五三
ピーターの誘惑 三六三
飛んで行く子供達 三七二

第三卷

歸つてきたピーター 三八三
現れた海賊 三八五
子供達はどこへいつた？ 三八九
立ちのぼる煙 三九六
みんな死んぢまへ！ 三九七

第四卷

ウエンデイの物語 四〇〇
お母さんといふもの 四〇二
歸りたいウエンデイ 四〇九
ウエンデイを歸すものか！ 四一〇
悲しきピーター 四一三
元氣よくわかれて 四一八
劔を握つて立つピーター 四一九

第五卷

野蠻人の軍隊 四二二
陣を張つたフツク 四二三
二心あるフツク 四二三
戦士リリー 四二三
卑怯な戦術 四二三
ピーターの自慢 四二五
二度と聞かれぬ銅鑼の音 四二六

第六卷

フツクとウエンデイ 四二八
船に運ばれる子供達 四二九
無遠慮な寝顔 四三〇
毒薬のコツプ 四三四
妖精を信するならば 四三五
懷劔を握りしめて 四四二

第七卷

シヨリー・ローザマー號 四四三
兇猛な行爲 四四四
お母さんの最後の話 四四五
鰐がやつてきた 四五〇
倒れたフツク 四五二



あの山越えて

第八卷

板を渡つて海の底へ！ 四五三
 鞭をもつて来い！ 四五六
 僕の名は青春である 四五七

第九卷

向きを變へた船 四七一
 ウエンデイの疑ひ 四七二
 夜の子供部屋 四七三
 みんなの歸つた夢 四七六
 萬事がわかつた 四八〇
 スキートホーム 四八二
 馬鹿なお母さん 四八二
 見たことのあるところ 四八三

第十卷

春の洗濯時が来るまでに 四八八
 大きくなる子供達 四九四
 結婚したウエンデイ 四九八
 飛べないお母さん 四九九
 ビーターの訪問 五〇一

あの山越えて

第一章 二十年前

1

夜があけると、子供たちはもう喧嘩をはじめた。その騒ぎでベントン夫人のメリーは目を覺した。それは、彼女の一日にとつて人生の命令を課する起床喇叭であつたから。

目をさますと彼女は頭の中で六人の子供の名前を、恰度、兵式教練で中隊長が檢閲するやうに呼びあげる。——アイザック、トーマス、ジョニー、チャアリー、レベッカ、スーザン、——

メリーの生活は、この六人の子供の中にあつた。彼女は、彼女だけの人生を一日たりとも考へたことがない。この小さな貧しい家の中で、メリーは六人の子供の乳母であり、怠け者の夫の妻であり、——それ以外の何ものでもなかつた。

彼女の青春はもう二十年前に通り返してしまつてゐた。それを振りかへる餘裕もないほど、忙しい生活である。どんな母親でも時には鏡の前に立つて、老いすがれた顔の中から古い青春の夢を探し求

めようとするものであるが、メリーにはその餘裕すらもなかつた。

朝早くから夜晩くまで、彼女の心は六人の子供と夫の身邊とを駆けめぐつてゐた。見る影もなく衰へやつれた彼女の頬は子供たちの成長するにつれてますますこげ落ちていつた。頬がこけるにつれて窪んだ目は慈悲と愛の熱情に輝きはじめる。——

麗らかな朝である。

光りはカーテンの隙間から破れた壁の上に流れ、小さな蒲團にくるまつて小犬のやうに眠つてゐる二人の娘レベッカとスーザンの顔の上にちりくくと迫ってくる。

「かあちゃん！」

と、スーザンがまだうつとりとする夢の中から叫びだした。それからすやくと眠りだしたと思ふところではレベッカが不意に物におびえたやうに泣きだした。

そこで、メリーは起きあがつた。

「レベッカや、どうしたの、かあちゃんはこのゝにあるよ。」

メリーは急いでレベッカの身體を抱きあげながら豊かな頬に接吻した。

「さあく、靜かにしてゐるんですよ、今においしい御飯ができましたから起きてあげますからね。」

それから子供の頭を撫でながら、口なれた子守唄を唄ひだした。その唄が聞えるとレベッカはうつすらと目を開いた。するといつものやうに甘えたい氣持が胸一杯になつて母の乳を探る眞似をしなが

らにつこりと笑つて見せた。その身體をもう一度しつかり抱きしめてから、メリーはそつと寝かしつけるのであつた。

レベッカが、やつと寝つくくと、こんどはスーザンが目目を醒す。メリーはスーザンにも同じやうに接吻をしてから、臺所の支度をするために出てゆくのであつた。

その頃になると窓の下のベッドに眠つてゐるアイザック、トーマス、ジョニー、チャアリーの、四人の兄弟が交る／＼目を醒す。スーブのほひが暖氣と共に室の中に流れてくると、子供たちは待ちきれないやうにわめきたてる。

白犬のシャーロックが、ベッドの下からむく／＼と這ひだして室の中を歩き廻る。

シャーロックは、毛布の端をくはへたり寝臺の脚に噛みついたりして騒いでゐたが、やがてだらりとさがつてゐるジョニーの手を見つけると、ペロ／＼と舐めはじめた。

そこで、ジョニーは目を醒した。そして、自分の手を舐めてゐるシャーロックを見ると、急いで頸筋を握んでベッドの上へ引きあげた。毛布の上でシャーロックは嬉しうに尾を振りながら鼻を鳴らした。

「シャーロック、——ここでちん／＼をするんだよ、もつと脊伸をして眞直になつて。」

シャーロックは前足を前へのばしてぐつと後へ反りかへる拍子に大きく嘔をした。

その飛ばつしりが一番端の窓のすぐ下に眠つてゐたアイザックの顔の上にかゝつた。アイザックは

目をあけた。そしてジョニーの毛布の上で嬉しうに尾をふつてゐるシャーロックを見ると甲高い聲でどなりだした。

「やい、ジョニー貴様はシャーロックをなぜベッドの上へあげたんだ、きたないぢやないか、直ぐおろさないと承知しないぞ。」

「あげちやいけないの？」

「畜生！」

と言ふが早いアイザックは足を伸ばしてシャーロックの横腹を蹴とばした。

不意をやられてシャーロックは悲しうにうめき聲を立てながら床の上へころげ落ちた。

「ざまあみやがれ！」

アイザックは小氣味よさうにどなりつけてから、ぐつすり眠つてしまつた。

床の上につくまつてゐるシャーロックを見るとジョニーはもう一度手を伸して抱きあげた。そして小さい聲で——おいシャーロック、警打ちにあのアイザック兄さんの毛布を引きはがしてやれよ、

——と言ひながら手眞似で命令するとシャーロックは不意にベッドの下をくぐり抜けてアイザックの寝てゐる毛布の端を口にくはへて引っぱりだした。

アイザックは、たうとうほんたうに怒りだした。しかし、彼が半身をベッドの上から起した時にはもうシャーロックは扉の外へ逃げだしてゐた。犬がゐなくなるとアイザックはジョニーに向つて怒り

だした。

「貴様だらう、こんな悪戯をさせたのは、——今から出て行つて犬を引っぱってこい。」

「だつて兄さん、足で蹴るなんてあんまりひどいよ。」

「ぢや貴様は犬の味方をするんだな。」

と言ふが早いか平手でびしやりとジョニーの頬つべたをなぐりつけた。

かうなるとジョニーも黙つてはゐなかつた。彼はいきなりアイザックの身體にむしやぶりついた。

年齢は二つ違ひであるが喧嘩となると三男坊のジョニーの方がずっと強い。ジョニーは學校でも、

「野性の黒ん坊」と呼ばれて亂暴者で通つてゐた。それで、家の中でもまるで厄介者扱ひにされてゐ

た。たゞ、母だけが彼を愛してゐたが、——兄のアイザックになると、ジョニーを蛇よりも嫌がつて

ゐた。家の中で心からジョニーを相手にしてくるのは母と犬のシャーロックだけである。

ベッドの上では大格闘がはじまつた。その騒ぎでトーマスとチャアリーの二人が目醒した。

ジョニーがアイザックを押へつけると、下になつたアイザックは矢庭にジョニーの手頭を噛みつい

た。この騒ぎで次の室に寝てゐた父のベントンが目醒した。

2

臺所ではパンケーキやオートミールが暖かい湯氣を立てゝゐた。

母はテーブルの支度をしながらジョニーの泣聲を聞くと直ぐに寢室へ飛びこんできた。そしてわめきつゞけながら、とつ組み合ひの騒ぎを演じてゐる二人の兄弟を見ると、またしても暗い色が彼女の瞳をかすめた。

「これアイザックや——お前は兄さんぢやないの、少しはわきまへがあつてもいぢやないの？」

母の姿を見るとアイザックは急に威丈高になつて叫びだした。

「だつて母あさん、ジョニーが悪いんだよ、こいつは犬をけしかけて僕の顔にくいやみをひっかけさ

せたりするんだもの。」

「違ふよ母さん、兄さんがシャーロックの足を蹴飛ばしたんだよ。」

とジョニーが言ひ返す。

「なんだつてこいつ、——嘘をつくなよ、貴様がくいやみをひつかけたから蹴つたんぢやないか。」

母は、また新らしくとつ組み合ひをはじめようとする二人を見ると、慌てて肩をつかんで引きわけ

ながら、

「こんど喧嘩をすると御飯をあげませんよ。」

母の言葉よりも、食欲をそゝるスープの香りが二人の闘志を鈍らせた。

太陽はもう遠い森の上までのぼつてゐた。

輝かしい朝。——子供たちをやつとこさでなだめた母は建て付けの悪い窓をあけ、軒に掛けてある

カナリヤの籠をはづした。

布をとるとカナリヤは嬉しうに羽ばたきをして轉りはじめた。

すると、こんどは、レベッカとスーザンが喧嘩をはじめた。二人は鏡の前で着物を着更へてゐたが喧嘩の原因はレベッカの鼻をスーザンが團子鼻と言つたからである。

二人の娘は泣きながら臺所へかけて行つた。

「母さん、スーザンは私の鼻を團子鼻だと言ふのよ。」

レベッカは、言ひ終ると床の上に突つぶしたまゝ泣き崩れてしまつた。それを見るとスーザンは前よりも一層大きい聲で泣きだした。母は涙にぬれてゐる子供の頬を同じやうに軽く撫でながら、「女の子は喧嘩なんぞするものぢやありませんよ、スーザンだつてレベッカだつて團子鼻ぢやないのよ、こんなに綺麗な鼻ぢやないの。」

と母は二人の平べつたい鼻を一様に抑へながら優しい言葉で言つた。

それで、二人は仲直りをした。

「姉さん、勘辨して下さいね。」

と、スーザンが言ふ。

母は二人の子供の顔をながめながら、ほつとしたやうに溜息をついた。

しかし二人の娘が仲直りをした頃にはアイザックとジョニーとの喧嘩が再び燃えはじめた。

アイザックがしつこく罵しるのをちつとこらへてゐたジョニーは自分の枕を不意にアイザック目がけてなげつけた。

隣の室で、先刻から子供たちの喧嘩にむかつぱらを立てゝゐた父親は、たうとう我慢ができなくなつて子供たちの室に這入つてきた。

父親のベントンが扉をあけて這入つてきた瞬間、アイザックがあわてゝ身體を躲したので枕はアイザックに當らないで、ベントンの顔に當つてしまつた。

父の恐しい剣幕を見た子供たちは、小さくなつてベッドの影に身をひそめた。末の子のチャアリーは、自分の證を立てようとして、

「ジョニーがしたんです。」と、速座にしやべつてしまつた。

父のベントンは、烈火のやうに怒鳴りながら、アイザックとジョニーとを捕へようと追ひ廻した。ジョニーは素早く逃げて、部屋隅に隠れた。

ベントンの顔には、枕の中から出た白い羽根が、べつたりとくつついてゐた。ベントンはそれを不愉快らしく、鞞めつ面をしたり、拂つて見たりしたがなかくとれなかつた。驕て鏡に向つて、一つ一つ丹念に毛をとりはじめた。不機嫌な表情で、妻にまで邪慳にあたりちらしたりした。

「ただどあなた、あれたちはほんの子供なんですから……」

「子供だつて、容赦はならないんだ。」

「そんなことを、——それにあなた、もうお起きになつても好い時分ぢやありませんか。」
子供等に優しい母も、餘り寝坊な横着な良人の様子を見ては、妻としてかうした言葉を言はずには居られなかつた。

「起きる時間だ？」

ベントンはかう訊き返すやうに言ひながら、又もベッドのそばに行つた。不承々に、ズボンを取りあげてはいてはみたものの、直ぐ莫迦々々しいといふ氣になつて、切角はきかけたズボンを投げ出してしまつた。さうしてまだ暖味の脱けない、ベッドの中に再び潜り込んでしまつた。

先刻の騒ぎで勝手の方に逃げ出したジョニーは、もうそんなことは忘れてしまつたといふやうに、相變らず悪戯さうな顔付で、猫の子を抱いたりして、まだ顔も洗はずにゐた。

そこへ母が這入つて來たのであつたが、ジョニーのさうした姿を見ると、すぐ顔を洗ふやうに命じた。母からさう言はれて、ジョニーは申譯のやうに、洗面器の前に立つて、水を使ふ眞似をした。

食物を載せた卓子の下には、子猫が幾つも戯れてゐた。母はそれをあやすやうに眺めたりしてゐたが、ふと氣が付いたやうに、ジョニーの傍に行つた。そして、ジョニーの顔の洗ひ方を見ると、

「そんなむさくるしい顔をして、もつと綺麗に洗はなければいけません。」

「僕ね、僕、今洗つたばかりなの——」

「朝は一日の中で一番大切です。——顔を綺麗にして、氣持よくしなければいけません。よく洗はな

いと、衛生にも悪いのですよ。」と、やさしい言葉で、言ひ聞かせながらジョニーを洗面器の前に立たせて、母は自分でシャボンを取つてジョニーの顔を洗つてやるのであつた。

そこでいや／＼ながらも、ジョニーは、母の言ふがまゝに顔を洗はなければならなかつた。

3

長男のアイザックは、聖書の文句をよく諳記してゐては、事にあたつてそれを引つ張り出すのが例であつた。——それも「左手をして右手のなすことを知らしむる勿れ」といふ文句を、特別によく知つてゐた。その意味は、善い事をしてても決してそれを吹聴するな、陰徳を施せといふのであつたが、アイザックは、その意味を、自分の都合の好いやうにばかり、勝手に解釋してゐた。

アイザックをはじめ、トーマス、チャアリーは、レベッカ、スーザンと食卓を圍んで、母の許しの出るのを待つてゐた。卓上には、銀のやうに清新な果物と、暖いスープやトーストが、食慾をそゝらずには置かないやうに並べられてあつた。

先刻からお腹の空いてたまらぬトーマスは、自分の前に置かれた朝食に、ホークをつけずには居られなかつた。彼は、無意識の中に啜りはじめた。それを見ると、アイザックは意地悪さうな眼付で、

「トーマスや、僕はまだ『おあがり』つて言はないよ。」と言つた。

さう言はれたトーマスは、ジョニーのやうに兄に反抗する勇氣はなかつた。が、そのかはり母の名

を呼びながら、

「ね、お母さん、アイザック兄さんは、おあがりつて言はないんですつて、——僕お腹が空いちやつてよ！」

この時ジョニーはまだ、この食堂に這入つて來なかつた。

父のベントンは、まだ寢足りないといふやうに強ひて眠らうとするらしく、それでも明るい外光が容赦なく流れ込んで來ては、眠ることの出來ない不機嫌さを、じれつたさうに人差指で耳の穴をほちつて見たり、寢返りをして見たりするのであつた。

母に顔を洗つて貰つたジョニーは、着物を着換へてから、元氣のいい快活な態度で、兄や妹たちがもう待ちあぐんでゐる食堂に姿を現はした。自分より先に、みんながもう竝んで待つてゐるのを見ると、ジョニーは何だか自分獨りのけ者にされたやうに思はれて、軽い不愉快さを感じずには居られなかつた。それでも彼は、そんな僻んだけちな感情はすぐ忘れてしまつたやうに、自分の席につく前に、妹たちの竝んでゐる後姿の襟脚のあたりを、軽く指で突つついて、無邪氣な惡戯をするのであつた。

ジョニーは、アイザックと反對の方に腰を下したが、ジョニーが席に着いてから、食卓は一層賑やかになつた。

兄妹たちは、母の來るのも待たずに、お祈りをする間もなく、我先にと食べはじめた。

あわて、食べようとしたアイザックは、熱ついオーツ・ミールで、舌の先を火傷したやうに不愉快な表情をした。

ジョニーは、啜らうとして、コップを口のあたりまで持つていつたが、その時、ふと眼に付いたものがあつた。

ドロ／＼としたオーツ・ミールを、匙でかき廻しながら、茶碗の中を見ると、その中に蟲の死んだのが這入つてゐた。それを見たジョニーは、小癢にさはるといふやうな不快な表情を示したが、急に何か思ひ出したやうに、軽い微笑を唇に浮べた。

ジョニーは、コップの中の蟲を匙で掬ふが早いか、それを兄のアイザックの方に投げつけた。

不意に何物か投げつけられたアイザックは、はつと驚き、頭に手をやつて見ると、それがオーツ・ミールなのを知つて、やつとほつとしたやうに落ちついて、それから、

「誰がやつたんだ。」と怒鳴りながら、四邊を見廻した。

ジョニーは、それを投げると、すぐ下を向いて食事をしはじめた。アイザックの聲が聞えても、知らない振りをして、伏目勝に口を動かしてゐるのであつた。ジョニーの唇は、痛快を叫ぶ微笑が、禁じ得ないやうに浮んだ。

トーマスや、チャアリーも、また妹たちも、アイザックの態度を見ると、笑はずには居られなかつた。

一同は笑ひ出した。——アイザックはますます腹立たし氣に、怒り散らした。やがて、その仕業がジョニーであることが解つて、アイザックは、ジョニーを撲ぐらうとして飛びかゝつて行つた。

——二人はまた喧嘩をすることになつた。その時、母のベントン夫人が這入つて來た。仲裁は何時も母の役目なのだ。父のベントンは、いよく眠れないのに不愉快を感じながら、ベッドを離れて、やけに頭髪を掻き捲つたり、ぶりく怒つたりしてゐた。

母に取つてはさうしたやうな一番世話のやける時間が過ぎて、子供等はみんな學校に行くことになつた。母の前に集つた子供達は、母から一人々々お小遣錢を貰ふのであつた。

總領のアイザックは、母から渡されるだけの小遣錢では、とても自分の満足を得られないので、臺所に行つて、茶筆筒の上の戸棚にあつたコップから、幾らかの錢を盗み出して、母の前へ來ては何喰はぬ顔をしてゐるのであつた。

トーマスやレベッカは、もう方關の先の方へ出てしまつたが、母の傍に甘つたれてゐる一番末の弟のチャアリーは、母の言葉にうながされて、アイザックに手を引かれながら出ていつた。

母の身には、かうして、やつと子供達を學校に出してやつたあとの、ほつとした時間が、何よりの一安心なのであつた。これでまあ好かつたといつたやうな——軽い安心と落着とが、その顔にほんのりと浮んでゐた。

家庭から學校に送られて來た生徒の多くを預つて、いろく親切に世話をしてゐる女の先生の苦勞は、また一通りや二通りのものではなかつた。

それ等の先生は、確かに第二の母でなければならなかつたから。教室では、授業がはじまつて、地球儀や世界地圖が並べられた教壇に、先生は熱心に教鞭をとつてゐた。可憐な生徒達は、靜肅にその教へを受けてゐるのであつた。

ジョニーは、女生徒の中で、ストロング家の令嬢イサベラといふ子を、何となく好いてゐた。イサベラもまた、いたづらのジョニーを好いてゐた。ジョニーとイサベラとは、机の位置こそ異なれ、手の届く隣り合せに並んでゐる列にゐたのだ。

恰度その時は、算術の時間であつたが、ジョニーは餘り數學を得意にしなかつた。それで、よく答をイサベラに訊ねては、ノートに記すのであつた。

「イサベラさん、答はいくらだい？」
イサベラもさう訊ねられると、親切にもジョニーに教へてやるのだ。

一人の女生徒が、可愛い男の子を連れて、この教場に這入つて來た。その可愛い子は、まだ學校に

籍のない子であつた。

生徒の一同は、その子供たちが這入つて来た時、視線を一樣にそれに向けた。

「先生、エディは私と一緒に参りました。——教場に這入つてはいけませんか？」
その女生徒は、かう先生に訊ねた。

先生はエディといふその男の子の顔を見知らないもので、一寸不思議に思つたが、女生徒の言葉に、

「——お母さんが、お父つあんを探しに行つて、お給金を取つて来なければならぬんですつて、
——（エディといふ男の子の父は、酒と賭博道楽で、家は常に留守勝であつた）

その言葉をきいて、先生はその子を入れることを許した。

すると、また一人の闖入者——遅刻して来た黒人の子のアブラハム・ワシントンには、片手に大きな
林檎を持つて、正面の戸を開けて這入つて来た。

「アブラハム、ワシントンさん、あなたはまた遅刻しましたね。」

先生は儼然としてかう言つた。

「先生、僕は今日のは遅刻だとは思ひません。」

アブラハム・ワシントンは、子供にしては如才のない、黒奴特有の狡猾さうな表情をしながら答へ
た。そして、その林檎を先生の前へ捧げるやうにして、突き出した。

「それぢやそれが、仲直りの印といふ譯なんですね？」

「いゝえ、奥さん、こりや林檎ですよ。——私の遅刻はこの林檎のせゐなんです。」

「何ですつて？」

「——僕が歩いてゐると、この林檎が落ちて来たのです。それを先生に差し上げようと思つて、拾つ
てゐたので時間がかゝつたのです。——僕の遅刻は、まつたくそのせゐなのです。」

「まあ、さうでしたか。」

先生はアブラハム・ワシントンの、さうした頓智的奇才の言葉に、すつかり丸められてしまつた。
アブラハム・ワシントンは、先生の机の下に腰を下して、生徒の方を見ながら、赤い舌を出した。
それを見ると、一同はどつと笑ひ出した。

さうしてゐる中に、一人の上級生が這入つて来て、先生にその受持の先生からの手紙を渡した。先
生はその手紙をすぐ讀んだ。その時、その生徒は、大勢の方に視線を投げながら、眼で何か言ふと、
一人の女生徒が共鳴したもののか、しきりに眼で話をし合つた。それを見た黒奴の女の子は、自分に會
釋でもしてゐるかと思つて、しきりと答へをするのであつた。

教壇の前に立つたその生徒は、それを見ると嘲笑的な態度をしながら、眼で見交した女生徒と頷き
合つた。

かうした経緯を見せられたジョニーの胸には、「生意氣な！」と言ふ考へがむらくと湧いて来た。
ジョニーは、紙を口で丸めながら、ポケットからバチンコを出して、矢庭にその生徒を眼かけて射

つたのだ。だが、バチンコの弾丸は、覗つたその生徒には當らず、先生の額へびたりつと當つてしまつた。

不意に、何物かが飛んで来て、額に當つたので、先生は驚きと怒りの眼を睜つて、生徒の方を見廻しながら、

「誰がしたのですか？」と、顫へ聲で詰問的に叫んだ。

ジョニーをはじめ、外の生徒達は、先生が怒り出すや否や、一齊に下を向いて、懸命に本をみつめるやうにとめた。

先生の返事を待つてゐたその上級の生徒も、その有様に吹き出しさうになつたが、先生と顔を見合せて急に澄した顔をしてしまつた。

その生徒は、先生の返事を聞くと、扉の外に出ていつたが、すぎ行かうとはしないで、人を馬鹿にしたやうな滑稽な様子をして、一同の生徒達を笑はせた。

先生は、不思議に思つて、後を振り返ると、その生徒は、扉を急いで締めて行つてしまつた。

5

子供達を學校に出した後の母は、その暇をみて、勉強に疲れて歸つて来る子供たちを、喜ばせようとする温い親心から、御褒美のお菓子を作るのに餘念がなかつた。

父ベントンは、漸く起きたばかりの不機嫌な態度で、贅澤な朝の食卓に向つてゐた。

幾つもの仔猫と戯れては、獸ながらも親子の情を語つてゐる親猫を見ると、人の子の親として、故縦になりきつてゐる夫の態度が、一層不安に寂しく思はれて来るのであつた。

その妻の優しい心遣ひには、殆んど無關心のやうに、夫は暢氣に煙草をくゆらしながら、ソファーに腰を下して、新聞を読み耽つてゐた。

ベントン夫人は、寂しさに耐へかねたやうに、夫の傍に寄り添つて、しみんと夫の顔に見入つた。そして寂しい自分の心を訴へるやうに、

「あたし、何も小言を言ふのぢやありませんが、どうやらこの頃、縫物の仕事の口が減つて来たものですからねえ……」

「何だつて、たかが一週間十二弗を貰ふために、毎朝四哩も歩いて、勤めに出ると言ふのか？ 馬鹿な、——靴の皮を餘計擦り切らすだけのことぢやないか！」

「ですけれどねえ……」

「この俺に、値打相當の給料を出すものがあつたら、俺はその時仕事をしてやらう！ それまでは、御免被る！」

邪慳にこんなことを言ひながら、ベントンは新聞を投げ出して、その場を立つて行つてしまつた。妻は、寂しさうにその後姿を見送つてゐるよりほかに仕方がなかつた。

「用事があるから出て行きますが、戻つて来てから、今悪戯をしたものを、屹度探し出します。——
一晚中留置をしても、探さずには置きませんぞ、——」

先生は、こんな言葉を残して、教場を出て行つた。

先生の出で行つた後姿を見ると、ジョニー、は早速自分の席を立つて、扉の所に行つてみた。そして、先生の行つた先を見届けると、手を上げて外の生徒を招いた。

一同は總立になつて、入り亂れて、ダンスの眞似をしたり、いろいろなことをして、教場は一時に騒々しくなつた。

母の血を受けて、畫家の素質を持つてゐるチャアリーは、みんながさうして賑やかに騒いでゐる中に、自分は黒板の前に出て行つて、チョークを取るが早いか、先生の印象を、天才的な筆致で描きはじめた。

眞黒な黒板に、白で先生の顔が、——殊に突つた鼻の特徴を表して、瞬く間に描かれた。

そこへ、先生が戻つて来た。その氣配を耳にした生徒は、慌てて席に戻つて、先生が這入つて来た時は、みんな何喰はぬ顔をして、靜かに机に向つてゐるのであつた。

先生は、生徒達のおとなしい、餘りに靜かな様子を見ると、すぐに自分の留守の間に何事かあつた

といふことが、直覺された。それは永年の經驗で、先生の頭脳には直ぐに判斷がついた。

四邊を見廻した先生の眼に、第一番に這入つたのが、黒板に畫かれた自分のカリカチュアであつた。それを見ると、自分の鼻をつまんで、繪と見較べながら、先生は烈火のやうに再び怒り出した。

「誰がこんな悪戯をしたのですか？」

先生の鋭い聲が、生徒たちの胸に針を刺すやうに響き渡ると、一人の生徒は無意識のやうに手をあげた。

「あたしは知つて居ります。——チャアリーです。」

チャアリーの名は、その生徒に指された。

その言葉を聞くと先生は直ぐチャアリーの傍に來た。一同の眼は、チャアリーに注がれた。先生の聲は鋭く、

「チャアリー、あなたですか？」と、言つて睨み付けた。

おとなしいチャアリーは、遂に泣き出してしまつた。そして、恐ろしさに、わかりきつたことを否定するのであつた。

「あなたでなければ、誰がやつたのです？」

「兄さんのジョニーです。」

チャアリーは、口詰つた結果かう喋舌つてしまつた。——それは、家にあても何事か悪いことがあ

れば、すぐジョニーのせゐにされてしまふ。外の者がジョニーに罪を被せることを平氣であつた。その習慣が、可憐なチャアリーの頭腦にも、何時か染み込んでしまつてゐたからである。

しかし、かう出鱈目をしやべつてしまつてから、チャアリーは困つたと思つたが、その言葉はもう取りて消すことが出来なかつた。

先生の眼は、異様に鋭く、ジョニーの顔に注がれた。一同の注意も、ジョニーの方に投げられた。

チャアリーから指を差されて、ジョニーは濡衣を着せられてしまつたのだ。その瞬間、ジョニーは自分の證を立てようと思つたが、可憐な弟の顔を見ると、どうしてもそれが弟の仕業だと、言つてしまふ氣にはなれなかつた。黒板に畫かれた繪を見た時、ジョニーは、弟のこの天才的な素質を、今かうして先生から壓迫されてしまふのは、弟の身にとつても大不幸だ、自分が罪を引き受けてしまひさへすれば、可憐な天才的な弟の罪はまぬかれてしまふと、子供心にも切實に思つたのであつた。——そこで、ジョニーは、何もかも呑み込んで、自分がしたことに黙諾してしまつた。先生の眼は、更に鋭く光つた。

「お立ちなさい。——こちらへおいでなさい。」

ジョニーは立つた時に、先刻のバチンコを落してしまつた。

ジョニーは、それを知つた時「しまつた」と思ひながら、靴の先でバチンコを先生の眼に見えないやうに、後の方へ寄せようとしたが、先生にそれが直ぐ發見された。

バチンコまでジョニーの悪戯と解つては、最う先生の聲は、怒りの極度に達したかのやうに顫へて來た。

「留置きして、成敗します。」

先生は、癩癩を起して焦らくしながら、ペンの走り書で、一通の手紙を認めた。そして、それをジョニーの妹のレベッカとスーザンとに渡した。

教壇の傍に立たせられても、ジョニーは黒板に畫かれた漫畫を見ながら、神妙に落着いてなどはゐなかつた。自分の信ずるところ、自分の意志の動くまゝに事をやるといふやうに、悪びれた恰好などは、決して見せなかつた。それでも、先生の凄い一瞥があると、教壇の傍に腰をおろしておとなしくするのであつた。

外の生徒達が歸されてしまふと、ジョニーは先生の振りあげた鞭で、びしり／＼と撲ぐられた。鞭が折れるかと思はれるほどに。——

先生は、「これは私が責めるものではありません。——母に代つて、第二の母が悪い子供を撓め直すのです。——」と言ひながら、やけに鞭を振り上げた。

その時、先生の左の手には、ジョニーのバチンコが握られてゐた。ジョニーの共鳴者、ジョニーの同情者のイサベラは、先刻からその様子を、窓の外の硝子越しに覗いてゐて、ジョニーが打たれる毎に、自分が打たれるかのやうに、悔し泣きに泣いた。

するとイサベラの小さい胸には、ジョニーの男らしい心に、感動する同情と尊敬の念とがしみくと湧いて来るのであった。

7

ジョニーは、先生からそんなにまでひどい譴責を受けても、弟のために犠牲になつたかと思へば、左程腹立しくは思はなかつた。寧ろ、かうした犠牲的精神は、やがて偉大なる人格をつくるものであるといふやうな、紳士的な思ひに耽りながら、皮肉な微笑をさへ唇に浮かばせて、教場を立ち去つた。

出口の壁に寄つて、ジョニーの出で来るのを待つてゐたイサベラは、ジョニーの姿を見ると、足早に寄り添つていつた。そして最も同情的に、優しい慰藉の言葉でジョニーを迎へて、その頸脚に熱い接吻を投げた。

やがて、ジョニーとイサベラとは、緑の色の濃い樹木のある街路に出たが、イサベラはまだ噎び泣いてゐるので、ジョニーは、それを見ると、

「まだ泣いてゐるの？ 僕、泣く人は嫌ひなんだ。元氣をお出しよ！」と、言ひながら、ポケットからハンケチを出して、イサベラの顔を拭いてやつた。そして二人は、手を組み合せて、睦しく語りながら、家へ歸つて行くのであった。

先生から手紙を預けられたレベッカとスーザンたちは手柄でもして来たかのやうに、家へ歸ると父母に、その手紙を渡しながら、今日學校であつた一部始終を話した。

それを聞いた父ベントンは、非常に憤慨した。

「お前が悪いからだ。——メリーお前はしよつちうジョニーを庇つてゐるんぢやないか。」

こんなことを言つて、ジョニーの行爲も、妻のせゐでもあるかのやうに怒りだした。それを聞くにつけても、母はまだ戻つて来ないジョニーのことが、心配になつて堪らなかつた。

イサベラの家の前まで、可憐な愛人を送つていつたジョニーは、家へ歸つてからの辯明の方法を考へたりして、可成り暇取つてから歸つて来た。——しかし、自分の歸りを待つてゐるに違ひない父母や兄妹のことを考へると、躊躇せずには居られなかつた。女關のところ、しよんぼりと腰をおろして、暫くの間考へて見るのであった。それでも、やつと元氣をつけて、こつそりと家の中へ這入つていつた。

そこには、母親が自分を待ち詫びた心配顔で、何事か考へてゐるやうに、首垂れてゐた。そして、おづ／＼と這入つてきたジョニーをアイザックや外の兄弟達は、皮肉な眼で見るのであつた。

父は、先生からの手紙を讀んだので、いら／＼して今にも怒鳴り出しさうな剣幕を示してゐた。

正面の入口の横の戸棚の上に、學校の荷物を置くと、ジョニーは、母の前に走り寄つて行つた。母は、それを温かい心で迎へてジョニーの頬に接吻をしながら、

「ジョニーや、お前、また悪戯をしましたね。お前が悪戯をすると、お母さんはどんなに心を痛めるかよく知つてゐるくせに、何故あんなことをするの？」

「僕ね、先生に當てる積りぢやなかつたの、運悪く眞つすぐにゆかないで、逸れちやつたの……」

ジョニーが言譯をしようと思つてゐる矢先へ、父は眼を鋭く光らせて、ジョニーの方に接近して来た。ジョニーは、それを見ると縮み上つてしまつた。そして、眞實を語らうとする氣持も、父の前に

はまつたく變つてしまふのであつた。

ジョニーが逃げようとする、兄のアイザックが両手をひろげて邪魔をした。父はジョニーの耳を引つばつてさんく撲つた。その擧句、手荒く壁の方へ突き飛ばしてしまつた。

ジョニーは、ベッドの傍に投げられたやうに横たはつて、さめくと泣いてゐた。そして、恨めしさうに父の顔をぢつと見てゐた。

母やレベッカやスーザンは、心配顔に黙つて立つてゐる。

犬のシャーロックは、可憐な主の虐待されるのを見て、悲しげに聲を出して吼えた。父は、ますます恐しい眼で、

「なぜ貴様は、そんな悪戯をしたのか。そればかりぢやない。先生の顔を畫くなんて、何といふ馬鹿な子だ！ 何時までも忘れないやうに、うんとひつぱたいてやるぞ——」

ぶつ／＼言ひながら、父は再び近寄らうとして来た。

「お母さん！」

ジョニーは、鋭く母を呼んだ。

母は、ジョニーの叫び聲を聞くと、針でも胸に刺されたやうな思ひがして、ぢつとこらへて来た。辛抱の糸が急に断れたやうに、ジョニーのそばへ走り寄つて、ジョニーを抱きあげた。そして、夫に反抗しようとするのであつた。

「そんな叱り方をしては、子供の心がひねくれるばかりです。——」

妻にさう言はれると、ベントンはいまくしげな表情でジョニーを一瞥して、部屋を出ていつた。そして二階へ通ずる、階段を上つて行くのであつた。

犬のシャーロックは、非常に憤慨して、ベントンの上つて行く蹺音に吼えつゞけてゐた。そして、さも／＼いまくしさうに、鼻の尖で二階に通ずる扉を器用に締めてしまつた。それから、戻つて来て、母に抱かれたジョニーに飛びついた。

母は、涙ながらに、情愛の溢れた言葉で、諄々とジョニーに言ひ聞かせるのであつた。

ジョニーは、母からさう言はれると、父に甚く撲られて叱られるよりは、眞實を語りたい——總てを話してしまひたいといふ心持になつて来るのであつた。

子供たちのために心配の絶えることのない、母の日の一日も暮れて、やうやく夜になつた。だが、

夜がきても、母の身には休むべき時はなかつた。

娘のレベッカやスーザンは、ベッドに這入りながら人形を抱いて、まだ眠らずに戯れてゐた。娘たちが人形を抱いて遊ぶのも、總てが母の情の賜と言はねばならなかつた。夫や子供たちの服装までいろ／＼と心に懸つて、夜の休むべき時も休まずに、母はいろ／＼な着物にアイロンをかけたたりしてゐた。

ベントンは、その傍に腰をおろして、悠々と煙草をくゆらしながら、妻のさうした態度を見守つてゐた。彼の心には、自分の横着な心に引きかへて、さうした妻の働き振りが、なんとなく、自分の心を哀愁の思ひに導いて行くやうに感ぜられた。

可弱い女の身には、日夜の勞作が尠なからず疲勞を感ぜしめた。その時、メリーは眩惑さへ覺えて來た。

それを見た夫のベントンは、先刻から何となく感傷的な思ひに陥つてゐたので、また心からの邪慳な性質の男でもなかつたのか、妻を慰勞つてやりたいやうな氣になつてきた。

「メリーや、お前はあんまり無理が過ぎるかも知れない。時間はたつぶりあるんだから、何も急ぐことではないよ。」と、言ひながら、親切に介抱して、水を持つて來て妻に飲ませてやつた。

「水を此處に置いて行くぜ。——メリーや、また眩惑がするといけなから氣を附けた方がいゝよ。」ベントンは、何時になくやさしい言葉を殘しながら、寢室に這入つていつた。

夜は、次第に更けていつた。仕事の手を片時も休めずに續けてゐたメリーも、餘りに疲れて來たので軀を椅子に靠せかけた。その時、靴の踵が破れてゐるのに氣が付いた。しかし、メリーは、それを靴屋に廻さうとは思はず、直ぐ手に脱ぎ取つて、自分で繕ひはじめた。

子供たちは、母の苦勞などは知る由もなく、最早深い眠りに落ちて居た。犬のシャーロックでさへジョニーの眠るベッドの傍に、更けて行く夜の睡眠を貪つてゐるのであつた。

靴の破れを繕ふ手も、餘りの疲勞にはか／＼しくは行かなかつた。やゝもすれば、睡魔に襲はれてはうと／＼とまどろむ。——

メリーは、到頭、テーブルに突ツ伏してしまつたが、やがて思ひ出したやうに、頭を擡げた。そして、レベッカとスーザンとの眠つてゐる所に来て、娘達の寢顔に愛情の深い接吻をしてやつた。

まどろむ時でさへ、子を思ふ親心の烈しさは、母のみが知る苦しさではあるまいか。——この骨を削る苦しさの中に二十年の歲月が流れ去つた。

第二章 馬 泥 坊

1

二十年が過ぎた。ベントン夫人であるメリーの姿は最早母として、はなく、寧ろ、祖母の姿として

われ／＼の眼の前に現はれる。——六人の子供の中、五人は既に母の家を出て、彼等も亦千供の親となつてゐるのであつたから。

今日は、特別の日であつた。母の誕生日で、家を去つた五人の子供たちも、その母には孫に當る子供を連れて、母の手料理の馳走にあづからうとして、集つて來るのであつた。——かうして度々、兄弟姉妹が集るのに、結婚してしまつたものは誰一人として、自分たちが御馳走になる、この誕生日の物入りの金を、出さうとするものはなかつた。そして、昔からの子供として、たゞ、母の恩恵にあづからうとするのであつた。

年老いた父と母とは、今日の誕生日に訪れて來る子供たちのために御馳走の準備に追はれてゐた。食卓に花を飾つて、子供たちや孫を迎へる親の心には、どんなに喜悅と満足とが漲つてゐることであらうか。

「お爺さん、急いで迎へに行つて下さいよ。——汽車の着く時刻ですからね。」

老いたメリーは、かう言つた。

今までに繰返して來た誕生日の中でも、今日は最も嬉しい誕生日であつた。——母を取り捲くものは皆な貴い黄黄や白銀も及ばないこの世の中では唯一の寶、自分の生みの子供たちであつたから。やがて子供たちは、それ／＼立派になつて、——兄のアイザックは技師に、チャアリーは畫家に、

娘たちはよき人の妻となつて、母の家に歸つて來るのであつた。

けれども、ジョニー一人は、まだ母の許に残つてゐた。そして、昔のまゝのジョニーで、相變らず少年時代の不幸者の（野性のクロンボ）であつた。

長兄のアイザックは、技師となつて、人を憐み人を救ふ可き道に生活を求めてゐながら、聖書を引用して、それを片手に理窟をつけては、「左手は右手のあることにはあづかり知らぬ」といふエゴイチックな信念を振りまく昔と少しも變りはなかつた。

兄や妹たちは、母の誕生日のことだから、それ相應に服装を改めて來てゐるのに、ジョニーだけは、破れたシャツのまゝで、父母を取り捲く兄弟たちの前に現れた。

ジョニーの風采を見て、その率直な氣持を解することの出來ない兄のアイザックは、ひどく冷淡な侮蔑にみちた眼で、弟を見るのであつた。アイザックとは、成長した今日も、子供の頃と同じ状態で、互に握手を交さうとはしなかつた。

兄弟の仲を見た老いたる母の胸には、深い悲しみと同時に、子を思ふ暖い感情が湧いて來た。母はジョニーに向つて言つた。

「ジョニーや、お前とアイザック兄さんとは、これまで永い間仲達ひをして來ましたね。だが、今日はこのお母さんの誕生日だから、お互に手を握り合つて、仲直りをして下さいね、——世間の兄弟同志がするやうにね。」

さう母に言はれて見ると、ジョニーは氣に染まぬ兄のことでも、握手をせねば濟まぬやうな氣がしてきた。

それで、ジョニーは手をさしのべてアイザックに握手を求めた。

アイザックは、手を出さうともしないで、冷やかに、

「聖書にかう言ふ文句があります。——瀝青に觸るものは汚れを受くべしと。」

猶、言葉をついで、
「お母さん、何故あなたはいつまでもこんな奴を庇ふのですか？ この子の性格は、私が前に幾度となくお話ししたちやありませんか。誤魔化し上手で、懶惰者で、末には屹度悪い奴になるに相違ありませんよ。」

アイザックは、わざと面あてのやうに、言つた。

これを聞いたジョニーは、むつとして、黙つては居なかつた。

「アイザック兄さん、あなたが今度聖書を讀む時には、僞善者に關する文句を熟讀しなさい。」

二人は、突つ立つたまゝ、向ひ合つて、しばらく睨み合つてゐた。

かうなると、母は、心配さうに、二人の様子を見守るほかはないのだ。

氣を臭らしてアイザックが歸らうとすると、ジョニーはそれを制して、皮肉な語調で、

「アイザック兄さん、歸らない方が好いでせう。——ぢき食べ物が出ますよ。それはあなたが一錢だ

つてお金を出さずに濟むんだからねえ。」

かう言ひながら、ジョニーは、部屋を出て行つた。

するとアイザックは、母に向つてわめきたてた。

「お母さん、あんな奴をいつまでも家に置くことは、家名を傷つけるやうなものですよ。」

ジョニーは、兄の態度が、一家に集つて來た兄妹達の心をばらばらしくにして、面白くない厭な空氣が部屋の中に漲つて來たので、氣持を晴らすために、戸外へ出て行つたのであつた。

2

戸外へ出たジョニーはふと、イサベラのことを思ひだした。振分髪の頃から、苦しきにつけ、悲しさにつけて、いつでも陰になり日向になつて、自分を庇つてゐて呉れる戀人イサベラを訪ねて、自分の苦しい胸の裡を打ち明け、これからの方針なども話さうと、靜かな夜の道をイサベラの家の方へ向つて歩いてゐた。

その時、街の四ツ辻で、何か見張をしてゐるらしい、顔馴染の二人の役人に出會つた。

「お役人、今夜は何か見張をしてゐるのですか？」

「この頃、馬泥坊が這入るんでね。それを見張りにかうしてゐるのさ。——だけどな、ジョニー、もう筋道はすつかり探つてしまつたんだから大丈夫だ。辻といふ辻には、全部手配が濟んでゐるんだ。」

「泥坊に一杯食はしてやる積りさ。」

ジョニーは、こんな話を聞かされたが、格別興味もないので、大した氣にも留めずに、そこを辭して再び懐しいイサベラの住んである森の方へ急いでいった。

イサベラは、その夜は何となく落ちつかかなかつた。せめてジョニーに逢つて話でもしたいやうな心持で、獨り部屋の中に茫然としてゐた。蒼い星の光の流れてくる窓によりそつて、彼女はジョニーの幻を追ひ求めてゐた。そこへジョニーの靴音が、かすかにひびいてきた。

イサベラは、どきつとして立ちあがつた。嬉しさの込みあげて來る感情を壓へながら、いそぐとペランダに出ていつた。

ジョニーは、イサベラの顔を見ると、何となくもぢくして、手に持った帽子をくしゃくしゃに揉みながら、嬉しさうに、氣まりの悪さうな様子をして佇んでゐた。イサベラは、いきなりジョニーの方へ摺り寄つて來た。そして、男の手を固く握り締めて、

「ジョニーさん、好く來て下さいましたわね、あたし何だか今夜は、あなたにお目に掛りたいやうな氣がして仕方がございませんでしたの……」

「え、僕もあなたに會ひたかつたんです。いろ／＼お話したいことがあります……」

「さう——」

二人は、思はず固く抱き合つてゐた。

「さ、あすこへ掛けて話ませう。」

と、イサベラは、ペランダの隅へ男を連れて行つた。

二人は、竝んでペランダに腰をおろした。そして、懐しさうにしみ／＼と一夜を語りあつた。

ジョニーは、女の返事を氣にしなから、一つの計畫を思ひ切つて言ひ出した。

「ね、イサベラさん、僕、今度或る決心をしたんです。どうしても西部へ行つて一と働き働いて來たいんですよ。」

イサベラは、ジョニーが突然こんなことを言ひ出したのでびつくりした。目を圓くしてゐたまゝ直ぐには返事も出來なかつた。

「ど、——どうして、そんなお考へをなすつたの？」

「どうしても、この土地では、いくら芽を出さうと思つて努力して見ても、結局、無駄なことなんです。僕は、ホレス・グリーンさんの言葉に従つて、明日にでも西部へ行かうと思つたのですが——」

ジョニーは、イサベラの顔を覗き込むやうにして、その答へを待つてゐた。

「あなたがいらつしやるなら、それは仕方がございせんわ。」

イサベラは、悲しくうなだれてしまつた。

ジョニーの心には、イサベラに對する愛情が燃えあがつてきた。そして自分のことをこれ程までに思つてゐてくれるイサベラを一人殘して、遠く西部へ行くと云ふことが、今更のやうに、無謀のこと

であるかのやうにも思はれてきた。ジョニーは、打ち萎れてゐる女の様子を見ると、堪らなく可哀想な氣がして来て、思はずその手を取つて接吻した。そして、慌て、手を放しながら、ちつと女の顔を親詰めて、

「イサベラさん、私があなくなると、あなたは悲しいんですか？」

右の手で女の肩を抱きながら、深く呼吸を弾ませた。

イサベラは、たゞ黙つて男の腕に抱かれたまゝ、うつとりと眼をとぢた。

「永い年月を、私は徒らに暮してしまひました。こんな寂しい田舎で——でも、僕は西部に行くにしても、お母さんと——それから、あなたとに別れて行く氣にはどうしてもなれないんです。」

イサベラは、ジョニーの胸の上に頬を俯せて身動きもしなかつた。何と言つていゝのかまるでわからなかつた。たゞ、哀しさが先に立つて、その美しい顔さへ涙に曇つてゐた。

「あなたがいらつしやつてしまつたら、年とつたお母さんが、どんなに可哀想でせう。」

長い抱擁のあとで、イサベラはきれん／＼にこんなことを言つただけだつた。

「それを思はないことはないんです。だけど、僕はどうしても西部へ行きたい。この土地にあるのが厭になつたんです。だけど、——僕の決心は鈍るのです。あなたのために、どうしても決心がつかなくなるんです。」

ジョニーは興奮のためにがた／＼と顫へてゐた。イサベラも男の心を感じると、今はもう強ひて引き止めることも出来ないやうな氣がして、壓へられぬ感情の興奮から、何を言はうとしても、言葉は口籠るだけで、どうしても出て来なかつた。

「僕は今、この悩んである人生の答案を、あなたから聞きたいんです。ね、イサベラさん、昔、僕に算術を教へて呉れたやうに、どうかこの謎を解いて下さい。」

狂ほしいまでに、新緑の香は、夜の光に流れ込んでゐた。一つの情熱がかうして愛を語る二人の身にひし／＼と迫つて来るのであつた。

ジョニーはイサベラを抱きしめたまゝ、やがて決心の色を面に浮べた。

「僕は、稼ぎに行つて来ます。イサベラさん、僕が歸つて来るまで待つてゐて下さるでせうね——」

「えゝ、待つて居りますとも、何時まででも、あなたが歸つていらつしやるまでは、あたし人の妻なんかには決してなりはいたしません！」

イサベラは、固く男の手を握りしめた。やがて、二人の姿はよるめくやうに雑木林の中へ消えていつた。

青葉の繁みを漏れて来る月の光は、かうして抱擁に疲れた男女の顔を、美しく照らしてゐた。

やがて、二人は盡きぬ名残を惜んで、立ち上つた。イサベラは、もうその場にあることさへ苦痛であるかのやうに、ジョニーの手を擦り抜けて、つと扉の中へ駆け込んでしまつた。ジョニーは、その後姿を見送つて、人なき扉の面を何時までも視詰めて、ちつと佇んでゐた。

イサベラは、自分の部屋の前の階段の側まで来たが、悲しみが胸に迫つて来て、一步も歩けなくなつた。そして、そのまゝ後向に立つて、何時までもくぢつとしてゐた。

ジョニーがイサベラの家のヴェランダに佇んでゐる時、我家では誕生日の賑やかな集ひが終りを告げようとしてゐた。今宵が過ぎると、兄妹たちは皆それ／＼の家へ歸つて行つてしまふのだ。母にとつては、それが何よりも寂しく感ぜられてならなかつた。

母は、一番末の子の晝家のチャアリーに向つて、

「チャアリーや、お前、今度はもう少し長く泊つてゐてお呉れだらうね、——お前は家を持つてからほんの稀にしか顔を見せないやうになつてしまつたのでもねえ——」

「ですが、お母さん……ルーシーがたつた獨りぼつちで、私の歸りを待つてゐるんですからねえ。」
チャアリーは、母にかう語る間も、妻のルーシーのことを夢みるのであつた。

けれども、チャアリーの妻のルーシーは、チャアリーが思ふ程、貞操の正しい女であるかどうか。

——白絹の寝巻に弾力のある肉體を包んで、ベッドの傍に跪いて、夫の歸りを神に祈る、優しい、麗はしい心を持つた女性のやうに思はれるルーシーは、ただチャアリーの幻想であつた。買ひ冠つた夫の眼に映つた「妻」の外形であつた。現實のルーシーは、夫の留守をこの上もない幸として他の男と接吻の交換をしてゐる不貞の女であつたから。

ルーシーの眼に映るものは、夫の愛よりも、他の男が見せる寶玉の方が、より多くの價值を持つて

ゐた。寶石のためには、そして、奢侈な淫樂のためには、貞操まで賭けて平氣な顔をしてゐる女であつた。

ルーシーは、夫のチャアリーが、母の誕生日に招かれてゐる留守の間を幸ひとして、自分にへつらつて来る、多くの男たちの中の一人を、そつと引き入れてゐた。徒らに唇から唇に移つて行く淫らな戀の快樂——

男は、女の歡心を買ふために、千金を投げ出して購つて来た美しい女持の腕時計と、ダイヤの數多く這入つた三ヶ月形の襟止とを入れた、小形のサックをポケットから取り出して、ルーシーの前に見せびらかした。

ルーシーは、それを見て心から悦ばしげに、

「まあ、素敵だわねえ！ 何てあなたは氣前の好い方でせう。——だからあたしはあなたが大好きですよ！」

ルーシーは、踊り上つて喜びながら卓子の周圍を廻つて男の傍へいつた。

「そのお褒めにあづかつて恐縮です。僕はこの美しい女神に、接吻をしなければなりません。」

と、男は椅子に掛けたまゝで、近寄つて来たルーシーの軀を慌て、抱かうとした。ルーシーは、立つたまゝで男の頭を抱くやうにして、その長い髪の毛を、細い指先にぐる／＼巻いてみせた。それから、男の心を蕩るかすやうにいろ／＼な仕草をしてみせた。男は、女からこんなことをされると、も

うぢつとして居ることは出来なかつた。矢庭にルーシーを両手で抱きすくめようとした。するとルーシーは男の腕を摺り抜けて、男を押搦ふやうに、部屋の中を逃げ廻る。男も面白がつて、ルーシーの後を追ひ駆ける。

二人は卓子の周圍を、面白がつて騒ぎたてながら巫山戯廻つた。やがて女は、疲れ果てた軀を卓子の片隅にあつた椅子に、だらしなく投げ出した。男は女の両手を持つて自分の方へ引き寄せながら、はじめて女の肩をしつかりと抱きしめた。

「ね、この襟飾り、氣に入つて？　ね、好いでせう。」
やつと總てを自分に投げ出してぐつたりともたれか、つた女の頬に、顫へる唇を持つていつた。

3

五月の夜風の中を戀人と別れて來たジョニーは、或る四ツ角を曲らうとした時、ふと眼に映つたものがあつた。それは、ある家の馬小屋に這入り込んだ、一人の怪しげな男の姿であつた。

ジョニーの胸には、先刻役人から聞いた言葉の端が、閃めくやうに浮んで來た。彼は、聲音を忍ばせつ、馬小屋の方へ進んでいつた。

泥坊は、二頭の馬の轡を持つて、暴れようとする馬を制しながら、慌しく馬小屋の中から出て來るところであつた。ジョニーは、身構をしながら、月光に透かして馬泥坊をぢつと視まもつた。

あゝ、——どうしたといふのだ。これは一體。——

ジョニーは一瞬間、自分の眼を疑はずには居られなかつた。——月の光に照されてある馬泥坊の顔はまぎれもなく父のベントンの顔ではないか。——

ジョニーは、轉ぶやうに、父の傍に寄つて、いきなり轡を持つてある父の手に縋り付いた。
「お父さん！　あなたは何をなさるんです。あなたが馬泥坊をするんですか？」

「お、——貴様はジョニーだな、放せ、馬鹿な——お前の知つたことぢやない。」
父は、振りはなすやうにして、ジョニーを突き飛ばした。

大地にべたりと倒されたジョニーは、身體の痛みを堪へて、再びガバと起き上つて、父に獅嚙みついた。

「お父さん、何故こんなことをなさるのです？」
「放せ、早く放せ！」

「放しません、お父さん——決して私は放しません。」
ジョニーと父とは、しばらく、争ひ續けた。

ジョニーは父の腕をおさへてから腹の底から出るやうな悲痛な聲を絞り出して叫んだ。
「お父さん、そんなことをなさるんなら、先に私を殺して下さい。——道路は何處も彼處も役人が見張りをしてゐるんですから。」

「見張り？」

父は、どきつとしてあたりを見廻した。そしてだんく轡を持つてゐる腕の力が緩み出して来た。それから、ジョニーの顔をぢつと見詰めてゐたが、やがて悲しげな聲を振り絞つて、

「ジョニー、赦して呉れ。俺が悪かつたんだ。」

「いや——後は、私が引き受けました。——早く逃げて下さい。お父さん、早く。」

と、ジョニーは、父を急ぎ立てた。

その時、役人の放つたピストルの音が、夜の寂寞を破つて響いて来た。

父は、廣い通りを横にされて、林の方へ逃げ延びて行つた。

役人は、何時か馬の轡を持つたジョニーの傍へ駆け寄つて来たが、ジョニーの顔を見ると、意外だと言ふやうな表情をしながらも、しかし彼を逮捕してしまつた。

ジョニーは、役人に捕はれても、父の逃げ去つたことを思つて、やつと胸を撫でおろした。

父ベントンは草原の中を駆け廻つてから、やつと自分の逃げ延びたことを知つて、ほつと安心したが、そこに仲間の者のあることを知ると、

「お前たちも早く逃げろ。森を抜けて！ 道は見張りが附いてゐるんだ。」

と一々注意してゐるいた。

それからベントンは森と言はず、村と言はず、諸所方々を忍び歩いて、こつそりと我家へ歸つてい

つた。

役人が放つた鐵砲の音は、イサベラの父の耳にも這入つた。イサベラは、この時まで、階段の側に佇んで、ぢつと思ひに耽つてゐたのであるが、その音に驚いて、戸外へ走り出て来た。家の横手を廻つて馬小屋の近くへ出て来て見ると、あゝ！そこに馬泥坊として逮捕されてゐる人は、たつた今し方までベランダで話し合つてゐた戀人のジョニーではないか。イサベラは、愕然として色を失つた。だが、すぐ、そのあとからこの事件を疑はずには居られなかつた。イサベラには、どんなことがあつても、ジョニーが馬泥坊をしようとは、どうしても思はれなかつたから。

イサベラは、ジョニーのそばへ近づいていつた。

「ジョニーさん、あなた誰かの身代りになつていらつしやるんぢやありませんか。屹度それに違ひないわ。——一體誰の身代りにおなりなすつたんです？」

「イサベラさん、お願ひです、どんなことがあつても、僕を信じてゐて下さい。」

ジョニーは、苦しさを忍んで、たつた一言かう言ふと、そつぽを向いてしまつた。

「どうぞ、ジョニーさん、本當のことを言つて下さい。それはあなたの身のためばかりぢやありません。あたしのためにも……あなたは本當のことを言はなければならぬ義務があります。」

イサベラは、何處までもジョニーを信じてゐた。だが、ジョニーは、今自分が馬泥坊だと名乗らなければ、父の罪の身代りになることが出来ない。それを思ふと、ジョニーは自分の戀人にまで虚偽を

言ははねばならなかつたのである。

今ジョニーの胸を支配するものは、親に對する愛の感情であつた。その感情のためにおのれの戀を棄てなければならぬと彼は思った。——その苦痛——子としての犠牲を彼は痛切に感じた。心から愛する戀人イサベラの前に、進んで虚偽を通さなければならなかつたジョニーの心持は、どんなに辛く苦しかつたであらうか。

4

母の家では、まだ子供たちが、過去の思ひ出話に耽つてゐた。それからそれへと話は續いてゆく。賑やかな夜が更けていつた。

この一家の團欒をよそに、何處をどう歩き廻つたか、自分ながらも分らない程無我夢中になつて、唯譯もなくおどろししながら、父は我家の階段を忍び足に上つていつた。そして、窃つと自分の部屋へ這入つて、崩れるやうに長椅子に打ち倒れた。

それは、ジョニーが父のために身代りとして、馬泥坊の罪名の下に、警察の役人達に曳かれて行くのと同じ時刻であつた。

このことを知つた村人の一人は、早速ジョニーの母の許に注進に遣つて來た。その男は、ジョニーの兄のトーマスのある部屋へ這入つて來た。

「大變です。あなたの弟のジョニーさんが、今役人に捕まりました。馬を盗んだといふことです。と、息を切らしながら慌て、かう言ふ聲をきくと、

「何ですつて、弟が馬を盗んだ！」

と、トーマスは、思はず、訊き返さずには居られなかつた。それは餘りにだしぬけな事件だつた。

殆んど想像の付かない程恐しい言葉であつた。

トーマスは、その男を連れて、次の部屋へ出て行つた。

母や子供達が集つてゐる部屋の扉を明けて、トーマスは慌だしく這入つてきた。そこへ恰度以前の役人の一人が嚴かな顔をしてやつて來てじろくと四邊を見廻した。

「何か變つたことでもありますか？」

役人の顔を見ると、何も知らないチャアリーは、さう訊ねた。

「それどころぢやない。ジョニー君が今捕縛されたのです。」

役人の言葉は、みんな、どきつとして立ちあがつた。

しかし、母には、その言葉が、役人の冗談としか聽えなかつた。

「私は——私ははつきり聞えませんが、ジョニーがどうかしたのですかい？」

「ジョニー君が、馬泥坊の嫌疑で、捕縛されたといふのです。」

「あなたは何をお言ひです。——私の、私の倅の、ジョニーが？」

母は、かすかな疑惑の中にもいきり立つた言葉で、訊き返した。

この騒ぎの眞最中へ、アイザックが遣つて来た。

「何か變つたことでもあつたのですか？」

役人は、靜かな語調で、再び同じことをくりかへした。

「あなたの弟君のジョニーが、先刻馬泥坊の罪で捕縛されたのです。」

「そんな馬鹿なことが——？」

母は、それを制するやうに言ふのであつたが、アイザックは、それを遮ぎつて、

「私が彼と握手をしなかつたのは、今になつておわかりでせう。——私の方が正しいと思ひ當つたでせう。この通りなのだ。」

アイザックは、つとめて冷笑的に鼻の先でせ、ら笑ひながら、——

「お母さん、私は彼に警告を與へてやりました。——己れ種を蒔く時は、己れそれを刈り取らざるべからずと——ね。わかつたでせう。」

父は自分の部屋から窺つと出て来て、皆の蔭に隠れて、この話聲を聞いてゐるのであつた。母は、もうおろ／＼してどうしていゝかまるでわからなくなつてしまつた。

父は、部屋にゐても、皆の者の視線をさけるやうにしてゐた。黙つて椅子に腰をかけたなり、そこら歩きたりして落着かなかつた。

アイザックは、なほも聲高に、皮肉な言葉で叫んだ。

「彼奴は、私たち一家の顔に、泥をぬるやうなことを仕出かしたんだ。それはつね／＼言つたことだつたが。」

先刻から、アイザックの雑言を聞いてゐた父のベントンは、針で刺されるやうな胸の苦しみをぢつと堪へて我慢に我慢をしてゐたが、今はもう堪へ兼ねたといふやうに、いら／＼した語調で言つた。

「俺は、もうそんな話は聴きたくない。止めて呉れ。——俺は、耐へられない。」

「だけどお父さん、本當のことです。」

「そりや嘘だ。——そりや嘘だ！ あれがやつたんぢやない。ジョニーがやつたんぢやない。」

父は、何處までも打ち消すやうに、椅子の端を手で焦々と叩きながら、腹立たしげに言つた。

「ぢや、あれはどうして捕縛されたんですか？」

父の言葉を反駁するやうに、アイザックはたけり立つた。

母は、狂氣のやうに、

「あの子がたとひ馬を千匹盗んだつて、私は構ひません。——私は俸のところへ行きます。」

母は、アイザックの胸に縋りながら、哀願するやうな聲で言つた。

「私は、ジョニーのところへ行きます。——あの子はどうなにか、私に會ひたがつてゐるでせう。」

かう繰り返して叫びながら、母は部屋の入口に向つて、半狂亂のやうになつて出て行かうとした。

アイザックを初め大勢の兄弟たちは、力を合せて母を抱き止めた。この情景を目前に見てゐる父のベントンは、それを制すべき力もなく、唯、ぼんやりと視守つてゐるばかりであつた。

「あたしを攫まへて引き止めるのは止めてお呉れ。止め立てをしないでお呉れ。——あたしはあの子に會ひに行きます。お前たちは、あたしの心が解らないのですか？ あの子が困つた時には、いつもあたしに會ひたがつてゐることを——」

止めようとする大勢の言葉も、手も振り握るやうにして、母はますます狂氣のやうに狂ひ廻つた。「私は行きます。私はあの子のところへ行きます。」

と、叫びながら、母はたうとう氣を失つて、其處にばつたりと倒れてしまつた。

ベントンは、驚いて抱き起したが、唯、慌てるだけでどうすることも出来なかつた。

アイザックと他の兄弟達は、かうした光景を、喪心したやうに、唯ぼんやりと見詰めてゐるばかりだつた。

間もなくジョニーの馬泥坊の裁判が開かれた。裁判長の訊問、検事の論告、辯護士の辯論に對して一言の言譯もしないで、初めから終りまで黙認の態度を押し通したジョニーは、馬泥坊の犯行爲を

いよく自分がしたものと認められなければならない結果になつた。

そして、三年の刑が言ひ渡された。

その日、裁判が済んで、傍聴の人々が法廷から吐き出されるやうに、裁判所の廊下に群がつて出て來た。

年老いた母も、ジョニーの安否を心配して、傍聴に來てゐたが、やがて人々の後から、しめやかにうち萎れながら、出てきた。

三年の罪を宣告されたとはいへ、母にはそれが、自分の倅が馬を盗んだ懲罰とは、どうしても考へられなかつた。如何に悪魔の悪戯とはいへ、自分の倅がそんな罪を犯したとは、どうしても考へられない母であつた。

その母と最後の別れをするためにジョニーは人波をわけてやつてきた。

歸りを急ぐ傍聴の人々の前に母子のこまやかな人情の場面が現れた。

氣の毒さうに振り返りながら、窃つと盗み見しては行き去るのであつた。子を思ふ心に變りのない母らしい女の、涙をさへ浸染ませて行く人もあつた。

己れの心から出た悪心——生活難に困り果てた結果の發作的悪心とはいへ、他人の馬を盗まうとした大それた行爲の、それに報いられる當然の懲罰まで、倅に身代りをさせてしまつた父ベントンは、今日の裁判の模様を、心の懊惱、胸の痛傷を壓へながら待ち詫びてゐたのであつた。その時、父のべ

ントンは、ジョニーのために、それは自分が犯した罪であると、いつそのこと潔よく名乗つてしまはうとやつと一つの決心がつくと、法廷に急いで出かけていった。

しかし、父が法廷に辿り着いた時には、最早判決が言ひ渡された後で、傍聴の人々はどやくと半ば吐き出されて来たところだった。

それを見たベントンは、後悔と悲歎の涙にむせびながら、今はどうすることも叶はず、たゞ廊下の壁に依つて、俸の出でくるのを待つよりほかに仕方がなかつた。

やがて、母を勞りながら出て来たジョニーの雄々しい、だがしかし、何處となくしよんぼりとした姿を見ると、父は、言葉の發しやうもなく、さめくくと泣きだした。

「ジョニーや、俺が本當のことを——白狀してしまへばよかつたんだ。」

父は、ジョニーにしつかり縋り付いた。

「お父さん、——約束をお忘れになりましたか？」

ジョニーの言葉は鋭く、それが却つてベントンの頭腦に、反省を促すやうにひびいてきた。

しかし、ジョニーは、優しく父を抱きながら、しみくと言つた。

「ねえお父さん、私はお父さんが、泥坊をしたと人に言はれるくらゐなら、いつそ終身懲役になつても構ひません。」

それを聞くと、父は絶え入るやうに泣きだした。

先刻から、愛人の身を心配して、可憐な女の身でやうやく此處までやつて来たイサベラは、かうして抱き合ふ親子の情に、つい貫ひ泣きをしてしまった。

イサベラの胸には、更に強く何物かが輝くやうに感ぜられた。それは悲しい中にも何か微笑まずには居られない一つの妙な感情であつた。

「矢ッ張りあたしが思つた通りだつたわ——ジョニーさんは、お父さんの身代りになつたのだ。」

——イサベラは、幾度も幾度も心のうちに繰り返した。ジョニーの男らしい、犠牲的な心に涙ぐましい程、戀慕ふ思ひが、こみあげて来るのをおさへることができなかつた。

やがて、時間が来て役人に注意されて、ジョニーは冷たい部屋の方に、足を運ばねばならなかつた。それをちつと見送るイサベラの眼には、しみくくと新しい涙が溢れてきた。

昨夜までは、賑やかで楽しかつたベントンの家も、一人去り二人去つて、五人の兄や妹は、母を殘してそれくその家庭に歸つて行つてしまつた。それだけではない、それまで自分の手許で、親切の限りをつくしてゐて呉れたジョニーが、忌はしい罪名の下に、冷たい牢獄に送られてしまつたといふことは母の老骨をえぐるほどの悲しみをあたへた。

老いたる夫婦の家庭には、寂莫、悲哀が音もなくやつてきた。

淋しい老境をかこむ身となつたベントン夫人は、今冷たい部屋の長椅子にもたれて、窓を洩れる夜の光に、人の世のはかなさを嘆いてゐた。

父のベントンも今は昔の面影はなく、めつきり衰へた胸に心の痛みを壓へながら、しよんぼりと部屋に這入つて来た。彼は妻のうちしをれた様子を見ると、放縦のかぎりをつくした過去の記憶が何處からともなくうかびあがつてわれ知らず悔悟の思ひに胸が苛立つのであつた。

ベントンは、涙を頬ににじませてゐる妻の傍にそつと寄つて、両手で肩を支へながら、靜かに語りはじめた。

「お婆さん。泣いちやいけなせ、なあ、泣くんぢやねえよ。何事も運命ぢやからな！」

「否え、お爺さん。わたしは泣いちや居りません。わたしは笑つて居りますもの……」

老婆は、夫から慰められ、ば更に悲しみの込み上げて来る胸を、ぢつと堪へながら、わざと笑顔を見せた。

「お互ひに、考へるのはよさうよ。」

「さうですとも、わたしはこれまでのことを、何事もあきらめて居ります。——どんな哀しいことでも、笑顔で堪へて來ましたもの、今更なんで考へませう。——」

しかし、老いの眼にはもう涙がたまつてゐた。

かすかに月光が窓から洩れる。その月光の中に白く浮ぶ一すぢの道を、村人の一人が、よち／＼と

歩み過ぎていつた。

さて冷たい、牢獄の鐵窓にもたれてゐるジョニーの胸には寂しい人生の相があり／＼とうつゝてきた。そして深い絶望の底から、絶えず雄々しい精神と、希望とが湧いて來るのであつた。

人の子として親に仕へた犠牲の喜びと、愛人イサベラを思ふ未來への憧憬——、ジョニーを生かす

ものはこの二つであつた。

父のベントンは、心の懊惱に堪へかねて、はては牢獄に繋がれてゐるジョニーの許に、夢遊病者のそののやうに、知らず識らず歩み寄つて行くことがあつた。こつそり、まぎれこんで鐵窓にもたれながら、薄暗い牢屋の中を覗くやうにして、父はジョニーの名を呼んだ。

その聲にジョニーは甦つたやうに、格子の傍に歩み寄つて來た。そして父と子は、鐵窓を隔てながらも、互に手と手を握り合つて、肉身のみに通ずる接吻を交すのであつた。

「ジョニーや、俺は、おち／＼眠ることさへ出來ない。——あのことを思ふと、狂人にでもなりさうだ。もう、悪運が盡きたと思はれる。俺との約束を取り消してくれ。俺はこの先き、とても堪へられない。——自首して出ようと思ふのだ。」

「お父さん、何を言ふんです。そんなことを決してなすつちやいけません。そんなことを。まあ、お母さんのことを考へて御覽なさい。——お母さんには、六人からの子供が御座います。私は、たつた

一人の身ぢやありませんか。——そればかりぢやありません。私たちのためと思つたら、あなたは黙つてゐて下さらなければならぬお身の上ぢやありませんか。私は私だけで済みますが、お父さんの不名誉となれば、それは子供たち全體の不面目になります。ねえ、お父さん、よくよく考へて見て下さい。」

ジョニーは、鐵の格子を固く握つて、諄々と父を慰める。

すると父は、ジョニーの心に、深く深く感涙して、再びそのことを言ひ張る勇氣もなく、首を垂れて、うら寂しくとぼくと歸つて行くのであつた。ジョニーは、鐵の格子に手をからめて、その後姿を何時までも見送つてゐた。

7

夜は、音もなく更けていつた。

ジョニーから慰められて、——慰められる毎に一層懊惱と寂寥の深さを味はひながら、家へ歸つて来た父のベントンは、哀れに灯るランプの光の蔭に身を置いて、しよんぼりと丸卓子の椅子に倒れかかる。またしても懺悔と後悔に耽るのであつた。

ベントンの心には、良心の苛責が、止め度もなく迫つて来る。彼は、書棚から一冊の寫眞帳を出して、それを懐かしさうに一枚づゝ繰り展げていつた。そして、その中のジョニーの頁を開いて見なが

ら、懺悔の祈禱をしみじくと捧げるのだ。

それから、その寫眞を抱き上げて、

「俺が悪かつた。さうだ俺が全く悪いのだ。ジョニー、許して呉れ、許してお呉れ！」

と、謔言のやうに呟いてゐた。何時までもジョニーの寫眞を抱きしめて同じ言葉を繰り返してゐるのであつた。

老婆は、もう寂しいベッドに潛り込んでゐたが、夜の更けてゆくにつれて、眼はひとりでに覺めていつた。そして、悲しいいろくの追憶が、犇々と胸に浮んで来た。

夜が更けてもまだベッドに來ない、良人の身を心配して、老婆は窈つと起きて、良人の悶え苦しんでゐる部屋に這入つて行つた。

老婆は、ベントンの傍に腰を下すと、良人の肩を抱くやうにして、

「お爺さん。貴方はわたしに泣いちやいけないと仰しやりながら、御自分で泣いていらつしやるぢやありませんか。」

ベントンは打ち消すやうに、

「俺は泣いちやゐない、だがメリーや、考へて見ると俺はとんでもない世渡りをして来たものだ！——何を仰有るのです。——あなた御自身をお責めになつちやいけません。——あなたは自分で精一杯のことをしていらつしたのですもの、あたしはそれで満足して居りました。」

老いたる妻は、老いたる良人の胸に顔を押しあてた。やがて、老婆は、氣を取り直して、「さあわたしが、熱いお茶をこしらへて参りませう。」と、言ひながら部屋を出て行つた。

締めようとして扉にもたれて、もう一度、良人の方をちつと見る妻の眼には、涙が一杯ににじんでゐた。

妻が立ち去つた後で、ベントンは机に置かれた、先刻の寫眞帳を抱き上げて、また同じやうに惱み悶えた。

——良心の苛責は、いろ／＼の幻想を、彼の頭腦に畫かせた。

それは、幼年時代のことで、ジョニーが逃げようとするのを引つ捕へて、さん／＼に毆打したことがある。ジョニーは、悲鳴をあげて逃げ廻つた。

それから、ジョニーに肩を抱かれながら、やさしく慰められて、自首しようとする決心も鈍つてしまひ、しよんぼりと歸らなければならなかつた自分の姿。

きれ／＼にくる幻想の明滅は、ベントンの心を救ひがたい懊惱に悶えさせた。

「ジョニー、許してお呉れ。」

ベントンは最後にかう叫びながら、その寫眞帳を握つたまゝ、そこにばつたりと倒れてしまつた。そして、何時までも起き上らうとはしなかつた。

——それは、再び甦ることのない、永遠の眠りだつた。

心盡しの紅茶を、妻が臺所で拵へてゐる時には、もう魂の去つたベントンは、冷い死骸となつてゐたのだ。

正面の扉を開けて、夫に紅茶を與へようと、寂しい中にも小さい希望の笑みを洩らしながら、這入つて来た妻は、それを見ると手に持つてゐた紅茶々碗をとり落した。茶碗はそのまゝ床に落ちて碎けてしまつた。老母は、手を舉げて人の助けを求めたが、誰一人來る人はなかつた。

老母は、還らぬ魂を呼びながらベントンの死骸に取り縋つて、止め度もなく流れ出る涙を拭きも得ず、悲歎のどん底に陥つてしまつた。

かうして時は過ぎて行つた。

母は子供たちの姿を追憶の中に、しみ／＼と描き出すばかりだ。

寄る年浪に、眼は霞んで、耳は聽えなくなつて来た。哀しく寂しい家に、たつた一人、老母は卓子に凭れて過去の追憶に耽つてゐた。

娘達の蹺音は、自分の身をめぐつて、時には微かに時には激しく、遠く消えるかと思つて、近く迫つては、寂しい心の底に響いて來る。

梯子段を駆け上つたり、駆け下りたりするレベッカとスーザン。——それは白衣の寢巻姿で、まだ幼ない頃の姉妹が、習慣のやうに、寝る前によく戯れ鬼ごつこの、過去の思ひ出であつた。

洋燈の灯も臙げに幻覺は幾度となく崩れた。

食堂に集つたアイザックを初め男の子等は、何か本の奪ひ合ひをしてゐる。戸の外に佇んで、その物音を聞き付けた母は、急いでそれを仲裁するためにやつてくる。――

その幻影は、――あり／＼と浮んだ子供たちの姿は、――その喧嘩をわけようとする瞬間、窓からくる冷やかな秋風の中に消えていつた。

一切が過去の思ひ出を辿る哀しい老婆の夢であつた。

幻影が醒めるかと思ふとまた現れ、現れるかと思ふと、また醒めた。

時は流れるやうに過ぎて行つた。

第三章 あ の 山 越 え て

1

ジョニーの刑期も無事に済んで、彼は漸く出獄を許されることになつた。

ジョニーは、一刻も早く母に會つて、悦ぶ顔が見たい、懐しい愛しい母に會つて語りたいたと、唯、母のこのみと思ひ續けた。

しかし、母の家に着いて、そつと入口の扉を押して這入つて見ても、そこには母の姿は見られな

つた。まして、現世を永へに去つた、父の姿の見られやう筈はなかつた。

母は、疲れてベッドに横臥りながら假睡の眠りに耽つて居たのである。――白髪はひどく眼立つて、

ジョニーの眼に映つた。それを見詰めたジョニーは、今更のやうに深い吐息を吐かずには居られなかつた。

母の枕邊に跪づいたジョニーは、靜かに母を呼んだ。母は、しかし倦み疲れた眠りを食つてゐるので、容易に眼を覺さうとはしなかつた。

白髪には、一筋々々に浮世の苦勞が刻まれてゐるやうに思はれた。ジョニーは、それを撫でながら、口を耳のあたりに寄せて、母の名を呼び續けた。

やがて母は、夢見るやうに、靜かに眼を見開いた。そこには、可愛い倅のジョニーが立つてゐるので、母は嬉しさのあまり氣を失ひさうに見えた。や、暫く見守つてゐたが、やがて、

「お前は、ジョニーぢやないか。」
と、體をもたげるのであつた。

「お母さん！」

ジョニーは、母に縋り付いて、母も亦ジョニーを抱きながら、嬉し泣きに泣くのであつた。

母は、涙ながらに言ひ續ける。

「何故お前は、私に手紙を寄越さなかつたのです。――私は、監獄の門の處で、終夜でも待つて居り

ましたのに。」

「お母さん。僕はお母さんを吃驚さしてあげようと思つたんです。」

「私はどんなに待ち詫びたか知れませんが、それにつけてもねえ、お父さんが永らへてゐて、今日の様子をみて下すつたらねえ。」

込み上げて来る感情の興奮に、母は瘦せた身體を顫はせた。

ジョニーの胸には、自分の居ない間に、父の亡くなつたことをはじめとして、過去のいろ／＼のことが走馬燈のやうに轉變して来た。

「お母さん。幼い時はかうしてよく抱いていたゞきましたね。——今日は私がお母さんを抱いて上げませう。」

ジョニーは、母を抱き上げて高く捧げながら、親の心を喜ばせようとつとめた。

「ねえ、お母さん。僕に變つたことをすつかり聞かせて下さい。——赤ん坊たちや、皆のものはどうして居りますか？」

2

やがてその日も暮れて、夜になつた。母は、毎夜聖書を讀んでは、お祈りをするのが、習慣になつてゐた。今宵は一層楽しく、張り詰めた心で聖書を讀むことが出来たのであつた。——倅ジョニーの

歸つて来たことを、神に深く感謝の祈りを捧げた。

それから親子は、盡きぬ話に、夜の更けるのも知らなかつた。

「時にお母さん、僕は面白くなつて、この町には居られません。——皆のものが僕の顔をじろく／＼見るんで、僕は狂人にでもなりさうです。」

「ほんたうにね。」

「世間つてやつは、何故こんな五月蠅いんでせう。いくら泥坊をしたと言つて、その罪の購ひをして、立派に監獄の務をしてくれれば、何もその上賣めたり、蔑視したりする必要はないぢやありませんか。——」

ジョニーは出獄後、近所のものや友だちが、自分を見ても相手にしてくれない寂しさをしみじみと訴へた。

ジョニーの述懐を聞く母親は……またしても愛する子のために泣かすには居られなかつた。

ジョニーは、言葉を續ける。

「ねえ、お母さん。僕はかうして、近所のものや多くの人から、馬泥坊だ、不徳漢だと侮辱されてゐるよりも、いつそこの土地を去つて、何處かへ行きたいと思ひます。」

「ジョニーや、お前の言ふことは尤もです。——わたしは、お前に何時までもわたしの傍にゐてくれとは言ひませんよ。わたしは、自分の寂しいぐらゐは辛抱しますから、お前は何處へでも行つて、立

派に身を立て、お呉れ。これからは大切な體だもの。」

「お母さん。よく言つて下さいました。——お母さんにはなんとも濟みませんが、僕には、どうしても世間の侮辱が、耐へられませんか、お母さんを置いて行く不孝の罪は、どうか、許して下さいまし。」

「——そりやあたしが、お前に居て貰ひたいと同じやうに、お前だつてわたしの傍を離れたくはないでせうが、自分が身を立てることだもの、西部へでも、何處へでも、自由に行くが好いよ。」

母とジョニーは、お互の心を思ひ遣るのであつたが、母の心は、切角自分の傍に歸つて来た倅が、また再び自分から離れてしまふことを考へると、深い哀愁に沈んでゆくばかりだつた。

夜が更けていつた。

母は、ベッドに這入つて眠つてしまつた。

ジョニーも、ベッドに這入つて今宵こそは久振りにゆる／＼と眠れると思つたか、神経が昂ぶるばかりで、どうしても眠ることが出来なかつた。

母も同じやうに、ふと疲れた眠から醒めると、よろ／＼と、ジョニーの部屋に這入つて行つた。

枕に頬を押し當て、眠らうとしてゐたジョニーの頬に、母は靜かに自分の頬を持つて行つた。母の眼からは玉のやうな涙が、流れ落ちた。ジョニーの頬に、その涙の雫が、母の心を語るやうに、燈火の光をとほして輝いた。

ジョニーは、翌日、兄のアイザックの家を訪ねた。アイザックは、恰度家にぶら／＼してゐたので、どこまでも心の一致しない兄弟もその日は久振りに對面したのであつた。

「兄さん。僕は、兄さんに御相談があつてやつて来たのです。どうも、今日の私の身の上になつて見ると、この町にあるのも面白くありませんから、僕は西部へ行つて、一働きしたいと思ひます。それについて、是非お願ひがあるんですが……」

「旅費かい、——金のことなら御免だよ。」

「否、金の話ぢやありません。——お母さんのことなんですが……」

「お母さんがどうかしたのか？」

「僕が西部へ行つてしまつた後は、兄さんにお母さんの面倒を見ていたゞきたいと思ひます。」

するとアイザックは皮肉に、ジョニーの顔をじろ／＼見ながら、

「僕は君の勇氣を愛してゐるよ。——君がお母さんの面倒を見ることにしたらどうだね。」

「それこそ僕が、やつて見よと思つてゐることなのです。」

「やつて見るんだつて？ また馬泥坊をかい？」

ジョニーは兄の嘲笑するやうな言葉を聞いても、ぢつと感情をこらへて、何處までも歎願的に、優

しい態度で言つた。

「僕は、働かうと思つてるんです。——西部へ行つて働く積りです。そして働いて取つた金は、毎月出来るだけお母さんに送ります。」

アイザックは、立ち上りながら冷やかに、

「百聞は、一見に如かずだ。——そんなことは見た上で信じよう。」

アイザックの妻は、正面の入口から、表情に弾力のない顔をしながら這入つて来た。そして良人とジョニーの會話を、隅の方に突つ立つたまま、聞いてゐた。

アイザックは立つて、窓際の方へ歩んでいつた。ジョニーも立ち上つて、帽子を持ちながら、やがて凜とした口調で、

「アイザック兄さん。幾年か後、僕が歸つて来て、その時、若しあなたがお母さんの面倒を見てゐなかつたら、僕は決して承知しませんよ。その時こそは心から覺悟をしてゐて下さい。」
彼は最後の言葉を残して、兄の家を出ていつた。

4

母の家に一番後まで残つて、面倒を見てゐた子のジョニーが、母を残して西部へ行つてしまつてからは、老いた母にはますます寄邊が少なくなつた。

「あの歳をして、お母さんがたつた一人で家の世話をするのは、到底覺束ない話だ。」

親を思はぬ子供たちの間にも、よるとさはるとその話が出た。そして、母は、チャアリー夫妻の家に引き取られて、寂しい月日を送ることになつた。

半年が過ぎた。

老いた母にとつては、また苦しい、遣瀨ない歲月であつた。

子供の時から好きな繪の道に進んだチャアリーは、今では立派な畫家として、世間から認められるやうになつてゐた。

チャアリーは、その日も畫室で、熱心に繪布に向つてゐた。母は、畫室に續く廣間を、掃除してゐたが、寄る年浪に、若い人達のやうに、はかなくしくは行かなかつた。それを見てゐたチャアリーの妻のルーシーは、焦れつたさうな態度で、母の手から箒を奪ひ取つてしまつた。

そして、卓子の上を手で撫でて見て、

「御覽なさい。この埃を。これでも掃除をしたんですか。」

と、老母を睨み付けてから、

「何をぐづくしてゐるんです？ 駄目ぢやありませんか。掃除と言ふものはかう言ふ風にするもんです。」

と、突慥食に叫んだ。そして、ひつたくつた箒を持つて四邊を掃きはじめたと思ふと、直ぐに箒を

其處へ投げ出してしまつた。

母は、やり込められて、おどくしながら、

「どうも年をとるとね、思ふやうに働けないものでね、どうか、堪忍してお呉れよ。」

再び箒を取り上げて、険しい眼で見ているルーシイの機嫌をとるやうに、おそろく床の上を掃いていつた。

ルーシイの荒々しい言葉が、今、繪布に向つて餘念のない、チャアリーの耳にも聞えてきた。チャアリーは、その言葉に、晝室から出て来て、

「おい、ルーシイヤ。そんなに、手荒なことを言ふもんぢやないよ。お母さんは、お年寄りだから、もつと優しくしてあげなければいけないよ。」

と、妻を宥めるやうに言つた。

だが、チャアリーは、さう言ひながらも、母に對する愛よりも、妻に對する愛の方が強かつた。それ故、左程母の心を思ひ遣る氣はなかつた。寧ろ妻の言葉が、當前であるかのやうに感じてゐるのであつた。

火曜日の朝のことだつた。

朝食の卓子の用意に、母は老いの身をひきずつて働いてゐた。卓子の上に置かれたコップの一つ一つに水を注いでゐたが、最後のコップへ注ぐ時に、ぱたりと白い卓子掛の布の上へ水を滴らして

しまつた。

それを見てゐたルーシイは、いきなり冷酷な言葉で、

「何んですあなたは？ 汚穢らしいぢやありませんか。私が遣るからようございます。あなたは見ていらつしやい。」

と、怒りながら、自分でそこにあつた皿を取つて、一枚つゞ竝べていつた。母は手持無沙汰の態で、それを見てゐた。ルーシイは、怒つた餘りに勢ひ好く皿を竝べたので、その一枚を取り落した。微塵に碎けた。

ルーシイは、ますます、疝癩を起して突癪食な言葉で、

「それをお拾ひなさい。」

と、まるで奴隸でも扱ふやうに、この優しい母に、残酷に當り散らした。

水曜日が来た。

チャアリーは、用があつて外出してしまつた。老母は、また、部屋の掃除をさせられてゐた。

ルーシイは、夫の留守を幸ひに、鏡に向つて胸もあらはに、化粧に餘念がなかつた。化粧が出来ると、抽斗から小さな箱を取り出した。それは立派な腕時計と、寶石を鏤めた襟飾とであつた。

ルーシイは、それを眺めながら、それをくれた外の男のことを思ひつゞけてゐた。

その時、電話のベルがけたたましく鳴つた。老母は、いそぐと出て行つた。

ルーシイは、慌しく電話口に駈付けると、母が出ようとしてゐるので、不機嫌に邪慳な言葉で、「あたしは、決して電話の取り次ぎをしないやうに、あなたに言つて置いたぢやありませんか？」慌て、受話器を奪つて電話を掛けて寄越した男とうれしさうに話してゐた。電話で語りながら傍にある老母のことに氣が付くと、ルーシイは、母に當て付けるやうに、

「あたしが今、老ぼれ猫を追ひ拂ひますから、一寸待つてゐて下さいな！」と言ひながら、

「あたしの寢室に鉛筆がありますから、それを持つて来て頂戴。」

母は命令されるまゝに、ルーシイの寢室に行つてあちこちと捜しまはした。

この間に、ルーシイは、男との約束を取り換はしてしまつた。

「まだあの鉛筆を捜して居りますわ。ぢや十分経つたら彼處でお遇ひませうね。きつとよ。」

ルーシイは、浮々とした調子でしゃべりつゞけた。

老母は、まだ部屋中をうろくして鉛筆を捜してゐたが、一向見當らなかつた。その時、先刻ルーシイが出して置いた、鏡の脇に無造作に置かれてある腕時計と、ダイヤ入りの襟飾りとが、老母の眼に物珍らしく映つた。

老母は、ひき入れられるやうに、それを手に取つて見たが、老母の胸には、かうした立派な品物を妻に買つてやるのも、みんなチャアリーの親切な心からであると思ふと、悪い氣持はしなかつた。そして、物珍らしく取り上げた襟飾りを胸のあたりにつけて見た。

そこへ、ルーシイが、急いで戻つて來た。そして、その有様を見ると、狂氣のやうに怒りながら、「何ですあなたは、誰がこんなものをいぢれと言ひました。あたしは、たゞ鉛筆を捜せと言つただけぢやありませんか。」

老母は、その劍幕におろくししながら、悲しさうにルーシイを眺めた。

ルーシイは、駈けよつて、寶石を手にとりながら、鋭く、

「毀しちやつて！」

「いゝえ、わたしは結構なものと思つてちよつとつけて見ただけなんですよ。」

老母がいかにも、辯解をしても、ルーシイの耳には這入らぬやうに、彼女は猶も狂氣のやうに、怒つた。そして、鏡臺に置かれた白粉のポットをとるが早いか、

「この老ぼれめッ！」

と、口ぎたなく叫びながら、それを母の顔に投げ付けて、ベッドの端に突つ伏して泣き崩れてしまつた。

老母は、忽ちうち萎れて、投げ付けられたパウダーを拂ひながら、部屋を出て行かうとした。

チャアリーは、この時出先から歸つて來て、何の氣なしに部屋へ這入つて來た。四邊の様子が變なので、チャアリーは直ぐにこの部屋の出來事を直覺してしまつた。

チャアリーは、毎日に虐待される母の心も考へない譯ではなかつたが、泣き崩れてゐる妻の姿を見

ると、愛しさが先に立つて、先づ妻を慰めようといふ氣になつた。

「ルーシイや。いけないよ。——お前はそんなことを、本氣で言つたんぢやあるまいね？」

さう夫から言はれると、妻はヒステリックに、

「また貴方のお母さん眞眞がはじまつた！」と、再び口を尖らせるのであつた。

しかし、チャアリーは、悄氣返つて部屋を出て行かうとする老母を見ると、堪らなく氣の毒になつて、そつと肩に手をかけて慰めるのであつた。

「お母さんが出て行くか、それともあたしが出て行くか、二つのうち何方か一つに致しませう。」

と、ルーシイは、再び鋭い聲で叫んだ。

チャアリーは、無言のまゝ、妻の顔を見た。すると、彼女の態度をだん／＼許しがたいものゝやうに思はれてきた。

ルーシイは、それを見ると自暴自棄のやうに、

「ぢや、ようござんす。お母さんを置いて上げて、たんと可愛がつてお上げなさい。あたしは、出て行きますから。」

言ふが早い勢よく立ちあがつた。

チャアリーは、それを制しようとしたが、ルーシイは、それにも關らず、部屋の外へ出ていつてしまつた。そして、扉の處で振り返りながら、

「でも、あたし、これだけ申し上げて置ませう。——あたしは出て行きますが、お母さんがこの家を出て行くまでは、決して歸つて來ませんからね。」

ルーシイは、こんな最後の言葉を殘してから、振り返りもしないで出て行つた。

母は、慌しく、

「ルーシイを呼び戻してお呉れ、ルーシイを出て行かちやいけない、お前の家内だもの！」

「お母さん。お解りでせう。」

チャアリーは、苦しい立場を訴へるやうに、母に言つた。

「いゝよ、チャアリーや心配することはありませんよ。——お母さんは心得てゐますからね。」

「お母さん、お許し下さい。」

チャアリーは、母をしつかり抱きながら囁くやうに言つた。

「いゝよ、——心配しないで、わたしは、娘のルーザンの家へ參りますよ。」

ルーザンの家は、あまり豊ではなかつた。それに夫もあまり働きのある方ではなかつたし、夫婦の申には、子供まで出來て、可成りの生活難を感じてゐた。

一家の者が夕食時の粗末な食卓を圍んでゐた時に、チャアリーの家を追はれた老母は、ルーザンの

家を訪れて、今そつと入口の扉を開けたところだつた。

孫は、稀らしい客を嬉しさに迎へたが、喜んで迎へる筈の娘のシーズンは、あまり悦ばしい顔を見せなかつた。寧ろ、母の來たことを夫に對して濟まないやうな氣がしたので、いろ／＼その場の手前をつくろひながら、

「お母さん。あなたは何故こんなに突然遣つていらしたんですの？」
と、不愛想な顔をして訊いた。

「だけど、わたしが來ることは、手紙でお前に知らせて置いた筈だよ。」

「そりや私も知つてますけれど、私の所には部屋がないんです。お母さんは何故チャアリー兄さんの家を出て來られたのです？ あの家には澤山部屋があるんですもの」

「シーズンや、ほんの狭い隅ッこの所でいゝんだよ。——その隅ッこに置いて呉れ、ばそれで澤山なんだよ。それにわたしは、お前のお手傳もしようし、赤ん坊の世話もして上げますよ。」

母の方から下手に出て、漸やく頼むやうにしてシーズンの家に置いて貰ふことになつた。シーズンも爲方がないので、厄介物とは思ひながらも、當分の中といふ前置を附けて、母を家に置くことにしたのだ。

夫は、まだ食卓に向つて、頻りに食事をしてゐた。母は、シーズンに伴はれて、夫に引合された。

その卓子の傍の椅子に腰を下した母の膝には、無邪氣な孫が悦ばしさうにもたれかゝつて來た。夫

は、心から悪い性質ではないにしても、妻の母に親切を持つ程の善良な男でもなかつた。況んや、餘り豊でない生活なので、自分は甘さうな暖かい食事をひとり取つて居ながら、他人の母には食物を與へようとはしなかつた。

「あなたは、もつと早くやつて來ればよかつたんです。——さうすりや、何か食べ物もありましたものを。」

老母は、ひもじさを堪へながら、

「なあに、わたしは、今夜はお腹が空いてゐません。——朝御飯まで待ちませうよ。」

老母は、そつと眼をしばだ、きながら言つた。

まだ自分の夫ベントンの生きてゐた頃には、子供たちを集めて誕生日を祝つた時に、娘の婿として馳走をした男にまで、かうした扱ひを受けなければならぬ今の身の上を考へると、老母は深い溜息を洩さずには居られなかつた。けれども、神に縋らうとする固い精進の心は、人を怨んだり、愚癡を零すやうなことは、哀しい境遇に落ちた今日の場合になつても、決して抱くやうなことはなかつた。

チャアリーの家では、老母が出て行つてしまつたので、妻のルーシイが戻つて來て、二人は再び楽しく抱き合つた。

チャアリーは、母に對する愛よりも、妻を思ふ戀しさを、遙かに強く感じた。母を不惑に思ひながらも、その母を虐待する妻を愛しいと思ふ氣持の方が強かつた。

アイザックは、二通の手紙を受け取った。それは言ふまでもなく、西部に行つて働いてゐる弟のジョニーからであつた。アイザックは、今ゆつたりと椅子に腰を下して、それを讀んでゐた。

アイザック兄上様

お母さんにあげる四十弗の小切手をこの中に同封して置きます。

あなたは、僕が、こんなに一生懸命で働いてゐることを、認めて下さらなければいけません。

小切手の額面は四十弗で、ユーージェン国立銀行から、振出人がジョニー・ベントンで、受取人がアイザック・ベントンとなつてゐた

手紙を讀みながら、アイザックは小切手を右手でそつとポケットに入れ、その手紙は、讀み終ると無造作にくしゃくしゃに丸めてしまつた。

それから、もう一通の手紙を取り上げて讀み始めた。それは、千九百十九年七月十七日、オレゴン州ユーージェン發信のスタンプのある——ジョニーから母宛てた手紙であつた。

フエヤーフィールド

アイザック・ベントン方

メリー・ベントン様

——と、書いてあつた。

懐しい母上様

僕は、ずるぶん長くお母様のお便りに接しません。ずるぶん長いことのやうに思はれます。アイザック兄さんからの手紙で、お母様の眼が追々快方に赴いてゐられることを知り安心いたしました。僕は、あの懐しい鼠色の眼が、早く快くなつて、お母様が今までお手紙を下さらなかつたかはりに、これからどしどしお手紙を下さるやう、そのみをお待ちして居ります。では切角御自愛なさいませ。

これを讀み終ると、アイザックは、冷やかな笑ひを唇に浮べた。そして、ずた／＼に破いてしまつた。

ジョニーから送る小切手は、かうしてアイザックの衣嚢を暖めるに過ぎなかつた。まして、母に宛てた手紙が、母の手に渡る筈なく、従つて、母からジョニーに對して、一本の手紙の返事もなかつたのは、無理もないことであつた。

そこへ二人の子供が、喧嘩をしながら這入つて來た。妻は、食事の支度をしてゐたので、それを仲裁しようともしなかつた。アイザック夫婦は、親として子供を導くことさへ出来なかつたのだ。それ

にもか、はらず、壁の上には、「神は愛なり」といふ額を掲げて、神の道を説く牧師なのだ。

それから二三日後のこと、アイザックは、母の様子を探らうとして、スーザンの家を訪れた。スーザンのところでは、尠なからず迷惑をしてゐるところから、アイザックの來たのを喜び、スーザンの良人は、

「アイザックさん、僕は自分の分擔以上のことまでしましたよ。もう半年にもなりません。——この上お母さんを置いて上げることは、僕には到底出來ないと思ひます。どうか君、引き取つて、君の方で世話をして呉れ給へ。」

「君は、僕が母を引き取るくらゐなことは、何でもないうやうな口吻だが、僕だつて富豪ぢやないんだからね。」

アイザックは、容易に母を引き取らうとは言はなかつた。この押問答を聞いてゐた母は、

「アイザックの言ふことは尤もに違ひない。——一家の心配もあることだし、——私はトーマスと、娘のレベッカのところの手紙を出しませう。——アイザックや、その返事が來るまで、どうかお前のところに置いておくれ。——ほんのちよつとの間、あの子供たちの、何方か一人が、私を迎へに來て呉れるまでね。」

かう言はれて見ると、如何に自分勝手なアイザックでも、厭と言つて拒むことは出來なかつた。「ちよつとの間なら、來てゐても構ひませんよ。」

「ぢや行つても、差支へないといふのかい？」

「お母さん。それがよう御座いますわ。あたしのところなぞにいらつしやるより、アイザック兄さんの家の方が——。」

スーザンも、良人に對する義理から、一刻も早く母を何處かへ遣りたい心から、一生懸命になつてゐた。

「ぢや、私は、アイザックの家に厄介になることにしませう。」

アイザックは、不愉快な顔をしながらも、それを拒むことは、自分の良心に答めて出來なかつた。

いよく母は、この家を去ることになつたが、孫だけが、それを悲しんで、縋りついて來るのであつた。

アイザックの家に引き取られてからの母の生活は前よりも一層寂しくなつた。或る朝のこと、母はその身にとつてはこの上もなく待ち詫びてゐた、トーマスとレベッカからその手紙を同時に受取つたのであつた。

手紙を手にした母は、嬉しうにアイザックに知らせに行つた。アイザックは、先づ自分の責任も逃れることだし、明日にでも母をそつちの方へ遣つてしまふことが出來ると、母と共にその手紙を開

いて読みはじめた。

懐しいお母様。

お手紙を有難く拜見いたしました。

そのお手紙に就きまして、妹のレベッカと只今相談致しましたところでは、

お母様を此方へ置いて上げたいのは、山々で御座いますが、何しろ當地の氣候が大變寒いので、お母様の居心地が甚だ悪からうと存じます。それにお母様が寒い氣候に勝てないことを、私は思ひ出しました。

どうか悪しからずお思召し下さい。また書きたいことが澤山御座いますが、取り急ぎましたからこれで失禮致します。

あなたの倅のトーマスより

それを読み終ると、母は他の一通を取り上げた。

おなつかしい母上様

お手紙を確かに頂戴いたしました。お便りを聞かしていただいて、本當に嬉しうございました。

此方にいらつしやつて下されば好いと存じます。けれどもお母様。

いくら御一緒に置いて上げてたく存じましても、私たちは第一番に、お母様の健康のことを考へなければなりません。當地の氣候はほんたうに熱いのでございます。

それに妾は、お母様が、熱い氣候に勝てないのを、好く存じて居りますもの。

そんな譯で、あたしは、お母様が、アイザック兄さんのところにいらつしやるやうにお勧め申します。あの家は、きつと涼しくて居心地が好いやうに思はれます。

娘のレベッカより

読み終ると、母はあまりの情なさに呆然としてしまった。——悲しみを乗り越えた可笑味をさへ感じるくらいであつた。それは、隣り同志に住んでゐながら、一人は寒過ぎるといふし、一人は熱すぎるといふ、何といふ滑稽な言ひ譯であらう。自分が厄介になるのを、それほどまでに嫌ふのであらうか？ と、考へて來た時、母は人生の果敢さを、此處に又まぢく感ずるのであつた。

アイザックは、この手紙で、この先當分母を置かなければならないことを知つて、少なからず不快な表情をした。

それを見た母は、自分の立場を訊ねるやうに、

「アイザックや、かうなつてしまつてみると、わたしはお前がゐなければどうすることも出来ないがね？」

「スーザンの家では、あなたはほんの暫くの間だけ、此方にいらつしやると仰しやつたではありません

んか。」

「でもアイザックや、わたしは如何すればいゝんだね、何處へ行けばいゝんだね。」

アイザックは、先刻から無言の儘、それも不機嫌な顔をして、この場の様子を見てゐる妻と、思はず顔を見合せた。

老母は、歎願するやうに、

「アイザックや、わたしがあても、お前に大した費用は掛けませんよ、わたしは働いて、自分の食扶持ぐらゐは稼ぎますから。」

「それぢや、何故あなたは、チャアリーカスーザンのところに一緒にゐて、そこで何の稼ぎも出来なかつたのです。」

アイザックは、冷やかな態度で、平然として言つた。

「私はお母さんに、行つて下さいと言つてゐるんぢやありませんよ。——貴女を置いて上げることが、出来たら好いと思つてゐるのです。」

アイザックは、靴の音をコツ／＼させながら、部屋中を歩き出した。そして、突慳食にかう言つてから、ちつと母の顔を視おろした。

母は、アイザックの態度に、もうこれ以上歎願する氣力もなく、そのやさしいおだやかな神様のやうな眼にも、幾分怒氣が現れてきた。けれども、その怒りを誰に語る相手もなく、六人の子供を持ち

ながら、今は孤獨の思ひに悩まされてゆくよりほかには、何の手段もなかつた。

「アイザックや、お前そんなに邪慳に當らなくとも……。わたしはお前が、そんなにまで辛からうとは思ひませんでしたよ。——わたしは落ち着く先を見付けます。——彼方の方は、屹度わたしを心よく迎へて呉れませう。——あの養老院の方々は、わたしを自分の食扶持のために、働かして呉れるでせう。」

母の思ひきつた言葉は、如何に情に乏しいアイザックの耳にも、哀しく響いて来たにちがひなかつた。彼は、何とも言ふことが出来ずに首をうなだれてしまつた。老いて六十餘歳、頼るに人なく、今は根強い母の愛も一時に崩れようとして来た。

その哀しい老母も、無意識に手に觸れた聖書に、「神は我が力なり」と、教へられては、絶望もやがて信仰の光となつて、彼女の心には、神に縋る時の平和と幸福とが、しみ／＼と潮のやうに寄せて来るやうにさへ思はれるのであつた。

いよく、老母は、養老院へ自分だけの食扶持を求めに行くことに覺悟をきめたのであつた。

山を越えて、養老院へ。

アイザックの家を出て来た母は、紙に包んだ粗末な荷物と、聖書を抱へながら、イサベラの家に近

い路を、老の身のはかどらない歩調で、とぼくと歩いていった。

そこへ恰度、イサベラが出て来た。そして、養老院へ行くことになつた一部始終を聞いて、イサベラは涙の眼に老母を視詰めながら親切な言葉で、

「行つてしまつてはいけません、ジョニーさんが歸つていらつしやるまで、私の家で氣樂にしていらいつしやいまし。——私は、あなたに来てゐていたゞけるのが、どんなに幸せだかわからないと思つて居ります。」

「いゝえ、——貴女のお言葉は、老の身にどんなに嬉しく聞えませう。ですけれども、私は覺悟をして出て參りました。私は、あの養老院へ參ります。その後は、誰方様にもお會ひ申しません。」

老母の決心は固かつた。イサベラの熱心もそれを強ひて止めることは出来なかつた。老母の顔には、養老院へ行くのが自分の定まつた運命でもあるかのやうに、何の苦惱もなかつた。今は、むしろ、一つの安心をさへ見せてあるやうに見えた。そして、イサベラの親切な心を厚く謝して、老母はとぼくと別れて行つた。その後姿は、その世で見る哀しさの中の、一番哀しいものであつた。イサベラは、眼に涙を一杯溜めて、だん／＼遠ざかつて行く老母の姿を見送つてゐたが、終ひには涙で何も見えなくなつてしまつた。

老母は、遠く通じてゐる廣大通りを、哀れな姿で、一人しよんぼりと養老院へ、老いの歩みを運んで行くのであつた。

彼方の低い山の向うに、森の繁みが見える。その森こそは、老母が最後の粥を求めて行く養老院なのであつた。其處には、世にも哀れな人々をのみ待つてゐる安住の地があるのであつた。

歩み疲れた老母は、黄昏の色に沈んで行くその森を遠く仰いで、丘の上に茫然と佇んでゐた。

9

西部にいつて、働いた甲斐があつて、ジョニーは、可成りの成功をして歸つて来た。

ジョニーの心に、希望の輝きを與へるものは、真先に、母に會つて、母の悦びを見る時の喜びであつた。

ジョニーは、張り詰めた心で、我が家に歸つて来て、そつと扉を開けて中に這入つた。その瞬間、彼の顔色は失神したやうに一變した。破れた部屋に何物もなく、唯真中に、朽ち果てた机が一つ、轉つてゐるといふだけで、その破れた模様から見れば、長い間人の住つた様子もない。かびくさい嫌な臭ひだけが、鼻の先に迫つて来るだけだつた。

ジョニーは、母の名を呼びながら、あちこちと捜して歩いた。——だん／＼奥の部屋に這入つて来ると、壁は落ちてそこから細い外光が流れ込んでゐるのであつた。その薄暗いところに、幼い時から見覺のある、母の始終身につけてゐたショールが落ちてゐた。ジョニーは、それを見ると驚きと悲しみが一時に込み上げて来て、胸が一杯に塞がつてしまつた。熱い涙が頬のあたりに、ぼたり／＼と傳

はつて来た。そのシヨールを取り上げて、

「お母さん、許して下さい、私は知りませんでした。」

かう強く叫びながら、しみじみとそのシヨールに接吻した。

やがて、ジョニーの胸には、アイザックを怨む憤怒の情が、火のやうに燃えて来た。そして急いで、彼はアイザックの家へ出かけた。

アイザックは、ジョニーの歸つて来たことを知る由もなかつた。月々ジョニーから送つて来る金を着服しては、自分の腹を肥して、弟の馬鹿正直を冷笑してゐる彼であつた。今日も、正午に近い時を、麗かな光の流れ込む窓に面した机に向つて、林檎を食べながら、宗敎家にはそぐはない邪念に耽つてゐたし、妻は、玄關の脇の芝生に、揺り椅子を出して、それに腰を下して、餘念なく外光を浴びてゐた。

ジョニーは、その時、突然アイザックの家に這入つて来た。妻はそれを垣根越しに見付けた。ジョニーの慌しい様子に、アイザックの妻は何事か起つたかと、直ぐ悟つた。

妻が、アイザックにジョニーの来たことを知らせようとしてゐる時、ジョニーはアイザックの眼前に、血相を變へて現はれた。

「兄さん、お母さんはどうしたんです？ お母さんの身に何か變つたことがあつたんぢやありませんか？」

アイザックは、ジョニーからかう詰問されたので、餘りに唐突なので、その場の返事にどきまぎしながら、たゞ無言で弟の顔を見守るばかりであつた。そしてどうにかして、その場を外さうとして立ち上つた。ジョニーは、兄の洋服の端を確りと握りしめながら、

「何か變つたことがあつたのなら、何故、手紙で知らせてくれないのです？」

「何も變つたことはないよ、お母さんは——、無事だよ。」

口籠りながら、アイザックは言つた。

ジョニーは、「無事」といふ言葉を聞いて、やつと安心したかのやうに、握りしめた洋服の端を放してから、にこやかな言葉に變つて、

「さうでしたか、ぢやお母さんは、何處にゐるのですか？」

アイザックは、それで、幾分落着いたらしく、やつと腰を下した。

「お母さんは、その何だよ、養老院へ行くと云つて、承知しなかつたんだよ。」

「養老院？」

ジョニーの表情は見る見るうちに一變した。

「チャアリーは、お母さんを嫌だと言ふし、スーザンはお母さんを養ふ程の力もなかつたし、その上お母さんは、この家にゐたくないと云つたものだから、僕はなんとも、仕様がなかつたんだ。」

アイザックは、こんな辯解的な言葉を、自分勝手な理窟を付けて、おそろしく言ひだした。

ジョニーの顔色は、苦痛と憤怒のために激昂してきた。

「何故養老院なんかへやつたんです？ 西部から送つた金は、一體どうしてしまつたんです。あの金で、何故お母さんのゐたいといふところに、やつて下さらないのですか？」

かう追窮したジョニーは、興奮して来る怒氣をその上堪へることは出来なかつた。アイザックの顔をぢつと見てゐると、無意識の間に、拳が喰ひだした。ジョニーは、矢庭に一撃を見舞つてアイザックをその場に倒してしまつた。アイザックも負けてはゐない。二人は掴み合つて喧嘩をはじめた。

「俺は、『あの山を越えて、養老院まで』貴様を曳き摺つて行つて、お母さんの前に、跪つかせて謝罪させるんだ。」

卓子に打つかつて倒れるアイザックの上のし懸りながら、ジョニーは、かう叫びつゞけた。

アイザックの妻は、おどろくしてこの様子を見てゐたが、留めようとするジョニーから鋭い眼で睨まれた。アイザックは腹匍ひながら、逃げようとする、ジョニーは容赦なく乗り懸つていつた。

「どうだ、今、鹿爪らしい聖書の文句を言つて見る元氣はあるか？ あるなら言つてみる！」

それからジョニーは、アイザックの襟首を掴んで、
「貴様は聖書の十誠を知つてゐたな。今は知らぬとは言はさぬぞ、だが十誠の中唯一つ貴様が言つたことのない誠がある。」

アイザックの妻は、今は良人の一大事と慌しく駆け出して、近所の人々にその有様を告げた。

「——『爾の父母を敬へ』といふ誠だけは、貴様が一度だつて言つたことのなかつた文句だ。」

ジョニーは、かう言ひながら、復讐的に、アイザックを曳き摺つて、家の外に出ていつた。

それから、大通りを力まかせに曳き摺つて行つた。

アイザックの妻に告げられて、近所の人たちは一人集り、二人集つて、ジョニーを取り捲きながらも、どうすることも出来なかつた。唯、ワイ／＼言ひながら、跡から従いて来るばかりだつた。

辻々から、野次馬が出て来て、中にはアイザックを殴る男もあつた。兄を曳き摺つて行く弟を罵るものもあつた。またアイザックの常日頃を知つてゐる男は、さうされるのを當然のやうに、大聲を揚げて、ジョニーに味方するのであつた。

アイザックは、曳き摺られながらも、猶反抗しようとしたが、西部仕込のジョニーの腕力には、到底及びもつかなかつた。かへつて反抗するごとに殴られてしまふのであつた。

群集に圍れながらジョニーは大聲を揚げて、

「私は、此奴を養老院へ連れて行くんです。そこには、此奴が追ひ出した母親があるんです。——たとひ此奴が途中で死なうとも、私は曳き摺つて行くんです。」

「私が毎月々々、母親に送つてゐた金を、どうしたか此奴に訊いて下さい、此奴に訊いて下さい。」
彼の聲は群集にうつたへるのではなしに、天にうつたへるやうにひびいた。ジョニーは、養老院に向つて、大道を駆けるやうに、今は抵抗する力もないアイザックを無理無體に曳き摺つて行くのであ

つた。

それを見た、近所の人たちの一人は、慌しくイサベラのところに行つた。

イサベラは、それを聞くと、その男と一緒に、まつしぐらに駈け付けて来た。

「ジョニーさん、そんな亂暴なことをするもんぢやありません。飛んでもないことです。」

イサベラは、ジョニーの手に縋りながら、叫んだ。けれども、忿怒に激昂してゐるジョニーの耳には、その言葉すらも這入る餘地がなかつた。ジョニーは、アイザックを蹴飛ばし、張り飛ばしながら、曳き摺つて行くのだつた。

イサベラは、強く、ジョニーにしつかり縋り付いて、

「ジョニーさん。あなたは何といふことをなさるんです？ どうか氣を落ちつけて聞いて下さい！」
自分の腕に、しつかりと噛りついて、やさしい女性の聲で言ふ言葉が、興奮し切つたジョニーの耳にもやうやく聞えて来た。ジョニーは、その言葉の主を見た時に、再び言ひ知れぬ哀感と喜悅とが、一緒になつて胸に湧いて来るのを覺えた。ジョニーは、イサベラの懐しい顔を見守らうとした。すると、腕の力も次第に緩んで来た。

イサベラは、やさしく、

「ジョニーさん、何だつてこんなことをなさるんです。——お母様が御覽になつたら、屹度御心配をなさるに違ひありません。」

母が心配するといふその言葉を聞いては、ジョニーはこの上、アイザックを曳き摺つて行く氣になれなかつた。

ジョニーはそこにアイザックを投げ棄てるやうにして、イサベラに慰めらるるがまゝに、あつけに取られて見送る群集に背を向けて、イサベラと楽しく語りながら、一二丁程も歩いて行つた。

「あなたは、これから養老院へ行つて、お母さんをつれていらつしやい。あたしは、お家の用意を致しますから。」

それは聞くも嬉しい心盡しであつた。愛人イサベラの眞心からの言葉なのであつた。

その言葉に、ジョニーは勇みたつた。そしてイサベラと別れて、道を駈け出した。やがて、反対の方向から、駈けて来た二頭立の馬車を呼び止めた。

ジョニーは、それに乗ると、馭者に命じて、まつしぐらに養老院を指して走らせた。

アイザックは、殴ぐられたり、曳き摺られたりして、洋服は破れるし、腰は痛むし、びつこを引いて、妻に抱へられながら、自分の家へ歸つて行つた。

ジョニーの馬車が、山を越えて、眞直ぐに、やがて養老院の前に来た。

ジョニーは、もどかしげに、馬車の止るのも待たずに飛び下りて、柵を乗り越えて、養老院の入口

に突つ立つた。

案内を乞ふ暇もなく、中に這入つたジョニーは、梯子段の脇に冷やかな容貌をして立つてゐる養老院の世話女に向つて、

「メリー・ベントンと言ふ夫人がある筈ですが、私は迎へにまゐりました。」

と、おそろしい剣幕でたづねた。

その女は無愛想に、廣間の方を顎で知らせた。——そこには、生活に疲れ果て、よぼくとした一人の白髪の老婆が、這ふやうにして床に雑巾掛をしてゐた。

それを指差されたジョニーは、世にも同じ境遇の老婆があるものかと思ひながら、その老婆に訊ねようとして近寄つて行つた。覗くやうにして横顔を上げくと見たジョニーの眼から、電光のきらめくやうに、ある強い光が流れた。

「お母さん——」

ジョニーは、大聲に叫んで、老婆の傍に置かれたバケツを蹴飛ばすが早い、老婆を掬ふやうにして抱き上げた。

言ひ知れぬ哀しみは、母に邂逅つた悦びの心まで壓へつけるほどに、彼の胸に渦巻いて來た。

「お母さん！」と呼ばれて、老母はたゞ、何が何やら、まじくと、その男の顔を見詰めてゐるばかりであつた。やがてそれが、一日として思はぬ時のなかつた、可愛い倅のジョニーであることを知りた時、母は呼吸も詰るばかりに、歡喜の情に顫へるのであつた。

涙、涙、

それこそ悦びの涙、

感謝の涙、——

母は、幾年かこの方、唇にしたことのない微笑を、今此處に、り返して悦びの涙と共に味はつた。子は、老いた母を思ひ、母は子を思ふ。かうした母子の情の現はれを眼のあたりに見ては、冷やかに笑ふ養老院の女の眼にも、温かい人情の涙がにじんで來た。

「私は、私の母を連れて歸ります。」と、言つて、ジョニーは母を抱きつゝ、いろくいな眼で見送る養老院の人々に、幸福と、勝利と、歡喜の一瞥を残しながら、先刻の馬車に母と並んで乗つた。

イサベラは、破れ果てた母の家に來て、人夫を督勵して、落ちた壁は塗り變へ、窓掛は新しく張り、床は掃除して、兎も角も元のやうに人の棲める家にして待つてゐた。

スーザンの家には、イサベラに命じられた人夫が來て、

「濟みませんが、貴方のお母さんが又お使いになるやうに、お母さんのお道具を元のところへ持つて行きます。どうか御承知を、——」と、言ひながら、卓子、食器などを、片端から持つて行つた。

それは、アイザックの家でも同じことであつた。アイザックは、妻に助けられて、やうやく家に歸つて来て、窓際の長椅子にへとくになつて腰を下したところへ、人夫が大勢やつて来て、先刻と同じやうな言葉の下に、家財道具を持ち運んで行つた。

それを眺めながら、拒むことの出来ないのは、その以前、母の家から許しもなく、勝手に分配して持ち運んで来たからであつた。

イサベラの心盡しは、忽ちのうちに現れて、破れた家も見違へる程立派になつた。また、ジョニーや外の兄弟達が幼い頃の、母の家そのまゝの面影を偲ばせるものとなつた。

窓外の新緑は晴れ晴れと雨に輝いた。青葉の道は遠く遙かに續いて、六月の空は燃えるやうに美しい。その美しい緑の道を、母と子に乗せた馬車は、轍の軋り、蹄の音も軽く、黒奴の馭者に手綱を取られて、一散に駆けてきた。

ジョニーは、母のために町でいろくんの買物をした。そしてイサベラが待つ、支度の出来上つた家に、母を伴つて来た。

ジョニーに案内されるがまゝに、母は物珍しさうに家の中へ這入つて行つた。部屋の中の總ては、見るもの、手に觸れるもの、何一つとして思ひ出の種とならないものはなかつた。——總てが一生の

追想であつた。今となつては總てが輝くばかりに美しい追想であつた。

部屋の隅の棚に飾られた玩具を見ると、母はその中の小さな靴を取つて、

「お前はこれを感じてゐますか？」

と、ジョニーに示した。ジョニーが頷くを見ると、母は猶も言葉を繼いで、

「これは、お前が七つ歳の時の誕生日のお祝ひに、わたしが上げたものですよ。——お前は何時も、會社の註文取りになりたがつてゐましたものねえ。」

それから、小さな鐘の玩具を手にとつて、

「これは、倅のアイザックのものでした。あの子がこれを御褒美に貰つた日を、今でも覚えてゐますよ、あの子は、まだ八歳の時でした。あの十歳を覚えてゐたので、これを貰つたのでした。」

さう言ひながら、ジョニーの靴とアイザックの鐘とを並べて棚の上にならべた。

ジョニーは、母がかうして、兄のものと一緒に自分の玩具を並べたことを、ちよつと不満に思つたので、母が傍を向いてゐる間に、兄の鐘を下の段に置きかへてしまつた。兄に對する反感は、かゝした些細な點にも現はれてゐた。

この時、イサベラは、包みきれない悦びを胸に秘めて、靜かに這入つて来た。

「ジョニーさん、またかうしてお目にかゝれて、わたしどんなに嬉しいか知れません。」

ジョニーは、固くイサベラの手を握りしめながら、母に向つて、

「お母さん、この方を覚えていらつしやいますか？」と、言つた。

母は、感謝の意を湛へながら、

「わたしは、よく存じて居りますよ。本當にあなたは小さい頃から、倅のジョニーとは仲好しの學校友達でしたものねえ、わたしは貴女が自分の娘であれば好いと、思つて居りました。」

「今日から、どうかあなたの娘として許して下さいまし。」

イサベラと母は抱き合つた。

ジョニーも、母を抱いたり、母を揺り椅子に乘せたりして、子供のやうに小躍りしながら、長い間憧れた悦びを思ふがまゝに味はふのであつた。

母と子と、子とその愛人と、三人の心は、幸福と、歡喜の中に溶けていつた。

母は、しばらく経つてから、

「ジョニーや、私の他の子供達が此處に集つてゐて呉れたら、私はどんなに嬉しいでせう。」と、言つた。

ジョニーは、それを聞いて何か不愉快な思ひをしない譯にはゆかなかつたが、しかし、これも母のため、母が會ひたいと思ふ心なら、自分には異存はないと思つた。だが、アイザックのみは、如何に母の言葉とは言へ、再び會ふことはすまいと、固く心に誓つた。

その時、入口の扉のところに、チャアリーとスーズンとが、揃つて現れた。二人は、部屋に這入り兼ねて、しよんぼりと其處に立つてゐた。

これを見ると、母は無意識に、手を差し延べて、二人を引き入れた。

母の前に立つた兄妹は、しみんと後悔と懺悔の心を語つて、

「お母さん、あたし本當に、面目がありません。」

「どうぞお母さん、お許し下さい。」

すると、母は、ジョニーの方を見て、

「ねえ、ジョニーや、この人たちは元々悪い氣ではなかつたのですよ。」

母もジョニーに氣兼ねをして、ジョニーの許しを求めるやうに、かう言ふのであつた。

トーマスとスーズンに續いて、兄のアイザックもこの部屋に這入らうとして、入口のところに姿を現した。ジョニーは、それを見ると怒りの色を眼に湛へて、

「あなたは決して、此處へ這入つて來てはいけません。此處は、不孝者の這入る部屋ぢやない。――僕は、この二人のために我慢はするが、あなたは決して、這入つちやいけません。」

ジョニーは、強い語調で、アイザックに叫びかけた。

だが、母は、急いでそれを制した。

アイザックは、面目なげに、失望の色を浮べながら、歎願するやうに、また哀訴するやうに、母の

前に跪いた。

母は、總ての怨み、總ての反感を忘れて、恵み深い愛情の母として、アイザックの肩を自分の腕に軽く抱きしめた。

「お母さん、あなたは私をお許し下さるでせうか？」

「アイザックや、お前まあ、何を言つてゐるんです。許すなんて、そんなことは何もありませんよ。」

それから、母は、不孝な子に向つて――

「しかしお前は、自分で悪いことをしたと本當にお思ひなら、神様に許して下さるやうにお祈禱なさい。――それからアイザックや、お前が是までお祈禱をした時は、それが間違つてゐたことがありやしないかと、私は思ひますよ。」

と、語つた。

聖母の如く慈悲深く、神の如く寛大な母の心は、不孝者のアイザックを懺悔と感謝に導かすには措かなかつた。

あの山越えて 終

ブラツク・ビユウテイ

ブルシク・マウリム

ブラック・ビュウテイ

青春篇

1

今でもありくと思ひうかべる。——最初の場所はひろくとした牧場で、その牧場のまん中に水を湛へて美しく澄んだ池があつた。

雑木の影が池の水面に映つてゐた。

垣根越しに眺めると私の主人の家が路のほとりに立つて居る門の向うに見えた。丘の上は樅の林があつてそれから下の方の勾配の急な堤の下から小川の流がひゞいてきた。

私が未だ小さくて牧草も食べられず、お母さんの乳ばかりで育つて居た頃である。晝はお母さんについて走り廻り、夜はお母さんの傍に眠つた。そして、夏は池のほとりの涼しい樹蔭に暑さを避け、

冬は林のほとりの綺麗な暖かい小屋の中に暮した。

私がやつと草を食べはじめた頃はお母さんはいつても晝の間は仕事に出かけて、夕方になると歸つて来る。牧場では私のほかにまだ六頭の仔馬が遊んでゐた。

どの馬も私よりは年上であつた。中にはもう普通の馬くらゐに發育したものさへもゐた。私は、それ等の仲間と走り廻つた。ぐるぐると牧場中を全速力で駆け廻るのだ。ひよつとするとあんまり遊び過ぎて咬みついたり、蹴つたりすることもあつた。ある日、私たち仔馬同志がひどい蹴り合ひを始めたことがある。するとお母さんが一聲高く嘶いて私に呼びかけた。

「お母さんのいふことをよつと御聞きなさい。此處の仔馬たちはみんな善い馬ですが、荷馬車馬の子ですから禮儀作法と言ふものを知りません。けれどもお前だけは血統も正しく育ちもよいのですよ。

お前のお父さんはこの邊では中々の名馬であつたし、お前のお祖父さんは二年つゞけて、ニューマーケットの大競馬で賞牌を御取りになつたの。それに御祖母さんは馬仲間でも珍しい素直な良い性質な方だつたんですよ。又私にしても、お前も知つてゐる通り、これまでほかの馬に咬みついたり、蹴つたりしたことは一べんもない。だからお前も悪いことなど覺えるぢやありませんよ。蹴ける時にも脚を高くおあげなさい。戯談にも咬んだり蹴つたりしてはなりません。」

お母さんのこの言葉をどうして忘れることができやう。お母さんは、賢い馬だつた。だから、御主人はお母さんを二つとなきものに思つて居た。母の名は「タッチェス」と呼ばれてゐた。主人は折々自分の子供のやうに「ベッド」とも呼んでゐた。

主人は親切な方でおいしい餌糧を下さるし、善い小屋に入れて下さるし、物を仰しやるにもやさしく、まるで、御自分の御子様たちに仰しやるのとちつとも變りはなかつた。それで私たちも主人を嫌

ひな筈はなかつた。だからお母さんは、御主人の影でも見付けたら何を措いても直ぐに駆けつけた。すると主人は私の母の肩を軽く叩いたり撫でたりしながら、かう仰しやる。

「あ、ベッドや。お前の『ダーキー』は達者かね？」

私の身體が薄墨色であつたからダーキーと呼ばれてゐたのだ。そして、その名で私を呼びかけながら主人は私をみるとパンを一片下さるのが常であつた。時によると母のために人參を持つて来て下さることもある。主人はどの馬も一樣に可愛がつてはゐたが、中でも私とお母さんとを一番可愛がつて居て下さつたやうに思はれる。御主人が市場に御出かけになる時はその二輪車を引くのはいつも母の役目であつたから。

百姓の子供のディックが折々垣根の苺を盗みに私たちの牧場へやつて来た。たらふく苺を食べてしまふと、石や棒を仔馬に投げつけるので、仔馬どもはびつくりして駆け廻つた。それが面白いので悪戯ばかりする。それで、時として運悪くも悪戯者の石にあたつて、怪我をするやうな仔馬もあつた。ある日のこと、私たちの御主人がすぐ隣の畑にいらつしやるとも知らないで、悪戯小僧のディックが苺を取りにやつて来た。御主人はちつと小供の様子を見て居られたが、忽ち、間の垣を飛び越え、ディックの腕をしつかりと捉へて、平手でその横面を殴りつけた。小僧は痛いのと吃驚したのとで、大聲をあげて泣きだした。私たちは御主人の御姿が見えたので如何なることかと、急いで御主人の方へ駆け行つて見ると、

「此奴これから仔馬を追ひかけなぞすると承知しないぞ、さつさと家へ歸れ。もう二度と此處の牧場へ來ると承知しないぞ。」

それから以後再びディックの姿を見たことはなかつた。私どもの世話をして呉れるダニエル爺さんは、親切な人だつたから、その後、私共は大變仕合せであつた。

2

私も、やうやう二歳になつた。その年、今だに忘れることの出来ない事件が起つた。早春であつた。夜の間に降つた霜がうつつすらと地を蔽うてゐた。——林や牧場はうすい霧につままれてゐた。その時、私は仲間の者と牧場の下の方で草を食べてゐたのだ。すると遙か彼方に犬の吠えるやうな聲が聞えた。仔馬仲間の中でも一番年かさなのが頭をあげ、耳を立て、言つた。

「あの聲は獵犬だぞ。」

それから、彼は畑の上の方へと駆け出したので私等もみんなその後を續いていつた。其處は生垣の上からずうと畑や野を見渡すことが出来た。其處に私の母と御主人の御乗馬だつた老馬とが佇んで居るのが見える。彼等は何もかも様子を知つて居るやうに見えた。

「犬共は兎を見付けたから、今に此方へやつて來るだらう。すると居ながら見物が出来るわけね。」と母が言つた。間もなく、隣の畑の麥の芽を蹴たて、五六疋の獵犬が走つて來た。その後から一團

の人々が、緑色の上衣を着た人たちもまちつて大速度で馬に乗つてやつて来た。

老馬は嘶いてそれ等の一群を熱心に眺めてゐた。われ／＼仔馬たちはその群と一緒に駆けて行きたいやうな氣持になつてゐるうちに、忽ち獵犬は低い畑の方へと下つて行つた。其處で獵犬は立ちどまり、吠えるのを止めて、しきりに鼻を地につけて見ては、途方に暮れたやうな顔つきをして居るのである。

「如何したんだらう、足跡を嗅ぎそこねたのかな。まごついてゐると兎は逃げてしまふぞ。」と一匹の老馬が言つた。

「どういふ兎？」と私は訊ねた。

「どういふ兎だか、そんなことが分りつこないよ。大方こゝらの兎で森から出たところなんだらうが、犬や人間はどんな兎だつておかまひなしさ、追ひかけさへすば、それが面白いんだからな。」

すると、不意に犬の叫び聲が起つて、みんなが私たちの牧場の方へ一直線に引き返してきた。丘の下には小川が流れ、高い堤の上に、荆棘が生垣のやうに繁つてゐた。

「来た、来た！ 兎が来たよ。」

と私の母が叫んだ。すると、なるほどその時兎が一疋、驚き怖れて物狂ほしげに飛び出して私たちの側を逃げるやうに駆けぬけ、林の方へ行つてしまつた。獵犬は直ぐ引きつゞいてその後を追ひかけた。堤を飛び越え、小川の流れを飛び渉つて、畑の方へと突き進んでくる。

その後からは獵人たちがひしめき合ひながら走つてくる。六七人の人たちは馬を躍らして犬の後につづいた。兎は垣を潜り抜けようとしたが、あんまり目が細か過ぎたために抜けられないので、道の方へ一生懸命に引き返さうとする。けれども、もう間に合はない。犬は、猛り狂つて一齊に吠えながら兎に飛びかゝつた。その時である。絹を裂くやうな一聲が聞えた。あゝ！ それが兎の最期だつたのだ。

馬を進めて来た獵人の一人が今や兎を噛みちぎらうとする犬共に鞭をくらはして追ひやつた。それから、血だらけに傷ついた兎の兩足を掴んで高々とさし上げてみせた。その瞬間の紳士たちの満足した嬉しさうな様子を私は今でも思ひだすことができる。

私は、最初兎のことばかりに氣をとられて、恰度その時の小川で起つてゐる事件には、ちつとも氣がつかかなかつたが、ふと氣が付いて見ると、如何したのだらう。二頭の立派な馬が倒れて居るのではないか。一頭は流れの中でもがいてゐるし、他の一頭は草の中で呻つてゐるのだ。乗り手はいふと一人は泥だらけになつて、川から出ようとしてゐるし、一人は倒れたまゝ、身動きも出来なくなつてゐる。

「頸が折れたやうだね。」と母が言つた。

「あたりまへよ。罰があつたのさ。」とその傍の馬が叫んだ。勿論私もさういふ氣持がして見てゐたが、しかし母は私たちの言葉に同意しなかつた。

「そんなことを言ふものぢやありませんよ、私はこの年になるまでいろいろのことを見たり聞いたりして來ましたが、何故人間はかうした残酷な遊戯を好むのか未だに分らないんですよ。あの人たちは折々良い馬をいためたり、自分たちが怪我をしたり、又畑を荒したりするが、それもみんな一疋の兎とか狐とか鹿とかのためでこんな獣をもつと苦もなく獵る方はいくらでもあると思ふのに。」

母がしやべつてゐる間、私たちは立つて見てゐた。馬に乗つた人たちは大方みんな倒れてゐる若者の方へ行つた。私の御主人もこの出來事を見て居られたが、若者のところへ行つて先づその男を抱き起した。するとその男の首はがつくりと後に傾き、腕がだらりと垂れてしまつた。周囲の人々の顔には容易ならぬ感情が現れた。

今はもう何の物音もない。犬までが靜まり返つて、さも此處には何か大きな間違ひのあるのを讀み知つたといふ顔付をしてゐる。人々は傷ついた人を私たちの御主人の家に運んで行つた。

後で聞くと、その青年はジョージ・ゴルドンといつて大地主の一人息子で脊の高い立派な若者で、それ故、一家の誇りとして頼もしく思はれてゐたのださうだ。

そこで忽ち馬を四方に走らせて、醫者よ獸醫よと大騒ぎになつた。先づゴルドン家へ息子の死を知らせる急使が出る。それから獸醫のポンドさんが來て、草の中に倒れて呻つて居る黒馬を診斷する。先生は仔細に診察してから、一寸その頭を振つて、「これは脚が一本折れて居る。」と言つた。すると誰か私の御主人の家へ駈けて行つて、鐵砲を持って來たと思ふといきなり一發の銃聲が聞えた。

馬は何とも言へぬいやな悲鳴を揚げたが、直ひつそりとなつて、もうちつとも動かなくなつてしまつた。

母は如何にも悲しさうに私の耳に囁いた。「私はあの馬とは長いお友達だつた。あの馬の名はロブ・ローイと言つて性質もよかつたし、悪い癖もない馬だつたのに……」

母はそれから二度とその場所へ行かなかつた。二三日経つた。お寺の鐘が長い間悲しさうに鳴つて居るのが私の耳にひびいてきた。そして門の方を見ると、黒い布で掩うた妙な馬車を黒馬が挽いて通つてゆく。そのあとから來る馬車も來る人も、來るもの、ことごとく皆黒づくめなのだ。

寺の鐘が悲しく鳴り續ける。ゴルドン家の若者を墓地に送るお葬式なのだ。あゝ、もうあの人は二度と馬に乗ることはあるまい。これと言ふのも小兎一疋のために起つたことなのだ。

3

生長するにつれて私は毛並の美しい黒馬になつた。一本の脚が白く、顔には星のやうな白い點が出來、誰でも私を器量よしだと言はないものはなかつた。御主人は私が四歳になるまでは決して他人に賣らぬと言つてゐた。

私が四歳になつた時、大地主のゴルドンさんが私を見に來られた。そして私の眼や口や脚をすつと

調べてから、眼の前で私を歩かせたり、走らせたり、駈けさせたりしてみせた。彼は私が氣に入つたらしく、「こいつは仕込んだらすてきな名馬になるぞ。」と言つた。そこで彼は「こいつだけ自分で馴らさう。下手な調馬師などにかけて駭かしたり、怪我をさせたりするのは厭だ。」と言ひながら私の頭を撫でた。

この馬を馴らすといふことは中々容易のことではない。先づ口に手綱をかけられる。背中に鞍を置かれ。男や女や子供を乗せて、乗つて居る人の思ふ通りの所へ走つたり、それから靜に歩いたりすることを教へられる。其他には頸輪をはめられて、其間ぢつと靜に立つて居なければならぬのだ。そればかりでなく後に馬車や荷車を着けて、乗手の命令通り遅くも速くも歩かねばならない。物を見て驚いたり、仲間と話したりすることは勿論、蹴つたり咬んだり、氣まゝを働くことなどは思ひもよらぬ。いつも主人の御意に従ひ、いくら疲れても空腹を感じても、ぢつと堪へて居なければならぬ。殊に辛いのは一日鞍や挽鞍などをつけられてしまふと、うれしくても飛びはねることも出来ず、だるいからと言つて横になることも出来ないのである。一人前の馬に仕込まれるといふことは並大抵のことではない。

私は長い間輪索ばかりで畑や往來を、そろ／＼と引き廻すことを馴らされてゐたが、間もなく轡や手綱をつけられるやうになつた。

ある日、御主人は私にいつもの通りに麥を食べさせて、頻りに私の機嫌をとつておいた上で、私の口に轡をはめ、手綱を付けた。何と言ふ厭な氣持だつたらう。轡をはめられたことのないものには、とてもこの不愉快な氣持の分る筈はない。何にしても人の指位な太さの冷たい固い鋼の棒が齒と齒との間、恰度、舌の上に押し込まれ、その兩端は口の兩側に突き出て、頭の上から咽喉の下——鼻のまはりから顎の下を廻つた革紐で結びつける。どうしたつてこの厭な窮屈な物がとれつこはないのだ。世の中にこんな厭なことがあるものか。しかし、私の母親も外へ出る時にはいつもかういふ厭なものをはめ、他の仔馬も大きくなれば私と同じやうにされるのを知つてゐた。それに主人からおいしい麥をもらつたり、撫で、もらつたり、親切な言葉をかけられたり、やさしくしてもらつたりするので、つい私も轡や手綱をつける氣になつてしまつたのだ。

次は鞍である。これは前の轡ほどではない。主人が私の背中で物柔かに鞍を置いてある間、ダニエル爺さんが私の頭を押さへて居る。そして始終擦つたり、優しく話しかけたりしてゐて、その間に、主人は私の腹に腹帯をしつかり締めつける。それから私は少しばかり麥をもらつてから、その邊をぐるぐる歩かせられる。

晴れわたつたある朝。主人は私の背中に乗つて、柔い草の生えた牧場を乗り廻した。私は一種異様な感じにうたれた。然しまた主人を乗せたと言ふことが、大いに得意であつた。毎日少しづつ、かうして私を馴らすことに努力した。それで私も直きに馴れてしまつた。

最も不愉快であつたことは蹄鐵を穿くことだつた。殊にこいつは初めてが一番つらい。先づ主人は私を怯えさせまい、怪我をさせまいといふ心から、自分で私をつれて蹄鐵屋へ行かれる。すると蹄鐵工は私の足を一本づつ手に取つて見て、爪をいくらか切りとるのだ。それは痛くも何ともなかつたので、四本ともすむまで私は靜かにおとなしく三本の脚で立つてゐた。すると今度は私の蹄の形に合ふやうな鐵の板を持つてきて、それを打ち付け、その上から蹄へ突き通るまで釘を打ち込むのであつたが、しかし、直きにそれにも馴れてしまつた。

私がこれまでになつたので、今度は主人は私に馬車具を附ける稽古を初めた。今まで私は未だ一度もつけたことのないやうな新しいものをつけるやうになつた。先づ堅い重い頸輪を頸の上にしつくりとつけられ、それから兩側は眼かくしのついた手綱をつけられた。すると、眞正面が見えるだけで左の方も右の方も兩側はちつとも見ることができないのだ。次に小さい鞍を置かれたが、この鞍には尾の下の方に、氣持の悪い堅い紐がついて居つた。この鞍がどんなに厭だつたであらう。私は長い尾が二つに折り曲げられてこの鞍の中に通される時、恰度、轡をはめられた時と同じやうな厭な氣持になつた。蹴つてもあきたらないやうな氣がしたが、さうかといつてまさか大切な御主人を足蹴にかけることも出来なかつた。かうしてたうとうおしまひに何事も馴らされて、いよく母と同様に働けるやうになつたのである。

こゝで忘れずに言つて置きたいことがある。私が馴らされたことのうちで、後々も大層爲になつたと思つてゐることだ。

主人はある時、私を近くの百姓の家へ二週間ばかり預けることになつた。その百姓の牧場は片隅が鐵道線路に沿つてゐて、私はそこに羊や牝牛などと一緒に入れられた。

側を汽車が走つて行くのをわたしは初めて見た。その時のことをどうして忘れることができやう。恰度、私は牧場と線路の境になつてゐる垣のところ、靜かに草を食べてゐたが、遙か彼方から不思議な物音が聞えてきたのだ。それが何處から響いて來るのだらうと知る間もなく、私の眼の前に現はれ出たものは烈しい唸り聲を立て、煙をはいて走つてくる黒く長い怪物であつた。それは、凄しく駈けて來たと思ふと、息をつくひまもなく、もう何處かへ去つていつてしまつた。私は身を跳すや否や、一生懸命に牧場の向う側へ驅けてゆき、驚きと怖れのためにそこに立ちすくんだまゝ暫らく喘ぎつづけた。それから一日のうちに幾度となくこの汽車といふものが通つた。中にはゆるく行くのもあつたが、それは間近の停車場に止るものらしかつた。時とすると、その汽車が止る前に、怖ろしい叫び聲をあげたり、唸つたりすることもあつた。それを私はひどく怖ろしいことに思つてゐたが、牝牛の奴は平然としてゐた。どんな黒い怪物がやつて來ても首もあげずに靜かに落着き拂つて、草を食べてゐるのである。

しかし、だん／＼私も馴れて來た。初めの二三日は平氣で草を食ふことも出来なかつたが、この怖ろしい奴は決してわれ／＼の牧場にはやつて來ないし、又何も害をしないといふことが判つてくる

と、漸く氣にかけなくなり牝牛や羊と同じやうに、汽車がどんなに通つても頓着しないで平氣であられるやうになつた。その後、多くの馬が機關車の姿を見たり、音を聞いたりして、怖ろしさに慌て、荒れ出すのを見るには見たが、有難いことには御親切な主人の行き届いた注意のために、私だけはどんなに停車場や汽車道に近づいても、馬小屋に居ると同様にもちつとも驚くやうなことはなかつた。讀者諸君の中の誰でも、若い馬を仕込まうとなさるなら、先づ私を仕込んだ主人のやうにかういふ風にしてもらひたい。

さて、私の主人は母と私と兩方に二頭立の鞍を置いて二頭挽の稽古をつけるやうになつた。かういふ時、母は落着いてゐた。見ず知らずの馬よりは私もどんなに嬉しかつたか知れない。母は私に言ひきかした。「お前は自分がおとなしくつとめる程、可愛がられるに違ひないといふことを一番よく心得てお置きなさい。」それから、「然しね、」と母は言葉を續けた。

「世の中にはいろいろな人があるからね、家の御主人のやうに御親切で、思慮深く、澤山の馬が使つていたゞいて、御用に立つのを幸福に思ふやうなよい人々もあるが、また自分で持主と稱しても残酷な人たちもあるし中には愚で生意氣で、分らずやで、粗忽で、一向自分で物を辨へようとならない人もあるからね、かういふ人たちは思慮の無いためにどんなに馬を傷けてゐるか知れないからね。私はお前がよい御主人の手に渡るのを願つてゐるが、然し馬のことだから誰に買はれるか誰に使はれるか判らない。みんな運次第です。たとひ何處へ行つても一生懸命に働きなさい。さうすればお前によ

い評判は何時までも續きますよ。よく心得ておいで。」としみじく言ひきかした。

4

この頃から私の毛は鳥の羽のやうに艶々しく輝いて來た。それもその筈だつた。毎日既に立たされて、身體をのこらず刷毛にかけられ、丁寧に磨いてもらつてゐたのだから。

ある五月の初め、大地主ゴールドン家から一人の男がやつて來て、私を地主の邸へ牽いて行かうとした。そこで主人は、

「ダーキーや。さやうなら。行儀よくして一生懸命に働くんぞ。」と、淋しい聲で言はれた。けれども、勿論私には、「さやうなら」の聲が口から出ないので、鼻を御主人の掌にのせて、長い間の御親切を心で謝した。すると御主人は優しく私を撫でて下すつた。かうして私は最初の私の家を去つて、ゴールドン家へ行き、そこに暫く落着くことになつた。こゝで少しばかりゴールドン家のことを話して置かう。

ゴールドンの邸園はバートキックの村はづれ一帯に擴がつて居た。大きな鐵門を這入ると、先づ最初に一つの小屋が眼につく。そして巨きな老樹がたち並んだ間を平坦な道に添うて歩くと、第二の小屋と第二の門とに達する。そこを通ると初めて庭園がひろがり、邸宅がそびえてゐる。家の彼方には果樹園があり、その傍には厩があつて、澤山の馬車と馬とが這入るやうな設備が整つて居る。私は先づ

私の這入った馬小屋だけについて話をしよう。

新しい私の家には四つの善い部屋があつて、周圍や場所がゆつたりとしてゐた廣々としてゐて、大きな扉のある窓が庭の方へ開くやうになつて居たので心が晴れんとして居心地がよかつた。

第一の馬房は大きい眞四角な上等なもので、うしろの出入口が木の扉で閉ぢてある。その隣の三つの馬房はどれも普通のもので、廣くはないが立派なものだつた。飼草をのせる低い棚と麥を入れる桶とが備へてあつたが、これは馬を繋ぐ自由に放し飼にして置く馬房だから「放し馬房」と呼ばれてゐる。そして、われ／＼に一番嬉しいのはこの「放し馬房」である。

馬丁が私をこの上等な馬房に入れてくれたがこんな良いところへ這入つたのは私には生れて初めてだつた。四方の壁が高くないので、その上の鐵格子の間から外の景色がすつかり見えた。

馬丁は私に非常にうまい麥をくれた。そして優しい言葉をかけたり、撫でさすつたりしてくれた。私は麥を食べてしまつてから、首をあげてあたりを見廻した。私の馬房の隣には鬘も尾もふさ／＼とした頭の美しい鼻の可愛らしいえた灰色の馬が立つてゐた。私は間の窓の格子の處へ頭をあげて、「御機嫌よう。君の名は何と言ふんだい？」と訊ねた。

すると、相手はこちらを向いて、驚いである綱の延びるだけ私の方へよつて來た。「僕の名だつて、——メリーレックスといふのさ。僕は美しい馬だつて評判なんだよ。だから、お嬢様をお乗せ申したり、馬車で奥様のお供をするのはみんな僕なんだ。御嬢様も奥様もジェームスも僕を可愛がつてくれ

るよ。君はお隣へ來たのかい？」

「さうだよ」

「ぢやあ、どうぞ仲よくしてくれ給へ、こつちの隣に噛みつく奴が居て困つてゐるんだよ。」

一つおいた隣の馬房であつた。一匹の別の馬が頭を出した。癩癩持らしい眼をして、兩耳を後へねかした一見性の悪さうな奴だつた。この丈の高い栗毛の牝馬は横合から私の方を向いて、甲高い聲で叫びかけた。

「お前さんだね、私を追ひ出してその後へ這入つたのは。仔馬のくせに貴婦人を追ひ出してその後にすまして這入り込めとは圖々しいよ。」

「どうもすみません。僕はどなたも追ひ出したことはありませんよ。馬丁が僕を此處へ連れて來て入れたのです、勝手に這入つたのではありません。それに僕を仔馬だなんてお言ひでしたが、もう四歳になつたんですからね、これでもひとなみに大人の馬なんです。僕は未だ牝馬とも牝馬とも喧嘩をしたことはないんですからね。まあ仲よく暮さうぢやありませんか。」と私は物靜かに答へた。

「ふん、さうですかね。尤も、お前さん見たいな仔馬を相手に喧嘩をしたことは私だつてないんですからね。」

私はもう何とも答へなかつた。その牝馬は午後になつて出ていつた。その後で、メリーレックスが私に總てを話して呉れた。——「まあ、かうなんだよ。あのジンジャーはとても性質が悪くて蹴つた

り喰ひついたりするんだからね。ジンジャーといふ名の付いてあるわけは、彼奴放し馬房に居た時、食ひつく癖があつてまるで生薑で活氣づけた馬のやうだからさ、或る日などジェームスの腕に喰ひついて血を出さしたこともあるよ、そこで僕を一番可愛がつて下さるフロラ嬢様もジェッシー嬢様も彼奴が人に喰ひついたといふので、怖がつてこの厩においでにならなくなつたんだからね、それまでは僕に林檎だとか、人參だとか、パンだとか、それはおいしい食物をいつも持つて来て下さつたのに、ジンジャーのことがあつてからはちつともいらつしやつて下さらなくなつてしまつたんさ、僕はお嬢様がおいでにならなくなつたのを残念に思つてゐるよ、だけど、若し君がおとなしくして蹴つたり喰ひついたりしなまや、また来て下さるかも知れないよ。」

「いや、僕は草や枯草や穀類は嚙むが、ほかのものは何にも嚙んだことはないよ、それにしても何が面白くてジンジャーはそんな悪いことをするのかね。僕にはちつともわからないが。」

するとメリーレグスが言つた。

「さあ、そいつは僕にもわかりつこはないよ、まあ、性質が善くないんだな、彼奴は世の中に誰一人親切にしてくれるものがないんだから、喰ひついたりして悪い筈はないと言つて居るんだよ、尤もそれは彼奴も悪いには定つてゐるけれど、考へて見ると彼奴の言ふことが本當だとすると、此處へ來ない前には、餘程酷い使ひ方をされたに違ひないと思ふね、ジョンは彼奴を可愛がるし、ジェームスだつても出来るだけ親切に世話をしてやるし、僕等の御主人だつて、馬が當り前にしてゐれば、撲るやう

なことは決してしやあしないんだもの。ジンジャーも此處に居れば、性質のよい馬にならなければならぬ筈なのに。ね、——君さう思はないかい？」とメリーレグスは如何にも伶俐さうな顔付をして言つた。それから言葉を續けて、

「僕は十二のこの年までにいろ／＼世の中のことを知つたが、まあ、この近所で此處くらゐ馬の身にとつていゝところはないよ、ジョンもめつたに無い善い馬丁だし、第一、十四年もつとめ通して居るんだからね、それから、君も知つての通りジェームスだつて親切だからね。だから、ジンジャーが君の部屋から出されたのも全く彼奴の身から出た錯だよ。」

5

厩の直ぐ側には馭者部屋があつた。そこには馭者が女房と子供と三人で住んでゐた。馭者の名前はジョン・マンリーである。

私が氣持よい厩にお引越した翌朝、ジョンは私を後庭にひき出した。そして、よく手入をして呉れたので、私の身體の毛は一層艶々しく輝いてきた。それから私は自分の馬房へ歸らうとすると、丁度その時新しい御主人がおいでになつた。

御主人は大層お氣に召したやうで、

「ジョン。私はこの新しい馬を今朝試して見ようと思つたが、ちと他に用事が出來たから、お前朝飯

がすんだら、この馬を一乗り乗り廻してくれよ。往きは公有地から高臺の森の方へ廻り、歸りは水車場から小川の方へ廻つて來るとい、さうすれば足竝がどんなだかあらましましわかるから。」

「はい承知致しました。」とジョンが答へた。それで、朝飯がすむと、馭者は私に轡をつけ、大そう几帳面に革紐を緩めたり縮めたりして、それを私の頭にしつくりと氣持よく合せた。次に鞍を持つて來て一寸据ゑて見たが、少し狭くて私の背中には合なかつたので直ぐよく合ふのと取り換へた。それからジョンは私に乗つて最初はゆつくりと、そしてだんく、早く駈けさせた。公有地まで來ると彼は軽く一鞭あて、急に私を大速度で駈け出させた。

途中で彼は私を引きしめながら言つた。「お前は獵犬のあとを追ふのが好きだらうなあ。」私たちが邸園を通り抜けて歸つてくると、御主人と奥様とが散歩をしてゐられるのに會つた。ジョンは直ぐ私を止めて飛び降りた。

「ジョン。どうだつたね？」

「上々でございます。」とジョンが答へる。

「この馬はまつたく鹿のやうに迅く、その上なか／＼勇みがよろしうございます、——と申してあげられるわけではなく、手綱のきゝめのいゝことときたら一寸引いてもすぐ言ふことをきいて呉れます。今日も、牧場のはづれで下りて來ますと、毛布類を山のやうに積みあげた運送車がやつて來ました、御承知の通りこんな運送車などに出合ふと大抵の馬は狼狽するものですが、此奴は只一寸見たばかり

で、平氣で進んで行きました、まあこれ以上の沈着さはどの馬にもありません。それから森まで行きますと、恰度兎狩りがありまして、その鐵砲の音が直ぐ近くにしました、これも一寸立ち止つて眺めたばかりで、右にも左にも動く様子も見えませんでした、私はその時しつかりと手綱を持つて居て此奴を急がせもしませんでしたが、私の考へますにはこの馬は小さい時から決して酷い使ひ方をされず、又怯えさせられもしなかつたに相違ないと思ひます。」

「それやよかつた。」と主人は明るい聲で言つた。「それぢや明日私が乗つて見よう。」

翌日私は主人にひきだされた。

私はこの時、母親の言葉や親切だつた元の主人の教へを思ひ浮べた。そして何でも新しい御主人の仰せに従はうと思つた。私は主人が大層上手な乗り手でまた本當に馬に對して注意の行届いた人だといふことがわかつてきた。私たちが歸宅すると奥様は玄關に出て來られた。

「お馬は如何でございました？」

「いやどうもジョンの言つた通り、乗り心地のよい奴ぢや、これ以上の馬は望まれまい、ところで何と名をつけたものだらうね。」

「エボニーは如何？ この馬はエボニーのやうに黒うございますから。」

「それならブラック・バードでは如何でございませう。叔父さまのお馬と同じ名では？」

「いや此奴はブラック・バードよりはすつと立派ぢや。」

「左様でございませぬ。まつたくこの馬は美しうございませぬ。そしてまあ、この優しい顔と賢さうな綺麗な眼を御覽遊ばせ。あなたお厭でなかつたらブラック・ビュウテイとつけては如何でございませう？」

「お、さうだ、それはよい名だね、お前がよければさうつけよう。」そこで私の名はブラック・ビュウテイとつけられた。

それからジョンが私を厩へ連れて行つた。彼はジェームスに御主人と奥様が氣の利いた英語の名前を私につけて下さつたといふことを話した。マレンゴのベガサムだのアブタラーだのといふやうな譯のわからない名は大嫌ひだと言つて二人は笑ひ合つてゐた。

「が、しかし、若し縁起が悪くなかつたらロップ・ロイと付けるんだがな。あの馬とこの馬とはどつちがどつちだか分らないくらゐよく似て居るぢやないか。」とジェームスが突然言ひだした。

「それや不思議はねえさ。お前、知らねえか、あの百姓のグレーのこのダッチェスはこの二疋の馬の親だからなあ。」

ジョンの言葉を聞いて私は驚いた。そんなこと、は夢にも知らなかつたのだ。してみると、あの兎狩の時死んだ哀れなロップ・ロイは私の兄弟であつたのか、——道理でロップ・ロイの死んだ時、お母さんの悲しみやうといつたらなかつた。一體馬には親類といふものはないやうに思はれる。たとひあつても賣られて行つてしまへばそれつきりなのだから。——

ジョンは私を非常に自慢にしてゐるやうに見えた。いつも私の鬣や尾を貴婦人の黒髪のやうに美しく滑らかにしてくれた。

そしていつもいろ／＼のことを話しかけるのであるが、勿論その言葉のわかる筈はなかつた。それでも何を言つてゐるかと言ふことがだん／＼わかるやうになつてきた。そして彼が、何を望んでゐるかといふこともだん／＼わかつてきた。私は一日まじにジョンが好きになつた。本當にジョンは親切でおとなしく、よく馬の氣持を察して呉れる。そればかりでなく彼が私の毛を洗つてゐてくれる時でも、私の何處が痛いか何處がくすぐつたいか、といふことを知つてゐてくれる。私の頭を洗ふ時などは何時も眼に注意して呉れた。決して私に氣に觸るやうなことはしなかつた。厩掛りの子供のジェームスは又同じやうに溫和で親切だつた。だから私はどんなに仕合せだつたであらう。

二三日して私はジンジャーと一緒に二頭だての馬車を挽いて出かけることになつた。實はジンジャーと一緒にやることが出来るかどうかと大に危ぶんでゐたのだが。しかし、私が彼女の傍へ連れられて行つた時、彼女は耳を少し後にねかしたばかりで極めて靜かにして居た。そして、自分のすべきことだけは眞面目にやつてくれたので、私は二頭だてにはこれに越した相手はないと思ふやうにさへなつた。

私たちは岡へ差し掛つたが、その時彼女は足竝を早めないでちつと頸に力を入れて眞直に登つて行くので、私も負けないやうに勇氣を出して登りはじめた。ジョンは私共を驅り立てるよりはしきりに

押へようと努めてゐるやうに見えた。だからジョンは私たちを鞭つ必要もなく、私とジンジャーと歩調を合せて行くのが、よくわかつてゐるやうだった。御主人は私たちが揃つて駈けるのでいつも御満足で、又ジョンも同じく喜んでゐた。かうして私共二頭が二三度も一緒に出掛けるうちに、すつかり打解けて仲よくなつてしまつた。

間もなく私はメリー・レグダスとも非常に親友になつた。この馬はいつも快活で元氣で、氣立てがよく、誰にも可愛がられて居た。殊にジュエッシー嬢さんとフロラ嬢さんはいつもこの馬で果樹園を乗り廻したり、この馬と小犬のフリリスキーとを相手にふざけるのが好きだった。

われ／＼の他にもまだ二頭の馬がゐたが、いづれも私たちの所からずつと隔たつた厩にゐた。一頭の方は栗毛の斑のあるジャスチスといふ仔馬で、乗用にも荷車用にも使はれてゐた。もう一頭は年をとつた鶯色の獵馬で、名前はサー・オリヴァー。こいつはもう働くことが出来なかつた。大變御主人に寵愛されて、いつも庭園に放たれてゐたが、時とすると軽い荷車をひいて領内を歩いたり、また二人のお嬢様のうち、どちらかはお父様と御一緒にお出かけの時は、きつとお嬢様をお乗せ申してお供をするといふ風であつた。

それといふのもメリーレグダスと同じやうに、おとなしいので、安心して子供でも預けて置くことが出来るからであらう。

栗毛のジャスチスは強くて氣立ての善い馬だ。私たちは草原などでほんの少しばかり話し合ふことがあつたが、もとより厩が離れてゐたので、ジンジャーのやうに親しくするわけにはゆかなかつた。

新しい主人の家で私は全く満足してゐた。厩は明るく清潔だし、周囲の者は皆親切で善良だし、食物もこの上なく結構だし、この上の慾望があつてたまるものか。けれども、自由！ あゝ、それだけをどんなに望んだことであらう。生れてから三年半といふもの、何でも心に任せぬことはなかつたのに、——ところが、今はどうであらう、毎日毎週来る月も来る月も年がら年中夜晝と言はず、私は用のない時は絶えず、厩の中に立ち通してゐなくてはならないのだ。恰度二十年から働き續けた老馬のやうに、ちやんとおとなしくしてゐなくてはならないのだ。此方にも綱、あつちにも綱、口には轡、眼には眼かくし、——勿論かうするのがあたりまへだとしても。——青春の氣の充ち満ちた丈夫な若馬が、今まで廣い牧場で自由に頭を振り上げたり、尾を振りたてたり、全速力で跳ね廻つては鼻息を吹いて友達のところへとんでいつたものが、かう自由を束縛されてはたまつたものではない。時としていつもより運動の少かつた折などは、心身がうづ／＼してたまらず、ジョンに連れられて運動に出ると、とてもちつとして落ちついてゐることが出来ず、われ知らず飛んだり跳ねたりしなくてはゐられなくなることもあつた。思ふさま跳返つて、ジョンを引き轉がしたこともあつたが、それでもジョンはいつも親切に面倒を見てくれた。

「こら、小僧！ ちやんと靜かにしてゐるんだぞ、まあ一寸待て、今思ふさま駈けさしてやるからお前の脚のうづくするのによくなるあ。」と、ジョンは言ふのであつた。

そして、村の端へ出ると、すぐさま一里ばかり全速力で駈けて、うづくした氣分がすっかりなくなつて、前よりは一層元氣になつて歸つて來た。一體勝氣な馬を十分に運動させないで置いて、事實馬がふざけてゐるとは知らずに、臆病だとか、驚きやすいとか言つて、其馬に小言を言ふ馬丁があるが、ジョンにはそんなことはなく、これは馬が氣が立つてゐるのだといふことをよく知つてゐた。又ジョンは私にいろいろのことを解らせる方法を知つてゐた。私はジョンの聲の調子や手綱のしめ具合で、すべてを悟ることが出來た。若し彼が眞面目になつてかうしようと決心した時には直ぐ其聲でわかつた。其聲ほど凜と私の力をひきしめてくれるものはなかつたから。それは私がジョンを非常に好いて居たからであらう。

しかし、たまには自由な身になることもあつた。それは夏の御天氣の好い日曜日二三時間、放して貰ふことだつた。――

園の中や果樹園へ出して貰ふといふことは、どんなに私たちにとつては有難い待遇だつたであらう。草は私たちの足にひやりとして柔かに、空氣は冷たかつた。其中を勝手氣儘に自由に振舞へることの楽しさ、――駈けて見たり、寝ころんで見たり、仰むけになつて見たり、甘い草を咬んでみたりそれから大きな栗の木影で友達と一緒にたゝすんでゐる時などは、お互に話し合ふにはこの上ない好い機會だつた。

或る日、私とジンジャーとたつた二人で木陰にたゝすみながら種々の話をした。その時「一體お前さんはどんな風にして育てられましたか、お前さんの駈けられた通りをお話下さい。」と彼女が言つたので、私はみんな残らず身の上を話して聞かせた。

「なるほどさうだつたの。」と、ジンジャーは言つた。

「お前さん見たいに私も育てられたら、お前さんのやうな氣質の良い馬になつたかも知れないわね。それももう今になつては駄目だと思ふわ。」

「何故。」と、私が訊ねた。

「何故つてね、お前さんと私とはてんで違ふんぢやないの、何しろ、人にも馬仲間にも一度だつて親切にされたことはないんだからね。だから、私にしたつて親切にしようといふ氣もなくなるぢやないの。それといふのも、私は生れて母の乳を離されて、他の仔馬共と一緒にされてしまつたの、誰も私を可愛がつてくれもせず、――だから、私にしたつて、誰も可愛がつてやらなかつたわ、私には今の御主人のやうな親切に世話をしてくれたり、親切に言つてくれたりする主人もなかつたの。世話をしてくれる人はたゞの一度も優しい言葉をかけてくれなかつたんだもの、――別に私を殘酷に扱つたわ

けでもないけれど飼草を十分くれて、冬は寒くないやうにしてくれたといふだけで、それ以上の親切はちつともなかつたんだからね。私のゐた牧場のそばを通る大きな子供たちが私たちを駆けちらすが面白さによく石を投げたものよ。私には決してあたりはしなかつたが、一疋の若いきれいな仔馬が運悪く顔をやられたことがあつたの、多分それは一生の疵となつたと思ふわ、しかし、私たちはそんな悪戯は何とも思はなかつたが、そのために一層氣は荒くなるし、人間の子供たちをだん／＼敵と思ふやうになつてしまつたの、その中に駢をされる時が来たのよ。それが實にいやなことだつたの、先づ、人が幾人もして私を掴まへに來たが、しまひには私を野の隅の方へ追ひつめておいて、一人は私の前髪をひつ掴み、一人は鼻をとつてまるで呼吸もつけないほどしつかりと掴んでしまふのよ、その時、他の一人は、その固い手で私の頤の下をとつて口を開くと、今度はみんなして無理矢理に口の中へ棒を押し込める。そして、一人が綱をもつて私を引きずり廻すと、他の一人が尾をぶんなぐる、——これが初めて私の受けた人間の親切といふものよ、何もかも力づくめだね、で私は、一體人間は私にどうしてほしいといふのか、ちつともわからせようとしなかつたんだからね。元來私は烈しく育てられ、女にしては氣の勝つた性分で、随分荒つぽくもあつたから、確かにみんなを困らしたと思ふけれど、しかし、毎日々々既に閉め込んで私の自由を束縛するなんて、あんまり酷いわ、私はいらいらすするし、悲しくもなるし、どんなにか自由になりたかつたか、お前さんも知つてゐる通り親切な御主人を持つてゐていろ／＼御機嫌をとられてもこんな目に合はされては、誰だつてやり切れないやね。

殊に私なんざ、親切のしの字も知らないんだからね。前に一人の年寄りの主人があつてね、ライダーさんといふのよ、この人こそ私をよく手なづけて何もかも直接に私の世話をしてくれさうに思はれたが、一番面倒な仕事は自分の息子ともう一人の經驗のある人々に任せておいて、御自分では時たま見廻りに來るばかりなのさ、その又息子といふのは、強さうな脊の高い荒つぽい男で、サムソンと呼ばれてゐたつけ、どんな馬にも投げ出されたことはないといふのが御自慢さ、この人には御父さんの優しきといふものは爪の垢ほどもなくつて、たゞきついばかりなの、聲もきついし、目付もきついし、だから、私は初めからこの息子は、私の精神をすつかり抜き去つて、そして私を靜かな、おとなしい、温順な肉の塊にしてしまひたいと思つてゐるのではないかしらといふ氣がしたほどの。なるほど「肉の塊」これより他サムソンは考へないんだから堪つたものぢやないわね。」とジンジャーはだん／＼、ぞんざいな言葉になりながら、足踏をして想ひ出すさへ癢に觸るといふ様子で言葉を續けた。——

「私が若しそいつの氣儘にならないとサムソンは今度は私を馬場に引き出して、長い手綱を引いて駆け廻り、果ては疲れてしまふまでやらねば承知が出来ないといふ風さ、大酒飲みで、飲めば飲むほど私にあたりちらす、或る日、サムソンは、いろ／＼な手段で私を苦しませたから、私は疲れて倒れてしまつたが、どう考へても悲しく腹立たしく實に情なくなつてたまらないのさ、一事が萬事かうした酷い有様だつたのよ、そればかりか、翌朝は早くやつて來て、又長い間走り廻されるといふ始末さ。

どうしても一時間と休む暇がないんだからね。また直ぐやつて来て鞍と手綱と新しい轡とをかけるのさ、どうしたのか今になつてもちつともわからないことだが、何か私のしたことが癩に觸つたとみえて、馬場でサムソンが乗ると、いきなり私をひどく手綱で撲つたのよ。新しい轡が痛くて思はず飛び上つた。それがいよ／＼癩に觸つたと見えて、今度は鞭でびし／＼撲り出したから、私もムカ／＼として、それまでにしたこともないが、蹴つたり、跳たり、後足で飛び上つたりして、背の上の彼と負けずに戦つたのさ。暫くの間サムソンは鞍にかじりついてゐて、鞭や拍車で酷らしくも私を撲り續けたが、私だとして同じやうにのぼせてゐたので、どんなことをしても振り落さうと一生懸命になつた。そして、腕き苦しんだん擧句、後ざまに投げ墜してやつた。芝生の上にドシンと落ちた音は聞えたが、私は振り向きもしないで、原の端まで駆けて行つて、初めて振り返つて見ると、自分を苦しめたサムソン奴はよう／＼と起き上つて、厩の方へ行くところだつたのさ、私はその時檜の木の下で佇んで見てゐたが、かうなると誰も私を連れに来るものなんかないさ。だん／＼時間はたつし、日は暑いし拍車で傷ついて血の出で居る脇腹に、蠅がたかつて来るし、そればかりか、朝から何も食はないで空腹は感じるのに、牧場には、たつた一羽の鷲鳥が啄むほどの草さへもないときてるんだからね。せめて少しでも横になつて休まうと思つたけれど、鞍がしつかり縛りつけてあるので、身體を楽にすることも出来ず、おまけに飲む水だつて一滴もないし、その中に日は既に傾いて外の仔馬共は厩に連れられて行くのも見える。あゝさぞ今頃は御馳走にありついてゐるだらうと思ふと、私はさすがに情なくな

つたのさ。たうとう日は沈んでしまつた。すると老主人が手に篩を持ってやつて来るのが見えた。主人は白髪の立派な老紳士で、その聲と言つたら、どんなに大勢の人の中でも聞き分けることの出来るくらいで、高くもなく低くもなく響く、はつきりした親切さうな聲さ、何か言ひつけられると、人間も馬でも従はねばならぬほど落着いたしつかりしたものだからね。その主人が靜かに私の方へやつて来たのさ、手に持つた篩の麥を時々ゆすりながら、いかにも愉快げに優しく私にかう話しかける。「さあおいで、さあおいで、さあ／＼。」私は靜かに立つて主人の来るのを待つてゐたの、すると主人は私に麥を下すつたが、私はいつの間にか怖しいことも忘れて麥を食べだした。まあ御主人の優しい言葉で私の怯えた心も落ついたといふわけさね、主人は私が麥を食べる間、撫でたりさすつたり、或は脇腹の血の塊を心配さうに見ながら、「お、可哀さうにな、ひどい目にあつたな、こりや全く酷い。」と言つて下すつた。それから私の手綱をとつて私を厩へ連れて行つて下すつた。恰度その時、サムソンが、戸口の所に佇んでゐたのを見て、私は耳を伏せて其奴の方を向いて一聲嘶いてやつたのさ。すると主人は、「彼方へ行つておいで、馬をよけてゐる方がい、。お前はここの牝馬を餘程ひどく取り扱つたに相違ない。」と言ふと、サムソンは、「この悍馬の畜生奴」などと吠いてゐたよ。主人はサムソンに、「お前はよく心得ておかねばいけないよ。性質のよくない人間が馬を善くしようとしても、それは、到底駄目な話だからね、お前は未だ馬の扱ひ方をよく知らないんだから注意をしなければいけないよ。」と言つて、主人は私を馬房の中に入れたのさ。そして自分で鞍や手綱をはづ

して私を柱に繋いで下すつた。それから温かい湯と海綿とを持って來させ、厩番に桶を持たせておいて、上着を脱ぎ、御自分で物柔かに私の横腹の疵を洗つて下すつたが、きつとどんなに疵が痛むかといふことを察して居て下すつたに相違ないと思つたよ。「こら！ 好い兒だ、好い兒だ、ちやんとしてゐるんだぞ。ちやんとしてな。」この主人の聲だけでも心持がよかつた。そして疵を洗つていた、くのが又非常に好い氣持だつた。ところが、口の隅の皮の破れたところが、草を食べるのに痛くて仕方がないのさ。主人はつくづく見て居られたが、頭を一寸振つて、下男に、良い粉糠の温めたのに割麥を入れて持つて來るやうにお言ひつけになる。まあその美味かつたこと、柔くつて、口の傷など直ぐよくなるやうな氣がしたねえ。主人は私が食べる間始終傍に立つて、私を撫でたり下男と話しあつたりしてゐられたが、「かういふ氣の強い奴はよく馴らさないと役に立たないね。かへつていけないしてしまふくらゐだ。」と言はれた。それからと言ふもの、主人は折々私を見に來られた。私の口の疵もよくなると、今度は他の調馬師でジョップといふ人がやつてきた。全く私の騾のためばかりさ。この人は馴らし方もしつかりして、萬事に行き届いた注意をして呉れる、そこで私は直ぐジョップの言ふことが分るやうになつたのさ。」ジンジャーはさう言つてからほつと一息繼いだ。

それから、ジンジャーは自分が初めて行つた家のことを話した。

「私は騾が濟むとある仲買人に買はれていつて、栗毛の駒と一對にされた。幾週間も私たち二頭はその人へ乗り廻されたあげく、一緒に流行を追ふハイカラ紳士に買はれて、ロンドンへ連れられて來られた。仲買人のところではいつも揚綱で乗られたが、私はそれが何よりも厭でたまらなかつた。ところが今度の紳士の家では、その揚綱をなほ更しつかりと引き締められるので、とてもやりきれなかつた。馭者も主人も、かうして馬の頸を高くもたげさせて置けば大いに私たちがハイカラな粹な恰好に見えると思つてゐたのだからね。私たちはかうして仰向きになつて、公園や盛り場をひき廻された。お前さんは揚綱といふものはどんなにいやなものか、経験がないから知るまいが、實際、身震ひがするくらゐだよ。私は、頭を自由に振つたり、他の馬と同じやうに頭を高くあげたりするのが大好きなのさ。それなのに、お前さんにしても考へて御覽よ、いつも頭を高くあげたままで幾時間もおかれちつとも自由が利かなかつたらどうだと思ふね、頭が痛くて我慢してゐられるものぢやないよ、そればかりか、一つですむものを二つまでも轡をはめられてさ、おまけに私のはそれが尖つてゐたらね、舌とあごが傷だらけになつてしまつた、轡や手綱が磨れたり喰ひこんだりすること、舌から流れ出る血で唇から飛ぶ泡が眞紅に染まつてしまふのだ、一番苦しかったのは奥様が盛大な舞踏會や、宴會に行かれるのに御供をして、そのお歸りを待つ何時間と言ふ長い間立ちつゞけることよ。若し我慢がしきれなくなつて、焦れたり足踏したりでもして御覽——直ぐ鞭を食はせられるんだもの。全く氣狂ひにでもなりさうだつたよ。」

「そんな時御主人がお前さんを何とか構つてくれなかつたのかね。」と私は訊ねた。

「いや、それどころか、馬のことに就いては何にも御存じなしときてゐるからね、粹と外見を飾るとばかりに心を向けて、馬のことに就いては、何の考へもてんでないんだからね——。だから、萬事が馭者任せなのさ、馭者は御主人に、「此奴なかく、痾癩持で、未だ揚綱には躡がしてない風ですが、直きに慣らしてお目にかけますよ」と言つてゐたづけが、——とても私をよく慣れさせて呉れるやうな男ではなかつたの。それで、私は既に居る時はいつも悲しくつて、泣いてばかりゐたづけ、何しろ親切に氣を鎮めてくれることもしないで、いつもぶつ／＼小言を言つたり、撲つたりするばかりなんだからね。たまつたものぢやないわよ。そりやね、其奴が物がわかつてゐて、優しくでもしてくれただからね。私だつて何でも堪へやうさ。喜んで働きもしようし、むづかしいことになつて逆ひもしないわよ。氣まぐれ半分に餘計な苦痛を嘗めさせられちや癩に觸るばかりなもの。一體そんなに私を苦しめる権利が何處にあるのか！ 口や頭の傷が痛むばかりか、氣管は絶えず害されるし——若しあんなところにいつまでもゐたら、私の呼吸は絶えてしまつたかもしれないわ。そこで私はだん／＼氣があせり、疝が高くなつてどうすることも出来なくなつたの。鞍を置きに來た者は誰彼の見境もなく喰ひついたり蹴つたりしてやつたの、こんなことで馭者の奴も私をよく撲つたわ。或る日のことだつた。奴等は私に馬車をつけて、そして手綱をもつて私の頭を眞直ぐにさせようとしたので、例の痾癩がおきて、力一杯飛び上つて蹴つてやつた。忽ち鞍は落ちて壞れる、私の背中は裸になる、そこでたうとう、その

家からお拂ひ箱さ。それから後私はタッタールの市場に賣りに出されたが、まさか、私を悪い癖のない馬だとは保證出来なかつたので、賣り手もその點は黙つて居たやうよ、しかし一寸見たところが立派で、足竝もよいので、私を買はうといふ一人の紳士が現はれたわけね、そこで又一人の仲買人に連れられて行つて、いろんなことをさせられ、いろんな轡をはめて試めされたが、私の我慢の出來ないのは何だと言ふことが直ぐにわかつて、仲買人は最後に揚綱でなしに私を駈り廻して、それから私を全くおとなしい馬だと言つて田舎の紳士に賣りつけたわけよ、ところがこの主人は至つてよい主人で私も大層氣持が折り合つてゐたが、間もなく先の馬丁が暇をとつて新しいのがやつて來た。此奴がまたサムソン同様な氣も荒く手も荒い奴で、いつも痾癩聲で荒々しい物の言ひ方をするのさ、私が既に居て直ぐ動かないと、手に持つて居たものは何でもござれ、箒でも熊手で、私の膝のあたりをぶんなぐるのさ。することなすこと何でも其奴は亂暴だから、私はすぐ大嫌ひになつた。彼奴は何とかして私を威かして怖い馬丁だと恐れさせようとしてゐたらしいが、私はそんなことをされるやうな意氣地なしではないやね。ある時、いつもよりこつびどく虐められたので思ひきつて、こいつに喰ひついてやつたのよ、さうすると彼奴、案の定火のやうに怒つて、乗馬鞭で私の頭をぶん撲つて、それからといふものは私の厩へは決して來ないのさ。なに、來さへしたら、この兩足で蹴るか、この齒でやつ／＼けてやらうと待ち構へて居たんだが、彼奴、それを悟つて居たらしいわね。しかし、私は御主人に對して至つておとなしいつもりだつたが、御主人はやつぱり馬丁の言ふことを信じて、私は賣

られることになつたのよ。そこへ前の仲買人が私のことを聞きこんで、「あの馬をやつてもよからうと思ふ家はたつた一軒ある。」と言つたといふ話さ、そして、「こんなによい馬が丁度善い家に行かれないために、だんく悪くなるのは惜しいことだ。」と言つた。といふことさ、——あとで聞いたんだがね、その結果としてお前さんが来るより一寸前にこの家に来たんだよ。元來人間といふ奴はみんな私の敵なのさ。だから、何時でも正當防禦をしなければならぬと覺悟をしてゐるのよ。尤もこの家はとても住み良いが、なあに、それだつていつまで續くかわかりやしないよ、お前さんみたいに何でもよい方面ばかりものを考へられたらいゝがね、私のやうな酷い目にあつて来た者にはさうは考へられないからね。」

「でも、ジンジャーさん！ 若しお前さんがジョンやジェームスに噛み付いたり、蹴つたりしたらそれは恥晒しなことだと思ふね。」と、私が言つた。

「それはわかつてゐるわよ。よくさへしてくれ、ばそんなことはしないよ。けれど一度だけジェームスにかなりひどく噛みついたことがあつたつけ。しかし、ジョンがジェームスに「まあ親切にやつて見るさ。」と言つたので、私は吐られることとばかり覺悟して居たところ、吐るところかジェームスは腕の傷を繃帯して粉糠の糧を持つて来て呉れた上に、優しく摩つてなだめるものだから、それ以來今日まで決して喰ひついたことなんかないよ、これからだつてもそんなことはしないつもりさ。」

これで彼女の話は終つた。私はまったくジンジャーを氣の毒に思つた。その時の私はまだ何にも知らず、たゞぼんやりジンジャーの奴は随分酷い目に會はされて来たんだなとばかり思つてゐたが、だんだん月日の經つにつれて、彼の性質もおひくおとなしくなるし、快活にもなるし、たとひ知らぬ者が來ても厭な用心深い猜忌の顔付を見せるやうなことがなくなつてきた。或る日ジェームスがジョンにかう言つた。

「どうも近頃この牝馬は俺を好いて來たらしい、今朝など奴の額をさすつてやると嬉しさにクンクン言つて居たぞ。」

「さうとも、さうとも、それが即ちパートキック式丸薬さ、やがて此奴もブラック・ビュウテイのやうに善くなるよ。親切といふことが此奴には何より薬さ、可哀さうに。」とジョンが答へた。御主人もジンジャーの變つてきたのに氣付いてきたやうだつた。ある日のこと、御主人は馬車からお降りになると、いつもなさることだが、近寄つて私たちに言葉をお掛けになつた。ジンジャーの美しい頸を撫でながら、「あゝ、いゝ子、いゝ子、どうぢや、家へ來たてより少しは御機嫌がいゝぢやないか、なあさうだらう。」

すると、ジンジャーは如何にも打ちとけた親しい様子をして、彼女の鼻を主人にすりよせた。すると御主人はやさしくその鼻をさすつておやりになつた。

「今に此奴の病氣もよくしてやらうよ、ね、ジョン。」

「左様でございます、それに今日までにも大變よくなりました、まるで前の馬と同じとは思はれな

いくらあです、やはりこれもパートキック丸の御かげでござりませうよ。」と言つてジョンは笑ひだした。

これはジョンの口癖であるが、いつも彼は「この馬の丸薬パートキック丸を服用させれば、どんな癖の悪い馬でも治る。」と言つてゐた。即ちこの丸薬はジョンの言ふところに従へば、忍耐と溫和、確實と愛情の四品を一斤づつ、そしてそれに常識一合五勺を混ぜて毎日馬に飲ますのださうである。

9

牧師のブロムフィールドさんの家庭は大勢のお子さんたちがあるので賑かであつた。お子さんたちは折々男女打ち揃つて家のジュエッシー嬢さんやフロラ嬢さんのところへ遊びにいらつしやる。そのお子さんたちが来るとメリーレグスが大いに忙しくなるのである。それは皆が交る／＼彼に乗つて果樹園や圍ひの中を廻るのが何より楽しみで、而も何時間となくそれをやられるからである。

或る日の午後、メリーレグスは子供たちと一緒に永い間外に出てゐたが、ジェームスは彼を外から連れ戻つて、綱を掛けてからかう言つた。

「この悪戯者め、することには氣を附けるんだぞ、重ねてこんなことをすると酷い目にあはせるぞ、いゝか。」

「まあ、君、何を仕出かしたんです？」と私は驚いてメリーレグスに訊ねた。するとメリーレグスは小さい頭を振りあげて、

「なに、ちよつとばかり若い人たちに教へてやつたばかりさ、あの子供たちはもう運動の十分足りたのも御存じなく、又僕の疲れてしまつたのにもお氣がつかれないんだからね、そこでちよつと振り落してやつたばかりさ、なに、これより他のことは子供には分りつこはないや。」

「まあ君が子供たちを投げ出したつて、——まさかそんなまづいことをしようとは思はなかつた。それならジュエッシー嬢さまや、フロラ嬢さまを落したんですか？」

「いや、どうして、この厩でいたゞいた一番美味い麥をやるからとそれをしろと言はれたつて、私にはとてもそんなことは出来やしませんよ、お嬢様たちは旦那様が大切になさるやうに僕だつて大切に氣をつけてゐますよ、小さいお嬢さま方にはこつちで乗り方をお教へ申す程さ、若しお嬢様が怖がつたり、少し背中ぐらついたりなされる時には、恰度猫が鳥を追ひかける時のやうに、そつと静かに歩くよ、そして落ちてちやんとなると又早足に行く、さうして慣れさせて差し上げてゐるんだよ、ねえ君、何も僕に御説法するには及ばないぜ、僕はお嬢さん方の又となのお友だちで、馬術の教師なんだからね、まあお嬢さん方はいゝさ、坊ちゃん方には實に困るよ。」と言つてメリーレグスは鬘を振つて話し續けた。「坊ちゃんたちと來ちやあ全く違つてゐるからね。僕等が仔馬であつた時に仕込まれたと同じやうに、馴けてやらなくつちやいけないうよ、他の子供さんたちが二時間ばかり

も僕を乗り廻してから、今度は坊ちやんたちが自分の番だと思ふのも、それやあ無理はないさ、勿論僕だって不同意ぢやないさ、それで交るゝ乗せて僕も畠だの果樹園だのを上つたり下りたり、駈け廻つて一時間餘りも續けたよ、坊ちやんたちは太い榛の枝を切つて来て乗馬鞭にして、それでかなりひどく打ちつけたが、それでも僕は機嫌よく忪へて居たよ、だが、終ひにもうこれで十分だと思つたから、知らせるために二三度立ち停つてやつたね、君！ さうだらう、子供なんていふものは馬も機關車か何かのやうに考へてゐるんだからね、思ふ存分幾時間でも、又どんなに速くでも馬を走らせられるものだと思つてゐるんだからね、馬にも疲れるといふこともあるし、痛いといふ感じもあるといふことを御存じないんだからね、そこで一人の坊ちやんが理由もわからずむやみに僕を打つたから後足で立ち上つて後へコロコロと落してやつたんさ、たゞそれだけの話ですよ、坊ちやんは又乗つて來たから、僕は直ぐ落してやつた、今度は他の坊ちやんが乗つたが、乗るや否や手に持つた棒でもつて又打ち始めたから、僕も癪に觸つて草の上へ投げ出してやつた、それから次々と同じやうにして、坊ちやんたちは、みんなやつと理由がわかるやうになつたんさ、たゞこれだけのことなのですよ、坊ちやんたちは別に悪太郎ではなし、又残酷なことをしようとは思つてゐないんだから、唯、後の懲らしめに戒めることぐらゐはしておかなくちやなるまいぢやないか、ねえ君、さうだらう、ところで坊ちやんたちは僕をジェームスのところへ連れて行つて告げたんさ、しかしジェームスは坊ちやんたちの頼にした太い棒を見て、大いに立腹したらしく、そんな物は牛飼か無頼漢の持つてるもので、若様方

の持つべきものではないと言つたんだぜ。」

ジンジャーが横から口を出して、

「私がお前さんだつたら、餓鬼共をうんと蹴飛ばして思ひ知らしてやるのになあ。」

「それやお前さんならさうもしたらうがね、僕は御主人を怒らしたり、ジェームスに迷惑をかけたたりするやうな、馬鹿者ではないさ、乗つてる間は坊ちやん方の御守をするのは當り前だからね、僕があづかつてゐるんだから、ついこの間、御主人が牧師の奥さんに「奥さん、お子供衆のことは御心配なさるには及びませぬ、このメリーレッグスは私や奥さんと同じやうに子供たちを氣をつけるでせう。いくらお金を出すからといつたつて、この馬だけは賣らうとは思ひませんよ、全くよい性質の馬で頼みになりますからね。」と仰つたのを聞いたよ、五年間も御親切にしていたことを忘れたり子供が一人や二人、お悪戯をなすつたからといつて、意地悪くなつたりするやうな恩知らずの畜生めだと僕を思ふかい！ どうして、どうして、お前さんは未だ一度も大切にされたところに居たことがないから、そんなに、何にも知らないのさ、全く氣の毒な話さね、しかしね、お前さんに言ふがね、善い家に飼はれると馬は善くなるよ、僕はどんなことがあつても、皆さんを怒らせようとは夢にも思はない、心から皆さんを可愛がつてゐるからね。」とメリーレッグスは言つた。そしてしきりに鼻を鳴らした。毎朝戸口のところまでジェームスの聲音が聞えるといつも鼻を鳴らせるのである。メリーレッグスはそれから、言葉を續けた。「だから、若し僕が蹴りでもして見給へ、如何なるか

判りきつてゐるぢやないか。直ぐさま賣り飛ばされて忽ち名譽はすつかり潰れてしまふさ、最後は屠殺屋の小僧に追ひまкруられて果てるか、それとも海邊で遣り切れなくなるまで忙しく働かされても、この馬はどんなに足が早いかと氣を附けるばかりで、ちつとも面倒を見てくれないやうになるか、でなけりやあ此處へ來ない前に片田舎でよく見たことだが、荷馬車に縛りつけられて旗日の休みに飲み浮れてる奴を三人も四人も挽いて、尻をびしくぶん撲られ通しになるのが關の山さ。」と言つてから頭を振つてみせた。「あゝそんなことがあつては大變だ、どうかそんなことのないやうになあ。」

10

私もジンジャーもどちらかと言へば、まづ競馬種の方で、馬車馬によくあるやうな脊のすらつとした品種ではなかつた。脊丈は五尺一二寸であるが、馬車馬にも乗馬にもどつちにも結構といふところである。御主人はいつも「馬にしても人間にしても一つしか役にたかないものは大嫌ひだ、別にロンドンの公園などで人にみせびらかすんぢやないから、活潑で役にたつ馬が大好きだ。」と仰しやつてゐた。私たちの一番愉快であつたのは乗鞍を置いて騎馬にされて、お揃ひで出かける時だつた。ジンジャーには御主人、私には奥様、二人のお嬢様はサー・オリブとメリー・レグスにお乗りになつて、みんな揃つて駈けたり走つたりする時は嬉しくつて私たちはみんな大元氣だつた。一番得なのは私で、いつも奥様をお乗せしてゐるので軽くはあるし、お聲はお優しいし、それに手綱をお持ちに

るにしても極く軽く手を觸れていらつしやるのでどちらへ導かれても嫌な手綱などとはちつとも感じないくらゐだつた。あゝ！若し人が手綱を軽く持つてくれたら馬にとつてはどんなに樂だか——口の具合といひ、心持といひ、どんなにいゝかといふことを知つてくれたら。——馬の口は非常に微妙なもので、やたらに傷めたりしなかつたら、乗手の手のどんな微な動きやうでも感ずるものだ。何をわれゝに喋べつてゐるのか直ぐ判るのだ。私の口は決して傷められたことはなかつた。

ジンジャーは私の口の癖んでゐないのをいつも嫉んで、「私の口がお前さんのやうに申分なくといふわけにいかないのは、全く驥け方が悪かつたため、これもみんな人のしたことぢや。」と愚癡をこぼしてゐた。すると一番年かきのサー・オリブは傍からかう言ふのである。「こら、こら、そんなにいらゝくして怒るもんぢやないぞ。お前さんが一番名譽ぢやないか。牝馬が旦那様のやうな大きな重い方を乗せて、大に威張つて威勢よく駈けることが出来るんぢやねえか、奥様をお乗せ申すことが出来ないからつて、何恥しいと思ふことはないぢやないか、われゝ馬の分際では何でも成りゆきに従つてゐなければならぬ、親切に使つてさへ下すつたら、それで満足して喜んでゐなければいけないよ。」

私はいつも、何故サー・オリブの尾はあんなに短いのか不思議でならなかつた。

その長さはたつた五六寸しかなくて、毛が房のやうに下つてちつとも尻尾らしくなかつた。或る休みに目に私たちは果樹園で遊んでゐた時、「どんな怪我をして尾を失くしたんですか？」とサー・オリ

グーに訊ねてみた。

「何？ 怪我だつて、」と怖しいけんまくで彼は鼻を鳴らして、「これは怪我ぢやない、憎くらしい、残酷な情知らずの目に遇つたのさ、おれが未だ若い時分に、かうした酷いことをする家へ連れられて行つたのだ、そして多くの人が来ておれの長い立派だつた尻尾を肉も骨も一緒に切り取つてなくしてしまつたのさ。」

「何だつて、怖ろしい！」と私は叫びだした。

「全く考へても怖ろしい、怖ろしいことだつたよ、しかし、随分長い間ひどく痛み續けたが、痛んだばかりぢやない、お前さんたちのやうに尻尾のあるものは何の氣もなしに蠅を追つ拂つてしまふけれども、身體にとまつてチク／＼刺す蠅を拂ひ除けることも出来ない苦痛はお前さんたちにはわかりつこはないよ、これはおれの一生の苦痛で、又一生の損だ、しかし有難いことには今の馬はそんなをことされないで済むやうになつたからな。」

「ぢやあ何のために人間はそんなことをしたんだらう？」とジンジャーが訊ねた。

「流行のためさ。」と言つて老馬は脚を踏みならした。——「流行のためつて何のことだかお前さんたちには解るかどうかね、おれの若い頃は善い馬で尾を切り縮められないものはなかつたよ、おれたちをお造りになつた神様がおれたちに必要なものや體裁のいいものを御存じないから人間の手で直すのだといはぬばかりに、臆面もなくやつたものさ。」

「ではそれが流行つていふものかな？ 恰度私がロンドンに行つた時に怖ろしい轡といふものでわれの頭を釣り上げたのはやはりその流行といふものかね？ あれぢやあ随分苦しんだが。」とジンジャーは感慨深さうに言つた。

「それはさうさ。」と老馬が叫んだ。

「おれは流行つていふことは世の中で一番悪いことだと思ふな、早い話が先づ犬を見るがい、や、強さうに見せるといつては尻尾を切つたり、伶俐さうに見せるといつては綺麗な可愛らしい耳を切つて尖らしたりしてぢやないか、馬鹿らしい話ぢやねえか、おれは一度赤い獵犬と友だちになつたことがあるが、その犬はスカイと言つたが、大變おいらが好きで、おいらの厩にばかり寝て、外では決して寝なかつたよ、そしてこの牝犬は飼槽の下に自分の寢床をこしらへておいて、其處で五六疋の子を産んだよ、上等の種だつたので五疋とも殺さずにおいてあつた。仔犬を産んだ親犬の喜びはどんなだつたらう！ その仔犬共がやつと眼を開けてよろ／＼歩き廻る頃は實に可愛いものだつたぞ。しかし或る日のこと、下男が来て仔犬をみんな持つて行つてしまやアがつた、これはおれが踏みつぶしてもするかと案じたのかも知れないと思つたが、實際はさうぢやなかつた、その夕方になると可哀さうな親のスカイはその口に自分の仔犬を一疋づつ銜へて歸つて來たが、決して仔犬どもは前のやうな嬉しさをなげな様子ぢやなかつた、血を垂らして悲しさを鳴き聲をたて、あるぢやねえか、見ればその尻尾は短くちぎられ、柔くびら／＼とぶら下つた綺麗な小さな耳垂も切られてあるぢやねえか、さあ

親犬はどんなに悲しみなげいたことだらう、可哀さうにおれはその時のことを今だに忘れることが出来ぬ、そのうちに子犬は疵もなほつて、痛みも忘れてしまつたが、耳の中の柔く細かい大切な場所へ塵芥が這入らないやうに、怪我をしないやうに保護してゐた耳垂は、いつまでも取り返しつかないやうになつてしまつたのさ、それほどなら人間は自分の子供の耳を切つて尖がらして伶俐らしく見せたらよからうにね、何故さうしないのか、そして又自分たち子供の鼻頭をもぎとつてさ、元氣らしくすればいい、ぢやねえか、何故さうしないのか、神様が折角お造り下さつたものをわざ／＼痛く目に合せたり不具にさせる権利がどうして人間にあるものか。」

おとなしさをうたつたサー・オリヴァーはこれでなかく／＼熱烈な馬だつた。そしてこの馬の話は私に耳新しく、また物恐しく聞えた。今までに人間といふものに對してこの時ほど厭な心が起つたことはなかつた。勿論ジンジャーも大いに激したらしく、頭を振りあげ、眼を輝かし、鼻の孔をふくらまして「人間こそ畜生で頓馬だ。」と罵り續けてゐた。

「頓馬だなんて誰が言つてるんだい？」とメリー・レグスは今まで林檎の老木の老木の下枝に自分の身體を擦りつけて居たが、急に此方へやつて來てから言つた。「頓馬なんていふ奴は誰だか知らないが、甚だよくない言葉だと僕は思ふよ。」

「悪い言葉は悪い奴につけるために出來てるのさ。」とジンジャーはあつさり言つて、サー・オリヴァーのことを話して聞かせた。

「そいつはまつたくの話だらうよ。」とメリー・レグスは悲しさに眼を瞬たいて、「僕が最初に居た家でも犬がさういふ目にあふのを見たことがあつたからね、しかし、僕等は此處でそんな話は口にするのはよさうよ、御主人もジョンもジェームスも始終僕等によくしてくれるんだから、こんなところで人様の悪口を言ふのは恩知らずのやうで善いことぢやないぜ、他所にだつて善い御主人や善い馬丁があるんだからね、さうだらう、それや言ふまでもなくこの家が一番善いけれど。」

善良なメリー・レグスのこの思慮ある言葉を尤もだと感心してみんな一時の怒りもさめてしまつた。殊に主人思ひのサー・オリヴァーは誰よりも感じ入つたらしかつた。私は話題を變へるつもりで、「眼かくしは何の役に立つのかね、誰か知りませんか？」と訊ねた。

「誰も知らないさ、——何の役にも立たないんだから。」サー・オリヴァーはぶつきらぼうに言つた。するとジャスチスは例の物靜かな調子で、「馬が物に驚いて跳び出したり狂ひ出したり怪我をしたりしない用心のためさ。」

「そんなら何故乗馬につけないんですか、殊に婦人の乗馬には極く必要だと思ひますがね。」と私が言ふと、ジャスチスは落着いた聲で、——

「なあに、全く理由も何もあるもんかね、これも流行ですがよ、人間の言ふには、馬が自分の馬車や荷車の輪が自分の後で廻轉して來るのを見て驚いて逃げ出すだらうといふことだがね、へッへッへッ——しかし人間が乗つてゐる時だつて、市中が賑やかならば自然に周圍の馬車や荷車の輪も目に入る

ぢやないか、時には苦しいほど車がこみあつて車輪がちら／＼する時もあるさ、だけどその時だつておれたちはちつとも逃げ出しはしないよ、もう慣れつこになつて、ちやんと譯が解つてゐるんだからね、だから眼かくしがなくつたつて困ることはありやしませんね、なければ却つて何もかも見えて自分の用心のしようもある、物がちつとも見えなくつて解らないよりはびつくりすることがずつと少いと思ひますがね、若い頃には怪我をしたり、びつくりさせられたりする神経質の馬もあるから、この眼かくしも必要かもしれないが、しかし僕は神経質ではないからどうとも判断がつきませんやね。」

するとサー・オリヴァーが口を出した。

「夜はこの眼かくしは實に危険なものだと思ふね。われ／＼馬は人間よりは暗闇でも見えるんだから、馬の眼さへ自由に使へたら怪我をしないでいい、場合が多からうと思ふね、今も覺えて居るが、二年か前のこと、或る闇夜に二頭立の柩車が墓地から歸つて来る途中、百姓のスパローの家の側の路傍に池のあるところまで差しかゝると、生憎車の輪があまり端に行き過ぎて柩車は忽ち水の中へびつくり返つてしまつたのさ、馬は二匹とも溺死してしまつて、馭者だけは命から／＼助かつたことがある。この惨事のあつた後は、たやすくわかるやうに丈夫な白い柵が出来たが、しかし、若しあの時馬が眼かくしで半盲にされてゐなかつたら、馬自身で端際に寄らないやうに注意してこんな惨事は爲出かさなかつたらうにね、君が未だこの家へ來ない前におれたちの御主人の馬車も轉覆したことがあつたが、それは若し左側のランプの火が消えてゐなかつたら、ジョンは道普請で打つちやらかしてあ

つた大穴を見つけたらうといはれたが、或はさうだつたかも知れぬ、しかし、若し老馬コリンが眼かくしをされてゐなかつたら、ランプがあらうとなからうと道普請の大穴を見つけたにきまつてゐるよ、決して危険の場所に飛び込むやうな馬鹿な馬ではなかつたからね、ところが馬は非常な怪我をし馬車は壊れる、今となるとジョンがどうして助かつたか不思議なくらゐさ。」

すると、ジンジャーが鼻を曲げながら、

「人間様がそんなにお伶俐ならこれから後に生れる馬の子は眼を顔の兩側ではなく額の真中につけるやうに誂へたらよからうよ、人間様はいつでも、自然を改良したり神様のお造りになつたものを勝手に直したり出来ると思つてるんだからね。」とヒステリカルな聲で言つた。

又も話が元へ戻らうとした時、メリー・レグスは知つたか振りの顔を振りあげて言つた。

「これは内證の話だがね、どうもジョンは馬に眼かくしをするといふことを賛成してゐないやうに僕は思ふがね、或る日ジョンと御主人とがそれに就いて話してゐるのを聞いたがね、『さういふ時が今に來るかもしれないよ。』と御主人が言つていらつしやつたよ、その時御主人が『今まで眼かくしに馴れた馬が急にそれを止さられたら却つて危険かも知れない。』と言はれるとジョンが、『外國でやつてあますやうに仔馬にはみんな眼かくしなしで躰けたらまことに善いことでせう。』と言つて居た。だから、みんな元氣をつけて陽氣に果樹園の向う側まで一走りしようぢやないか、この風で林檎も吹落されたらうよ、蛙蟪に負けないで行つて食べようぢやないか。』

この愛嬌あるメリー・レッグスの言葉に誰も異存のあらう筈はない。一同は長い話を止めて、草の上へ散らばつたうまい林檎を頬張つて、元氣を引き立てることにした。

長くあればあるほど、バートキック家の居心地の良さが身に沁みてきた。われ／＼は皆御主人や奥様を敬愛してゐた。又御夫婦も、馬、驢馬、犬、猫、その他の家畜鳥類に至るまで誰にも彼にも御親切にして下さつた。酷くされたり虐待されたりしてゐるもので、御主人御夫婦の情によつて甦らなものはなく、従つて召使の者に至るまで同じやうな優しい心で扱つてくれた。

ゴルドンさんと百姓のグレーとは、二十年以上も一生懸命に、荷車の馬に揚綱を使ふのはいけないといふことをやかましく言はれたさうで、それ故、この邊では揚綱をあまりしなくなつたが、しかし偶々馬が頭を緊め上げられて重荷をひいて行くのを御覽になると、奥様はきつと馬車を留めさせて、お優しい眞面目な、きりつとした言葉をもつて、馬に揚綱を使ふのは無分別な残酷なことだから以後しない方がよからうと、おだやかに馬方に諭された。どんな人でも、このお優しい奥様に逆ふやうなことは出来なかつた。あゝ、それにしても女の方たちがみんな奥様のやうでしたらどんなによかつたらうに。

御主人も折々小言を仰やることがあつた。或る日の朝、御主人が私に乗つてお家へお歸りの途中、

一人の頑丈な男が、二輪馬車を足の細い神經質らしい紅栗毛の小馬に曳せてやつて来た。恰度お邸の門のところまで来ると、どうしたのか急に仔馬が門の方へ向き直つた。すると、馭者は何とも言はずいきなり馬の頭をひどくしやくり廻したので、馬は殆んど尻餅をつかぬばかりの酷い目にあつた。轉びさうになつた仔馬がやつとのことで持ちこたへて再び行かうとするところを馭者は後からひどく鞭で撲り始めた。馬はびつくりして躍りあがると、今度は顎も裂けよとばかり頑丈な腕の力で力一杯に手綱を引いて馬をひき戻し、烈しく鞭でひつぱりたい。あの柔かい口がどんなに痛いものかその時ほど私は強く感じたことはない。毆られてゐる馬よりも見てゐる私の方が怖しさにふるへあがつた。この時御主人の命令で私は直ぐその側へ駆けつけた。

「ソーヤー、その仔馬は肉と血で出来てゐるぞ！」と御主人は厳しい聲で仰やつた。

「さうですが、肉と血と痼癩とです、あんまり我儘で手におへませんよ。」と如何にもいらだつてゐるらしく馭者が答へた。

このソーヤーといふ男は建築請負師で度々用があつてお邸へやつて來ることがあつた。御主人は儼然として、

「今のやうな扱ひ方をすれば馬がいふことを聞くと思ふのかね？」

「道は眞直なのに、横へ向く馬鹿がありますか。」と男は荒々しく答へた。

「お前さんがその馬に乗つて、折々家の廣庭へ來たことがあるから、覺えて居たのだ、今日は此處へ

入るんぢやないとは知りやうがないぢやないか、しかし、そんなことはどうでもよいが、ソーヤーさん、馬にさういふ不人情な亂暴なことをする人は未だに見たことがないね、そんなに癩癩を出すのは馬を悪くするばかりだよ、よく考へなさい。人に仕向けたことにしても、獸に仕向けたことにしても、私たちはみんな神様の審判を受けなければならぬんだからね。」

かう仰やつてから御主人は靜かにお家へお歸りになつたが、そのことのためにどんなに御心を痛めていらつしやつたかといふことが、その御聲でも察することが出来た。御主人は目下の者に遠慮なく仰やるばかりでなく、同等の人に對してもいつも遠慮なく注意をされた。何時だつたかやはり私がお供をした時である。途中でラングレー大尉といふお友だちにお逢ひになつた。大尉は大形な馬車をお供らしい葦毛の馬二疋にひかせてゐたが、暫く話してゐられた後、

「ゴルドンさん、私のこの新しい馬は如何です、貴君はこの邊で馬の鑑識家でいらつしやるから、一つお考を聴きたいものですか？」

御主人は少し私を後にさがらせて、向うの馬の恰好がよく見える位置になると、
「これはまた素晴らしく立派な馬ですね、若し見かけ通り性質の善い馬でしたら、確かに私はこの馬ほど立派なものはないと思ひますね、しかしあなたの例のやり方で、どうやら馬を苦めて力を弱らすやうなことをしていらつしやるらしいね？」

「それやどういふことです、あ、揚綱のことですか、仰やることは相變らずですね、しかし馬が頭をあげてるのはなか／＼見よいものですよ。」と大尉が言ふと、御主人は、

「確かに、さうです、しかし馬が頭をあげられるところを見るのは私は大嫌ひです。氣の毒だと思ふと外觀も何もあつたものではありませんからね、成程あなたは軍人だから、頭を上げ！とか何とか言つて、あなたの聯隊が觀兵式で體裁よく見えるのが定めてお好きなんでせう、しかし部下の兵士たちの頭を後から板をあて、體裁よくなさつたんなら、練兵の出來榮えもあなたの名譽にはなりませんまい、それもうるさくて頭が疲れるだけのことで、唯の觀兵式には大した害もないでせうが、いざ銃劍を構へて敵に向ふ場合には、全身の筋肉を自由に動かし、全力を出さねばなるまいから、板で頭をおさへられてゐては勝利は覺えないでせう、馬も人間と同じことで、いちめたりぢらしたりしては馬の勢力を減らすばかりで、仕事に全力を入れさせることが出來なくつて、頭の方にばかり氣をとられて直ぐ疲れてしまひますよ、馬の頭だつて人間の頭と同じやうに、自由に動くやうに出來てゐることは間違ひなしですからね、若しわれ／＼人間がもつと常識によつて行動し、流行を逐うてことをしなかつたら萬事が苦もなく出來ることとせうと思ひます、それに馬が足を踏みそこなつた場合、頭を後へ引つばられてゐたら、足を踏み直すことがむづかしいのは誰も知つてゐることとせう。さて、」と御主人はほがらかに笑ひながら、「また、私の十八番を出して、きまり文句を並べましたが、大尉。どうです、一つ私のこの言葉に乗つて、私の流儀にお仲間入りをして下さいませんか。あなたが手本を見せて下さつたら、大變世の中に擴まりませうからね。」

「あなたの御説は御尤ですよ、確かに一打ちあてられました、しかし、——まあ、もう一度よく考へて見ませう。」

そこで二人はわかれた。

12

秋の末の或る日だった。私が挽いた獵馬車で御主人は遠方へ旅行に出られることになった。ジョンもそのお供だった。私はこの獵馬車が大好きなのだ。何故つて？ それはとても軽いし、輪が高く面白く走れるからだ。大雨が降った後で、風が烈しくつて枯葉が夕立のやうに道に吹きとばされてあつた。私たちは面白さにひかれて駆けてゆくと、やがて通行人から橋錢をとるところへ来た。見ると低い木の橋が架つてゐる。川の堤が少しばかり高くなつてゐるので、橋は高くしないで平に架け渡してあつた。若し川一杯に水が出ると橋の橋桁や橋板は水に浸りさうなからであるが、丈夫な欄干が兩側にあるので、通行人は別に危いとも思はなかつた。

しかし、その時、急に水嵩が増してゐるから、この分では今夜は心配だと番人が言つてゐた。なるほど田のところへはもう水につかつてゐた。道の低いところが一個所あつて、水が私の膝の半分の下までも来てゐた。別に道が崩れてもゐなかつたのと、御主人がそろりと歩ませて下すつたので何のこともなかつた。

さて目ざす町へ到着すると、私は勿論御馳走にあづかつたが、御用がかなり手間どつたので、歸りはもう日暮れ方になつてしまつた。風が非常に強くなつてゐた。こんな暴風の日によそに出たことは今までになかつたと御主人はジョンに話して居られた。私たちが森の裾を通つた時など、大枝が恰度若芽が風に靡くやうに吹き廻されて怖ろしい音を立て、鳴つてゐた。まつたくこれはひどい暴風だと私は思つた。

「この森を無事に通り抜けたいものだね。」

と御主人が不安さうに言はれる。

「左様でございます。大きな枝でも落ちて來たらそれこそ大變ですよ。」

と、ジョンが答へた。その言葉が終るか終らぬうちに、凄まじい音を立て、檜の樹が一本、根こそぎに他の樹の間に倒れて、私たちの行手をふさいでしまつた。私は驚いて立ち止つた。自分もきつと顛へてゐたらうと思ふが、しかし後ずさりをしたり、逃げだしたりはしなかつた。これもちやんと躓けられてゐたお蔭だと思ふ。ジョンは馬車から飛びおりて直ぐ前の方へ廻つていつた。

「これや、すんでに危ないところだつたね、——さてくどうしたものだらう？」と御主人が言はれると、ジョンは、

「左様でございます。まさか木の上を行くことも出来ません、さうかといつて廻つて行くことも出来ませんし、これでは四辻まで引き返すよりほかに方法が御座いません、がしかし、木の橋まで戻

るには、二里半はありますから、かなり時刻がおそくなりますが、幸に馬は未だ元氣でございますから——。」

仕方がないので私たちは四辻に引き返して、それから木の橋まで戻ったが、その時はもう四邊が暗くなりかゝつてゐた。見ると水は橋の真中を越えてゐた。しかしこんなことは大水の出た時は折々あることで別に驚くべきことでもないの、御主人もお止めなさらず、私もどん／＼足早に進んでいつた。だが、一瞬間、私の足が橋爪に先づ觸れた時「これはあぶないぞ」と思つたのでびつたりと足を止めて前へは一步も進まなかつた。

「しつかりしろ！ ビュウテイ！」と叫びながら御主人は鞭をお當になつたが、私はどうしても動かさなかつた。すると今度はビシャンと強くお打ちになつたので、私は思はず跳び上つたが、それでも進まうとはしなかつた。

「旦那様、これは何か危険なことがあるに相違ありません。」と言つてジョンは馬車から飛び出し、私の頭の方へ廻つた。そして、あたりをよく見てから私の口を取つてひき出さうとした。

「さあ、おいで、ビュウテイ、一體どうしたといふのだ。」
あ、何と言ふ悲しいことであらう。私には何とも言葉で言ふことは出来なかつた。橋の危いのが解りきつてゐたがどうすることも出来なかつた。この時、川向うの番人が家から駈け出して来て、炬火を振りかざしながら、まるで狂人のやうに叫びだした。

「危いぞ、危いぞ！ 止つた、止つた。」

「どうしたといふのだ。」と、御主人が仰ると、

「橋の真中が壊れて穴があいてるんだ、歩くと川へ落ちるぞ！」と叫んでゐるのである。

「あゝ、よかつた。」と御主人はほつとしたやうに仰つた。

「こら、ビュウテイ。」と言ひながらジョンは手綱をとつて靜かに私を川岸の右手の道へと引いていつた。

この時、日はもうすっかり沈んでゐた。樹木を倒した大嵐も暴れるだけ暴れてもうヒツそりとなり四邊に夜は迫つて愈々暗く、天地は森閑となつてしまつた。そこで私はそろ／＼と歩き出した。道には車輪の音も響かず、御主人もジョンも黙つてゐたが、やがて、御主人が重々しげに話し出された。私にはその言葉がよく聴きとれなかつたが、しかし私には御二人の考へが何となくわかるやうな氣がした。若し私が御主人の御言ひつけ通りに彼の橋を渡つてゐたなら、今頃は馬も馬車も主人も馬丁もみんな川に落ちてしまつてゐるだらう。流れは激しいし、空は暗いし、燈火もなければ助けてくれる人もなし、みんなは必ず溺死してしまつたであらうといふやうなことを語り合つてゐられたらしい。最後に御主人が言はれた。「神様は人間に道理を辨へる力を與へ自分で考へて物事を悟ることの出来るやうにして下さつたが、しかし動物には、この道理を考へて悟るのではなくて、只知ると言ふ力をお授けになつた、だから理窟で考へるよりは一倍早くて確かなのだ。その知るといふ力をもつて動物

が人の命を助けるやうになるのだ。——すると、ジョンは犬や馬がさまざまの不思議なことをしたお話を澤山して、一體人間は自分の飼つてある動物を大切に親切にすることを知らずにあずぎると言つた。かういふジョンこそ動物の好いお友だちだとその時私はつくづく思つた。

それでも、やつとのことで邸園の門の所まで来ると園丁が私たちを待ち倦んでゐるのが見えた。「奥様が暮方からそれは大變な御心配でございます、何か變事でも起つたのではないかと心配して、ジェームスを栗毛のジャスチスに乗せて、木の橋の方へ様子を見におつかはしになりました。」

女關にも二階の窓々にも灯影が見えてゐた。私たちが歸つてきたのを見ると、奥様が飛んで出て來られた。

「まあよく御無事で、私、いろ／＼考へまして、どんなに心配いたしましたでせう、何の御怪我也ございませんでしたか？」

「いや、大丈夫、しかし若しブラック・ビュウテイが私たちより伶俐でなかつたら、みんな橋の上から落ちて溺死してしまつたらうに。」と御主人は言はれたが、それ以上は聞くことが出来なかつた御夫婦は御家にお這入りになるし、ジョンは私を厩へ連れて行つてしまつたから。

その晩の大した御馳走を私は今でも忘れることは出来ない。おいしい糠、豆の挽割と例の麥とを交ぜた私の大好物、それからふはりとした厚い菓の床！ 私は随分疲れてゐたので、それがどんなに嬉しかつたことか。——

ジョンと私は、それから暫く経つたある日、御主人の御用で出かけた。そして、長い眞直な道を歸つてくると、一人の男の子が仔馬に乗つて柵を飛び越えようとしてゐるのにぶつかつた。どうしても飛ばないので、手に持つた鞭でピシ／＼撲つてゐるが馬は一方の道へ外れて行くばかりなので、今度は馬から降りて一層強く打ち續ける。尻だけではない、頭をなぐる。それからまた飛び乗つてもまた柵を飛び越させようとする。きまりが悪いくらいまで腹をつゞけさまに蹴つても、馬はどうしても飛ばないのだ。私たちがその側へ行つた時は仔馬は頭を下げ後足で躍り上つて、見事子供を幅の廣い生垣の中へ落してしまつたところだつた。手綱を首からぶら下たまゝに歸つて行く馬のうしろ姿を見てジョンは大笑ひしながら、「いゝ氣味だ當り前だ。」と言つた。

子供は生垣のとげの中でもがきながら、「をぢさん！ 助けてくれ！ 此處から出してくれえ。」と叫び續けてゐた。ジョンは、「御苦勞様、お前は間違ひのない相當したところにあるんだぜ、少し引つ搔かれて見りやあ、初めてわかる話さ、あんまり高いところを、馬にとばせようとしちやいけないといふことがわかるだらうよ。」と言つて打つちやらかしたまゝ、通り過ぎてしまつた。

「あの小僧奴、酷いことをするばかりでなく、嘘をついてどんなことを言ふかわからないから、百姓

プシュビーの方を廻つて歸らうぜ、なあ、ビウテイ、それで若し誰か訊ねるものがあつたら、本當のことを言つて聞かさうよ。」と、ジョンは獨言を言つてゐた。そこから私たちは右へ曲つて直ぐ草乾場へ行くと百姓の家が見えた。プシュビーは道へ飛び出しそれから女房は大變びつくりしたやうな顔附をして門口に佇んでゐた。

「ねえ、家の子供を知りませんか？ 一時間前に家の黒馬に乗つて出たんだが、馬だけは今しがた歸つて來たけれど、乗手はゐないんだがね。」

「正しい乗り方ができぬなら一層のこと乗手が居ない方がいい、ぜ。」

「それあ一體何のことかい？」と百姓は眼をくりくりと動かした。

「かうさ、お前の家の子供があの良い馬を打つたり蹴つたり撲つたりしてゐるところを私は見たよ、高くて馬にはとても跳び越せさうもねえ垣根を飛び越さないからと言つてさ、馬はさうされてもおとなしく何にも悪いことはしなかつたがね、しまひに後足をあげて生垣の上へ子供をひつくりかへしただけのことさ。子供さんは私に助け出してくれと頼んだが——すまねえ話だが、助けてあげたくはなかつたよ、なあに、別に骨が痛んでゐる様子もねえし、ほんのちつとばかりのひつかき傷がついたくらいだからね、私は馬の奴が好きでな、馬が虐められてゐるところでもみようものなら癪に障つてならねえんだ馬が脚をあげて蹴つたりするくらゐまで馬を怒らせるのはよくよく下手なやり方さ、何しろこれからは氣をつけなせえよ。」

ジョンの話のこゝろを聞かないうちに母親は泣き聲で叫びだした。

「まあ、ビルは可哀さうに、きつと怪我でもしてゐるに違ひない、早速迎へに行つてやりませう。」

すると、百姓は女房を制して「お前は家にゐるが、ビルはちつと身に沁みるといふのだ、私が懲らしめてやるよ、馬に酷いことをするのは一度や二度のこつちやねえ、だから今度はどうしても止めさせにやならねえからな、マンリーさん、大きに有難う、では左様なら。」

百姓に別れてからジョンは道すがら頻りに高笑ひをしてゐた。そして歸ると早速今日のことをジェームスに話してきかせると、ジェームスも吹き出してしまつた。

「そいつはい、氣味だつた。彼奴はおいらも學校で知つて居たが、俺は百姓の子だと威張つてゐて、いつも法螺を吹いたり、年のゆかぬ子供たちをいぢめたりしてゐた奴でね、俺たちのやうな年上の者は、どうしてそんな馬鹿げた囁言なんか聴くものか、學校や運動場や百姓の子だつて労働者の子だつてみんな同じだといふことを知らせてやつたよ、何時だつたか、何でも、その日は晝過の課業のあつた時だつたがね。時間の始まる少し前にビルの奴が大きな窓のところへ蠅を捕まへて羽をちぎつてゐるのを見つけたので、そつと近づいていきなり奴の横面をなぐつてやつた、するとわざと大の字なりに床の上に倒れてしまふやつた。俺は癪に觸つてゐたもの、實はびつくりしてしまつた、何しろ野郎大聲で叫び出したものだからね、生徒たちは運動場から駆け込んでくるし、先生は飛んでくるし、誰か殺されでもしたのかとそれは大騒ぎさ、調べられたつてこつちは包み隠しもしやあしないさ、みんな

な白状して、それから先生に羽を抜かれた可哀さうな蠅を見せてやつたよ、潰されたのもあれば、ヨロヨロ匍つてるのもある、そして、窓枠にのつてゐる抜いた羽まで見せてやつたよ、先生のその時の怒りやうつたならなかつたね、弱蟲のビルは未だピーピー泣いてゐたので先生は鞭の罰はやめて、午後から椅子の上に立たしておいて、その週は決して運動場に出てはならぬと言ひ渡された。それから先生は、生徒たちに弱い者を虐めることは大變不人情なことで卑怯なことであると厳かに言ひ聞かされた、その時先生の言葉で一番俺の感じたことはね。「もし酷いことをして面白がる者を見たら、それは悪魔のお仲間だと思ふがよい、悪魔は初めからしまひまで殺す者、苦しめる者であると言はれたことだ。」

「それは本當のことさ。」と、ジョンが言つた。

14

冬に近い寒い朝だつた。私は日課の練習が済んでジョンに連れられて既に歸つてきた。ジョンは私に布をかける。ジェームスは穀倉から麥を持つてやつて来る。その時御主人が手紙を手にしていらつしやつたが、何だか心配さうなお顔をしてゐられるのがよくわかつた。ジョンは私の馬小屋の戸を締めて帽子を持つて命令を待つて居た。

「お早う。ジョンや。ジェームスのことで何か不平があるなら、お前から聴きたいんだがね。」

「不平ですつて？ 旦那様——、どういたしましたして、決してそんな。」

「ぢやあ、ジェームスは働かかね、そしてお前の言ふことを訊かかね。」

「はい——それやいつも。」

「お前が見てゐないと仕事を怠けるといふことだが？」

「決してそんなことはありませんよ。」

「ぢやあ、よろしい、だがもう一つ訊かかね、彼が馬を運動に連れて行く時や、用足しに出る時、知つた者に逢ふと長話をしたり、馬を何處かにつなぎつばなしにして用もない家へ這入りこむやうな様子はないかね？」

「いゝえ、決してそんなことはありません、若しジェームスがそんなことをするといふ人があつても私には、信じられませんや、證人が證據を擧げなくちや信じられませんや、あの子を中傷しようとする者のことなんかについてちやあ、私がかれこれ言ふべきぢやありませんが、第一あんな辛抱強い、愉快なそして正直で氣の利いた若い奴はこの厩の中にもありません、彼奴のいふことも信用が出来ない仕事も確かです、又馬を取り扱ふにもおとなしくて、上手です、他の若い馬丁たちに任すよりは、ジェームスに馬を任して置いた方がどんなに安心出来るかわかりませんよ、でもジェームスの品行の證明でも要るなら。」とジョンは言葉に力を入れて頭を動かした。「このジョン・マンリーが何時でもやつてみせます、私はあの子のことを何だつて知つてゐますからね。」

御主人はジョンのこの雄辯が終るまで耳を傾けて、立つておいでになつたが、やがて笑ひだしておしまひになつた。その時、戸口に佇んでゐたジェームスの方へやさしいお目をお向けになつて、「ジェームス——その麥を下へ置いて此處へおいで、ジョンがお前を信じてゐるのは實に嬉しいことだ、ジョンはなかくしつかりした人間だね。」と言つてから剽輕に笑つて、「ジョンは滅多に人の噂を話してくれないからね、ところが今日は私の考案が圖に當つて成功したといふものだ。それはそれでこれからの用談だがね、あの私の義兄のクリフ・フェード家のウ・リアムス男爵が手紙をよこしてね、二十歳か、まあ一つ越したくらゐな、若い馬丁でしつかりした腕前のあるものを探してくれといふのだ、今まで三十年から勤めた年寄りの馭者がもう年なので身體も弱つて來たから、その下働きとなつてだんく仕事になれて、老人が老養手當を受けて職を退く頃に一人前の働手となるやうな男が欲しいといふのだがね、初めは一週間八九圓と、それに厩着に馭者服をやつて、寝るには馬車小屋の二階で、そしてその下働きにまた一人の小僧をつけるさうだが、——男爵は好人物だから若しお前が其處へ行けたら出世の端緒になるんだがね、しかし家でもお前を手離したくはない、お前が居なくなつたらジョンは右腕を失つたも同様だからね。」

「それはその通りでございます、しかしジェームスの出世のさまたげはしたくはありませんね。」とジョンは淋しさうに言つた。

「ジェームスお前は何歳だ。」と御主人は御訊ねになつた。

「來年の五月で十九になります。」

「若いね、ジョン、ところでお前どう思ふね？」

「はい。若うございますが、成人同様しつかりして居ります、力は強いし、脊は高いし、たとひ馭者の經驗はありませんでも、手先は器用でしつかりして、目敏くもあり注意も行届きますから、蹄や蹄鐵を捨て、おいて馬を悪くするやうなことはないと思ひますが。」

「さうだ、お前の言葉が何より證據だ、この手紙のしまひにもかうつけ加へてある、——若しお宅のジョンに駈られた者があたらこれに越した幸はありません、——と書いてあるよ、ジェームス！で、お前よく考へて見てくれないか、夕食の時お母さんにも相談して見てその考へを知らして呉れるやうに。」

この話があつてから二三日して、ジェームスは御主人の御都合で一ヶ月半の後、クリフ・フェード家に上ることになり定つてしまつた。そこでジェームスは此處にあるうちに出来るだけ馭者の練習をしなければならなかつた。そのために何十回馬車が仕立てられたことだらう。奥様が外出なさらねば旦那様がお獨りで二輪車にお乗りになつたものが、今度は御主人でも、またお嬢様方でも、ほんの一寸した御用をたしにお出かけになる時にさへ、きつとジンジャーと私とに馬車を引かせて、ジェームスが手綱をとる。最初のうちはジョンが一緒に馭者臺に乗つて、かれこれと、教へてゐたがしまひにはジェームス一人で立派にやるやうになつた。

そして毎週土曜日に御主人はロンドンへお出ましになつて、方々乗り廻されるので、思はず妙な街を通つたりして私はさまざまの珍しいものを見た。ロンドンへおいでになるといつも定つて停車場へ駆けつけられる。それも大方汽車が停車場へ着く間際で、馬車も荷車も、乗合馬車もみんな、我先にと一度に橋を渡らうとするところを無理にお通りになる。發車の鈴が鳴つて居て非常にこみあつて居る時橋を渡らうとするのは、馬も馭者もよほど良くないことなのだ。橋は狭いし、停車場へは急な曲り角になつて居るので、こみ合ふ中を走り抜けるには、よくよく機敏に注意して、神経を利かさないと、とても通れるものではないのだ。

15

ある時、旦那様と奥様がジェームスを馭者にして馬車でお出かけになつた。四十六哩ばかり離れてゐるお友だちをお訪問なさるのである。最初の日は三十二哩行つた。途中には幾つも長い坂があつたが、ジェームスの行届いた注意のために私たちは何の苦もなく通過することが出来た。坂を下りる時には、きつと忘れずに齒止をかける、平のところに行くとき直ぐそれを外す。ジェームスはまた私たちになるべく道の好いところを踏ませねばならぬ。上り坂が長いと、車輪を道路と筋違ひにして車の後戻りしないやうにし、息つぎの出来るやうにしてくれる。——かうしているく、氣を付けてくれる些細なことが馬にとつてどんなに力になるか知れないのだ。その上に親切に優しい言葉をかけて貰

つたら一層忝けないにきまつてゐるが。

途中で一二度休んで、恰度日が沈む頃、その夜泊るべき町に着いた。宿屋といふのは町でも目ぬきの賑やかな市場のところにあつた。いふまでもなく第一流の旅館である。アーチの門を潜つて中へ這入ると、長い庭で、その隅に厩や馬車小屋があつて、宿屋の馬丁が二人出て来て、私たちの世話をしてくれた。親方の方の馬丁は愉快な活潑な小男で黄色の胴衣を着て、片方の足が曲つてゐた。私はこの男のやうに手ばしつく鞍を外す人を見たことがない。彼は、私を撫でたり、話しかけたりして、長い厩へ連れていつたが、その厩には部屋が七八つあつて、馬が二三頭這入つてゐた。今一人の馬丁はジンジャーを連れて來た。この馬丁が私たちを擦つたり掃除したりしてくれるのをジェームスは傍に佇んで見てゐた。

それにしてもこの年取つた方の小男の馬丁ほど、手まめに素早く掃除をするものは先づないであらう。これが濟むとジェームスは私の側へ來て擦つてくれた。あんまりすることが速いのでぞんざいにやつてしまつたのではないかと考へたらしいのだ。ところが大違ひである。私の毛は丁度絹のやうに綺麗に滑らかなになつてゐた。

「俺はかなり手早くする方だが、仲間のジョンは俺よりはまた素早い。ところでお前さんと來てはもう一つ上手だ、お前さんのやうに、さう早く手落ちなくやつてのける者は世の中にはまつたく珍らしいね。」とジェームスが感心したやうに言つた。すると小男の馬丁は、

「なあに、馴れ、ば上手にもなるさ。でなくてどうするだね。四十年も同じことをやつてさ、手早いのもほんの習慣さね、早くするのが癖になればゆつくりやるのとちつとも變つたことはねえよ、樂なものだよ、いや却つて早い方が樂なくらゐさ、一體二倍も時間をかけてぐづぐづしてゐるのはまだることつて俺の性に合はねえのさ、仕事をするのにしやがみながら口笛など吹いてやつてる奴があるけれど、そんな暢氣なことは俺にはとても出來つこはねえ、俺は二十歳の年から馬の世話をしてやつてるんだ。獵馬だの競馬だのとね——見られる通りこの小ぼけな體だらう、だから幾年も競馬乗りもやつたことがあるよ、たうとうグッドウッドの馬場で、芝があんまり滑つこかつたために可哀さうに馬がころんで、俺は足を折つてしまつたよ、それから競馬乗りはしないことにしたが馬を見ないぢや生きてる甲斐がないしさ、そこでこのホテルへやつて來たんだがね、かういふ畜生をいぢること面白さつたらねえやね、この馬のやうに、性がよくつて、行儀が正しくつて、手入れのよい馬を見ると馬がどういふ風に仕向けられて來たか、俺にはよく分るよ、二十分間も俺に扱はせて見ねえ、どんな馬丁の手にかゝつて來たか、俺には直ぐ分るから、まあこの馬を見ろよ、愉快さうで、靜かで、言ふがまゝに動く。足を掃除しようとするれば足をもち上げるし、何でも言ふがまゝになる、しかしお前も知る通り、馬によつては、いつもおどくして落着がなく、注文通りも動きもせず、厩の中では顔をそむけて、人が近づきでもすれば頭を振りあげ、耳を伏せ怖がる風をする奴がある。可哀さうにな。さういふ馬はどういふ風に扱はれて來たか直ぐ分るよ、臆病な馬は跳ねたり怖がつたりするし、癩癩

な馬は意地が悪い、かうした馬の性質は大方若い時に人がこしらへ上げてしまふものさ、人間の子供と同じものだ。」

そこで、ジュームスが言つた。「お前さんのいふことは實に面白い、おれは旦那様の家でやつてるのはお前さんのいふ通りだよ。」

「旦那様とはどなただい？ 聞いても差支なけりや——どうも俺の見たところぢや好い人らしいが。」

「バートキック邸の大地主ゴールドン様さ、ほら、ビーコン山の向うにある。」

「あゝ、さうか、聞いたことがあるよ。えらい馬の鑑識家だつてね、この邊での馬乗りの名人だつてね。」

「さうだとも。けれど、若旦那様が死なれてからといふものはまるで、馬にお乗りにならなくなつたよ。」

「お氣の毒にな。その時俺は新聞で見たが、立派な馬も死んだつてね。」

するとジュームスが言つた。「さうさ彼奴は素的な馬だつたぜ、この馬の兄弟でね、だからよく似てるよ。」

「可哀さうにな。」と老馬丁は言つた。「何でも飛びにくいところだつたと覺えてゐるが、上に垣があつてその下は川まで急な堤になつてゐた筈だが、それぢや馬に足許の見えつこがねえからな、誰しも思ひ切つた乗り方をするのは好な方で、俺にしたつてさうだが、場所に依つては、よつほど手のかれ

た獵馬師でなくつちや、飛んでならねえところがあるからな、人間の命にしる、また馬の命にしる狐一疋の尻尾よりはよっぽど大事なものだよ。だから、氣をつけなくちやならないと思ふがね。」この話の中に、他の一人の馬丁はジンジャーの手入をすませて、私たちの食物を持つて来たので、ジエームスと老馬丁と一緒に厩を出て行つた。

その夜、晩くなつてから若い方の馬丁が又別な旅人の馬を連れてきた。そして手入をしてゐる時、一人の若者がバイブを銜へてお饒舌をしにやつてきた。

「おい、タウラ、頼むがね、二階から枯草を下してこの馬の飼草棚へ入れてくれないか、それからバイブだけは下においてくれるよ。」

「いゝとも、いゝとも。」——その男はさう答へて二階へ上つて行つた。頭の上の床を歩く音が聞えた。草を下してゐるらしい。ジエームスは、一番しまひに私共を見に来て戸を締めて行つてしまつた。それからどれほど眠つたか、夜の何時だか覚えてないが、何とも言へぬ變な氣持がして、眼を覺ました。起きて見ると呼吸がつまるやうである。ジンジャーは咳をする。他の馬は落着かないでコトコト動いて居る。けれど唯暗くて何にも眼に這入らないが、厩中煙が一杯だと見えてどうにも呼吸が苦しくむせつぼくて仕方がなくなつた。

氣をつけて聽いて見ると低くバチ／＼と物の爆ぜる音が聞える。一體何の音だかちつともわからないが、どうも怪しいので、私の身體中が慄へて来た。他の馬もみんなもう眼を覺ましたらしく綱を引つぼつてゐるものもあれば、烈しく足踏みしてゐるものもある。

たうとう外で人の聲がして来た。旅客の馬の世話をした旅館の馬丁が、手に提灯を持つて、厩の中に飛びこんで来て、馬の綱を解いて急いでひき出さうとしたけれど、自分が餘りびつくりして慌てゐるので、あべこべに馬を尙更怯えさせてしまふのであつた。第一の馬を曳き出さうとしても出ないので、次から次へと同じやうにやつて見るが、どうしても出て行かないらしい。で次に私のところへやつて来て、カ一杯に私を引きずり出さうとした。勿論駄目にきまつてゐる。順々にやつて見たがどうしても動かぬので、たうとう厩を出て行つてしまつた。

こんな時に出ないなんて、餘程馬鹿な話であるが何だか何處へ行つても危いやうで、そして誰も信用のおける人がゐないんだから仕方がない。

どうも様子がまるで變つてゐて不安でならぬ。開けた戸口から新しい空氣が這入つてくるので少しは呼吸が楽にはなつたが、しかし頭の上の物音は一層ひどくなつてゆく。私の飼草棚の棧の隙間から上の方を見ると、赤い火が壁にと映るのが見える。私はこの時外で、「火事だ！」と叫ぶ聲を聞いた。この時老馬丁が落ちついて而も機敏に這入つて来て一疋の馬を引き出し、次のも出さうとしましたが、もうこの時は火焰が戸のところまで来て、上の方の音は機關車のやうに恐ろしく響いてきた。

次にジェームスの聲が聞えた。例の靜かに威勢のよい聲で、

「さあ、出て来い、ビュウテイ、眼を醒まして一緒にくるんだぞ。」

私は戸口に一番近く立つてゐたので、ジェームスは私のところへ一番先に來たのである。彼は私を撫でながら、

「ビュウテイ、さあ轡を嵌るんだぞ、直きに煙たくないところへ連れ出してやるからな。」

轡はすぐに嵌つた。ジェームスは自分の襟巻を取つて私の眼かくしにして、撫でたり機嫌を取つたりしながら、私を厩から引き出した。安全な場所へゆくと、眼かくしをとつてジェームスは叫んだ。

「おい誰かこの馬の口をとつてあてくれ、おれは又引つ返して、他の馬を出して來にやならん。」

すると脊の高い幅の廣い大男が現はれて私を受けとつたので、ジェームスは再び厩へ急いで引き返した。ジェームスが行つてしまふと私は大聲で嘶いた。後になつてジンジャーが言つたが、私の嘶き聲が若し聞えなかつたら、恐ろしくて外へ出る氣にはなれなかつたさうである。庭の中は大混雑であつた。他の厩から馬がみんな引き出される。小屋からは馬車を引き出して火の燃え廣がつた時の用心をする。庭の向側の建物では窓はすつかり開いて、大勢の人が騒いでゐた。しかし私は厩の戸口の方をぞつと見つめてゐた。煙は今までよりは一層酷くなつて赤い火焰がチラ／＼と見える。この時大勢の人たちの騒ぎたてる聲の中から、はつきりと聲高な御主人の御聲を聞きつけた。

「ジェームス・ハワード！ ジェームス・ハワード！ お前其處に居るのか！」けれども何の答もな

かつた。その時、私は厩の中で何か倒れたやうな音をきいた。忽ち私はジェームスがジンジャーを連れて煙の中から出て來たのを見て、嬉しさに思はず大聲に嘶いた。ジェームスは苦しさに咳を續けた。ジェームスは物が言へないほど興奮してゐた。

「偉い、偉い！」と御主人はジェームスの肩をさすりながら、

「怪我でもしたか？」

しかし、ジェームスは未だ言葉が出なかつた。唯頭を振るばかりであつた。その時私を掴まへてゐた大きな男が、

「實に勇氣のある子供だ。實に感心だ。」と言つてゐた。

「さあ、ジェームス、お前一息ついたら出來るだけ早く此處から出ようぢやないか。」と御主人は勵ますやうに言はれた。するとその時市場の方から人の駈けて來る音と車輪のゴロ／＼といふ音が騒々しくひびいてきた。

「やあ。蒸氣ポンプだ。蒸氣ポンプだ。」と二三人の人が喜びの叫び聲をあげた。

「後へよけるんだ、さあ、道をあけるんだ。」

石の上を雷のやうな音をさせて二頭の馬がポンプを挽いて庭へ駈け込んできた。消防夫は飛びおりる。火事の場所はたづねるまでもない。屋根から火がバツ／＼と見えてゐる。

私たちは大急ぎで廣い靜かな市場へ出た。空に星は輝いて、總てがひつそりと靜かだつた。後の方

で火事場の物音が聞えるばかりである。向側の大きな旅館へゆくと、直ぐ其處の馬丁が出てきた。

御主人は「ジェームス、私は直ぐ奥さんのところへ行かなくてはならぬからね、馬はお前にすつかり任すから、お前が必要だと思ふ物は何なりと言ひつけたがよい。」と言ひ置いて行つておしまひになつた。御主人は駈けてはいらつしやらなかつたが、人間があんなに早く歩けるものとはそれまで私はちつとも知らなかつた。

私たちがこの厩に這入る前に怖ろしい音を聞いたが、それは前の厩に残された馬が焼け死ぬ時の聲であつた。私もジンジャーもその悲鳴を聞いて身の毛がよだつやうだつた。しかし、間もなく厩へ入れられて親切にして貰つてからやつと落着いた。

次の朝、御主人は私たちを見にいraftしやつた。そして、ジェームスといろ／＼話して居られた。馬丁が私の毛竝を梳きおろしてくれてゐたので、そのお話はよく聞きとれなかつたが、ジェームスが大變嬉しうにしてゐるところを見ると、御主人がジェームスを褒めていらつしやつたらしく思はれる。奥様は火事で大變びつくりなすつたので、旅行は午後延すことになつた。そこで朝の中、手がすいたので、ジェームスは馬車や馬具を調べるついでに火事のことをもつと詳しく聞きに、前の宿屋へ行つた。そしてそこから歸つて来て、あつたことをこちらの馬丁に話して聞かせてゐた。どうしたわけで火が出たのか、最初は誰も知らなかつたが、「ディック・タウラが厩へ這入る時はパイプを衝へてゐたが、出て来た時見ると、そのパイプは持つてゐなくつて、他のを取りに酒場へ行つた。」と

いふ者が出てきたのださうだ。すると若い馬丁が言ふには、「ディックは草を鉋しに二階へ行つて貰つたが第一パイプを置いてからにしてくれると注意したので、ディックはパイプを持つて上らなかつた筈だ。」と主張したが、しかし、この馬丁の言葉を信する者はなかつたさうだ。私はそれを聞いてもジョン・マンリーの所謂「厩ではパイプを持つことを嚴禁すべし」といふ規則を思ひ出した。この誠めはどこでも守らねばならない。

ジェームスの話によると厩の屋根も床もすつかり落ちて、黒い壁ばかり残つて立つてゐたさうだ。出して貰ふことの出来なかつた二疋の馬は可哀さうに焼けた瓦の間に埋つて居たといふことである。

それからの旅行はまことに樂であつた。日が暮れて間もなく御主人の御友達の家へ着いた。私たちがはこじんまりした清潔な厩へ入れられた。親切な馭者がやつてきて何かと氣をつけて安樂にして呉れた。この馭者は火事のことを聞いた時、非常にジェームスに感心したらしかつた。

「すると若い、——お前さんの馬はちやんと信頼す可き人を知つてゐたものと見えるね、いやどうして、火事や大水の時に馬を厩から連れ出すほどむづかしいことは世の中にならね。どうして厩から出ないのか知らねえが、何しろ二十疋に一疋も出やしないよ。」

この屋敷に二三日逗留してから歸路についたが、先づ無事に旅行を終へて再び私の厩に這入つた時

の嬉しさは如何であつたらう。勿論ジエームスも私たちを見て同じやうに喜んだ。ジョンとジエームスがその夜私たちに別れて行く時ジエームスはかう言つた。

「おいらの代りに誰か来るだらう？」

「門番のところのジョー・グリーンが来るよ。」

「ジョー・グリーンが？　まるで子供ぢやねえか？」

「十四と半分になるよ。」

「でもまるで小僧だ。」

「さうさ、小僧は小僧だ、しかし彼奴は敏捷で注意深くてなかなかいゝところがある、自分ぢや來たがつて居るし、それに親父もよこしたがつてゐるから旦那様もやらせて御覽になると思ふよ、旦那様が、『彼奴ぢやあんまり小さ過ぎるとお前が思ふなら、もつと大きな子供を探してもいゝ。』と仰やつたので、おれは『まあ六週間も試して見た上のことには致しませう。』と申上げておいたよ。」

「六週間だつて、」とジエームスは驚いて叫んだ。「役に立つやうになるには、まあ六ヶ月位経たなくちや駄目だらうよ、お前さんの用がふえるばかりだね、ジョンさん。」

すると、ジョンは笑つて、「さうさ、仕事とおれとは大仲よしだ、未だ一度だつて仕事を恐ろしいと思つたことなかないよ。」

「まつたくね、お前さんは感心な人だよ、おいらもお前さんのやうに早くなりたいもんだ。」

「いや、おれも自分のことはあんまり言ひたくはないが、お前もこれからの世の中に出て行かうといふのだから、俺の思つてゐることを一寸話して聞かさうかね、おれが恰度あのジョーぐらゐの年頃のことだ、十日ばかりの中に、父親も母親も續いて熱病で死んでしまつて、そのに後おれと不具なネリーといふ妹だけが、この世に残されたわけさ、今更頼る親戚はなし、おれは百姓の子で自分一人さへ食つて行くのがむづかしいところへ、まして妹まで面倒を見ること出来る筈はねえやな、若しこの家の奥様がなかつたら、ネリーはきつと養育院へはいつたことだらうよ、ネリーは奥様を、神様だと言つてるが、全く神様だよ、奥様は御自分でおいで下さつて、後家さんのマレットさんの家の一間を妹のために借りて下さつたのさ、大きくなるに従つて編物や針仕事をおさせになり、病氣の時には食べ物やら、結構な御見舞物を下さつたりしてまるで、お母様のやうに御親切にして下さつたよ、それから旦那様は旦那様でおれをその時分にゐたノルマンといふ馱者の下へつけて既に働かせて下さつた、三度の食事はお家でいたゞき、寝るには既に二階で寝かしていたゞき、おまけに着物は一揃ひ下さる、妹に仕送るためと仰やつて、一週間に一圓五十銭のお給金を下さる、それからノルマンだが、若しこの人が旋毛を曲げて、「百姓仕事をしてゐて何にも知らぬ小僧を面倒見ることなその年になつて御免を蒙る。」とでも言つたらそれきりだが、どうしてそれどころかまるで眞身の父親のやうに絶えず骨を折つて呉れたよ、老人は幾年か経つて死んだが、死ぬとおれがその後釜に坐つて、今ではお給金も一番多くいたゞくし、まさかの時の用意にと貯金もできるし、妹の奴も小鳥のやうに

仕合せに暮らしてゐるよ、なあ、ジェームス、——おれは御主人に小僧だからいやだなんて言はれねえよ、どうしておれにあの御親切な善い御主人をお困らせ申すやうなことが出来るものか、お前が行つてしまふのは實に残念だが、しかしどうにかやつて行くよ、出来る時に親切をするほど氣持の好いことはないからな。」

「そいぢやお前さんは、自分さへよければ他人はどうでもいゝといふ、世間の人のやうな氣はまるつきしないんだね。」

「あたり前よ、若も旦那様や奥様や、そしてノルマン爺さんが、自分さへよければいゝといふ主義だつたらおれとネリーはどうなつてゐると思ふかい、妹は養育院へ、おれは蔗畑の草とりさ、お前にしたつてさうぢやないか自分さへよけりや他人はどうでもといふ風だつたら、ブラック・ビュウテイやジンジャーはどうなつたかい、今頃は焼けて死んでゐるぜ。」とジョンは頭を振つて頻りに辯じ立てた。

ジェームスは嬉しさに笑ひながら、

「お母さんをのけちやお前さんほど俺に親切にしてくれた者はねえよ、どうか忘れないでめておくれね。」と言つた時には、もう聲が涙で曇つてゐた。

「いや、小僧、大丈夫だ、若しこの後とも俺で出来ることがあつたら何でもするから、お前も俺を忘れないでめて呉れるよ。」と、ジョンが言つた。

翌日ジョーはジェームスのゆかない前に仕事を覚悟ふためにやつてきた。いろ／＼教はつて、厩を掃いたり、藁や枯草を運び入れたり、馬具の掃除から馬車を洗ふ手傳などをした。しかし、子供で脊が低いので、私やジンジャーの手入れは出来ないで、ジェームスはメリー・レグスで稽古をさせてゐた。これはジョーがジョンの下についてメリー・レグスの世話をすることになつてゐたからである。この小僧さん、なかく活潑で仕事をする時にはいつも口笛を吹いてゐた。

メリー・レグスは、未だ何にも知らない小僧にコヅキ廻されるので、實に閉口すると言つてゐたが、それから二週間も立つと、「小僧さん、なかくうまくなつて来たよ。」と言つてメリー・レグスは私に囁いた。

到頭ジェームスが私たちに別れて行く日が来た。いつものやうに快活には見えてゐても、心は悲みにふさいであるやうに見えた。

まつたくジェームスは悲しきやうな聲で、——

「ねえ、ジョンさん、おれは大勢に別れて一人行かなくちやならないのだ。お母さんにもベターにもお前さんにも御主人御夫婦にも、多くの馬にも、そしてメリー・レグスにも別れるのだ、先方には知つた人は一人もあやしない。出世してもつと澤山の仕送りがお母さんに出来ると思ふからこそ行かうと決心したんだが、それでなくつちや辛くつて行かれるもんか、本當に辛いよ、ジョンさん！」

「無理もねえさ、だがねジェームス！ お前ははじめて世の中へ出るのだ。さう思つて元氣を出すん

だ、直きに友だちが出来たらうし、お前ならきつとうまくやつてゆけるにきまつてゐるし、さうなりやお母さんも助かるといふものさ、そして先方のやうな結構なところへはいつたのをどんなに喜ぶかわからねえよ。」

ジョンはかう言つてジェームスに元氣をつけさせたが、しかし、誰だつてジェームスの去るのを惜まない者はなかつた。殊にメリー・レグスはジェームスを戀しがつて、幾日もろくに食物も食べないくらいだつた。それがためにジョンは私を運動に連れて行く時メリー・レグスを私と一緒に連れ出した、そしてメリー・レグスは私と一緒に跳ねたり、飛んだりしたために、やつと元氣を恢復することが出来たほどだ。

ジョーの父親は既の仕事を知つてゐたので、暇を見てやつて来ては手傳ひをした。ジョーも一心に稽古を勵んだので、ジョンもだんくこの少年を信用するやうになつた。

18

ジェームスと別れてから幾日もたぬ或る夜のことである。私は草を食べてから、藁の上にふせつて、ぐつすり眠つてしまつた。

すると突然鈴の音が高らかに鳴りだした。私はそれで直ぐに眼を覺した。それからジョンの家の戸が開く音がして、ジョンがお邸の玄関へかけて行くやうな氣勢がする。それから又直ぐに引き返して

きてジョンは錠を開けた。

「さあ、眼を覺すんだぞ、ビュウテイ、一生懸命駆けるんだぞ。」といふかと思ふと、直ぐ鞍を背中にのせる、手綱を顔にかける、——それから一寸走つていつて上着を着て、急いで私を玄関口へ連れていつた。そこで御主人は洋燈を手にして立つてゐられた。

「さあジョン、一生懸命走つてくれ、一寸の間も待てぬ、奥さんの生命にかゝはることだ。この手紙をドクトル・ホワイトさんに手渡してから、忘れぬやうに必ず馬を宿屋に休ませて早く歸つて来ておくれ。」と御主人は顫へ聲で申された。

ジョンは、「かしこまりました。」といふや否や、私にとび乗つた。門番所に住んでゐた園丁は、早くも鈴の音を聞きつけて、ちやんと門を開けて待つてゐた。

私たちは走つた、走つた、——走れるだけ走つて、邸園を通り抜け、村を過ぎ、坂を駆け下りて、通行税番所までくると、ジョンは大聲で叫んで戸を叩いた。間もなく門番が起きて門を開けてくれた。

「お醫者様の來なさるまで、門を閉めずにおいて下さい。」と言つて又一散に駆け出した。川縁の平らな道がすうつと遠くまで見えてゐた。ジョンは私に、「さあ、ビュウテイ一生懸命に走るんだぞ。」と繰返して言つた。私は出来るだけ早く走り通した。かうなつては鞭も拍車も全く不要だつた。二哩ばかりといふもの、足は空に駆け続けた。ニューマアケットの競馬で勝つた私のお祖父さんだつてこの時の私にはかなはなかつたであらうと思ふ。橋のところへくると、少し手綱をひいてジョンは

私の頸を叩きながら、よくやつたぞ、——ビュウテイ、感心な奴ぢや。」と言つた。ジョンは私を少しゆるやかに走らせようとしたが、しかし私は氣が立つてゐるので、直ぐ前のやうに全速力で駆け出した。空氣は露を帯びて冷たく、月は冴えて、實に愉快だつた。村を過ぎ、暗い森を通り、坂を上つたり下つたりして八哩ほど駆けつゞけてやつとのことで町に着いた。やがて、町を過ぎて市場に着いた。夜は更けて私の石を踏む蹄の音より外には何の物音もなく靜まり返つてゐた。すべての人は皆眠つてゐるのだ。私たちがドクトル・ホワイトさんの家に駆けつけた時、折柄、教會の鐘が三時を告げた。ジョンは二度ベルを鳴らしてから、カ一ぱい雷のやうな音をさせて扉を叩いた。すると窓が開いて、寝帽をかぶつたドクトルが、

「何の御用ですか？」と訊ねた。

「ゴルドンの奥様が、大變お悪いので、旦那様が、直ぐ先生に来ていたゞくやうにとのこととごさいます、若しおいで下さらねば奥様は助かるまいといふことで、——此處にお手紙がございます。」

「まあ、お待ち」と、ドクトルが言つた。「それなら早速ゆかう。」

ドクトルは窓を閉めると間もなく女關へ出て來た。

「ところでどうも困つたことができた。實はね、私の馬は今日一日中出歩いたのですつかりくたびれてしまつてゐるんだ、他のもう一匹は、今使が來て俵が乗つて出かけてしまつたばかりでね、どうしたものだらう？ その馬を借してもらへないかね？」

「此奴はずつと今駆け通してきましたので、此處で休ませるやうに申しつかつてゐるんですが、しかし先生が差支ないと思召したら、御主人にも異存はございませんかと思ひます。」とジョンは答へた。「それなら直ぐ支度をして出かけよう。」とドクトルが言ふ。

ジョンは私の側に立つて頸をやさしく撫で、くれた。私は汗びつしよりになつてゐた。

やがてドクトルが乗馬鞭を持つて出てきた。

「鞭をお持ちなさるには及びませんよ、ブラック・ビュウテイは倒れるまで走りますから、どうぞ氣をつけておやりになつて下さい。」

「それや大丈夫だよ。」と言つてドクトルは私に飛び乗つた。ジョン一人を残して、私は一散に走り出した。

歸り途の話は省く。ドクトルはジョンより重くもあり乗ることも下手だつたが私は出来るだけ早く走つた。番所の門は未だ開けてあつた。もとのところへくるとドクトルは手綱を引きしめて、

「感心な奴ぢや、さあ——ちと息をつくがよいぞ。」と言はれた。私はさう言はれると何といふこともなしに嬉しかつた。しかし、實を言へばもう息が切れさうだつた。そこで、一休みすると再び元氣を恢復することが出來て、間もなく邸園まで歸つてきた。ジョンが門番所に待つてゐた。御主人は私の聲音をきかされると、女關へ出て來られたが、何とも仰やらず、ドクトルと一緒に中へお這入りになつた。ジョンに連れられて私は既に歸つて、やつと安心した。疲れきつて足がふるへて仕方がな

かつた。私は立つて喘いでゐるばかりだつた。體中の毛はすつかり濡れてしまひ、汗は足を傳はつて流れ落ちる。まるで火にかけた鍋のやうだとジョーが言つたのも無理はない。可哀さうにジョーは未だ年はゆかないし、身體は小さいし、未だ仕事は飲み込めないところへ、手傳つて呉れる筈の父親は生憎隣村へお使に行つて留守ではあるし、さぞ困つたらうと思ふが、しかしジョーは知つてゐるだけは、眞面目にやつてのけた。先づ私の足や胸をさすつて呉れた。それから暑がつてゐるからと思つたのであらう。いつも掛ける筈の布はかけずに水を手桶に一杯持つてきてくれましたが、冷たいのでともうまくて一息にみんな飲んでしまつた。それから枯草や穀類をくれてから、ジョーはもうすんだと思つたのか行つてしまつた。少し経つと私はがたくと顫へ出した。今まで熱かつた身體が、急に冷たくなつてしまつたのだ。そして足や腰がしきりに痛む、何しろ身體が滅茶苦茶に痛くなつてきた。この時どんなに暖い布が欲しかつたことか。ジョーがゐてくれたらばと思つたが、何しても八呎の道を歩いて歸るんだから、急にと言つてどうすることも出来なかつた。仕方がないから私は断念して藁の上に横になつて眠らうとした。それから大分経つて戸口でジョーの聲がした。私は苦しうて仕方がないので、少し唸つてみせた。するとジョーは直ぐ私の側へやつてきて、しやがんで様子をみてくれた。私は勿論自分の苦しいことを訴へることも出来なかつたが、ジョーはよく察してくれたと見えて、暖かい布二三枚で私を包んでくれた。私はそれでやつと眠れるやうな氣持になつた。ジョーは非常に腹を立てたらしく、

「馬鹿な小僧だ、本當に馬鹿な小僧だ、布をかけないできつと冷たい水を飲ましたに相違ない、子供は全く駄目だな。」と頻りに獨言を言つてゐた。だがさうは言つてもジョーは全く善い子供だつた。それから私は肺に非常に熱を持つて、炎症を起して呼吸をする毎に痛みだした。ジョーは夜晝となく私につきつきりて看病してくれた、そして一晩の中に二三回も起きてくれた。御主人も折々見舞つて下さつた。或る日、「可哀さうに、ビュウテイ、お前は實に善い奴だ、奥様の命を助けてくれたのはお前だ、お前は命の親だ。」仰やつて下さつたが、私はその御言葉を耳にしてどんなに嬉しかつたことか。きつとこれはドクトルが、「もう少しおそかつたら、間に合はなかつたでせう。」とでも言はれたからであらう。ジョーはジョーで、「馬があんなに走れやうとは、今が今まで知りませんでした」と御主人に言つたよ、ビュウテイは何事がおこつたかすつかり承知してゐるやうでございました。」と御主人に言つたが、たとひジョーがさう思つてくれなくつても勿論私はよく知つてゐた。私たちはどうしても一生懸命行かねばならぬ。それが奥様のおためだといふことぐらゐは私だつて、ちやんと心得てゐたのだ。

毎日馬醫者のボンドさんが診察に来てくれた。或る日、ボンドさんは私の血をジョーの持つてゐる器の中へとつたが、私はそれから氣が遠くなつて、このまゝ死んで行くのか知らんと思つた。また、皆さんもさう思つて心配して下さつたやうだつた。

私の部屋を静かにするためにジンジャーとメリー・レグズとを他のに移した。それといふのも熱のために私は非常に耳が鋭敏になつて居たからである。ほんの一寸した音さへも雷のやうに聞えるし、家に入りにする人の蹀音は勿論、周囲にあることは何でも彼でもわかるのだ。或る夜、ジョンが私に薬を飲ませに來てくれた。そしてトーマス・グリーンがそれを手傳つた。薬を飲むと私は少し樂になつた。ジョンは三十分間も薬の落着き具合を見てゐようと言つてトーマスと一緒にメリー・レグズの部屋にあつた腰掛に掛けてゐた。燈火は私の眼に障らぬやうにと、足許に置いて、暫く二人とも黙つてゐたが、やがてトーマス・グリーンは低い聲でかう言つた。「なあジョンさん、お前、ちとジョーに優しい言葉をかけてやつてくれないかね、あの子はすつかり氣を落してしまつて、飯も食はなければ笑ひ顔も見せやあしねえ、口癖のやうに、——知つてゐただけのことはよくやつた積りだけれど、やはり自分の手落だつた、若しビュウテイが死にでもしたら、もう言葉をかけてくれる者もなくなるだらうつて悲しがつてるぜ、それを聞くとおれも可哀さうになつちまつた、元來が悪い子供ぢやないんだから、まあちつとばかりでも親切に言つてやつてくれよ、なあ、ジョンさん。」

すると一寸間を置いてジョンが靜かに答へた。「おれをあんまり酷く言つてくれては困るよ、トムさん、おれはあの小僧がわざとしたのだと思ひもせねば、又言ひもしねえぜ、無論悪い奴だとも思やあせんよ、けれどおれは唯口惜しくつてならねえのさ、彼の馬は旦那様や奥様がそれは——可愛がつていらつしやるばかりぢやねえ、このおれだつて

心から自慢にしてゐる逸物なんだからね、それがかうして死んで行くかと思ふとこの胸が何とも言へずせつないよ、しかし、おれがあの子に對してひどいと思ひなされるから、明日は優しい言葉をかけてやらう、だがね、それもビュウテイの病氣次第さ。」

「それやおれも知つてるよ、全く、ジョーはどうして、か知らなかつたばかりなんだからな。」

「知らなかつたばかりだつて、」とジョンの聲は急に怒つたやうに聞えてきたので、私はびつくりしてしまつた。「知らなかつたばかりなつてゐるものかい知らない、といふことは世の中で悪心といふことに引き續いて二番目に悪いことだ、『悪心』と『知らない』といふことがどつちに害になるだらうか、神様でなくちや判らないや、別に悪いつもりはなかつたんだ、只知らなかつたばかりだ、と言ひさへすれば、それですむと世間の人は思つてゐるのはよくねえ、マルヨッシの女房だつて、赤ん坊に怪しい薬を飲ましておいて、別に殺すつもりはなかつたけれど、やはり殺してしまつて、たうとう子殺の判決をうけたぢやねえか。」

「それは自業自得といふものさ、女が何も知らないで、まるで小ぼけな子供にむやみなものを飲ませるつてことがあるものか。」

「ビル・スターキーが月夜に幽霊の身装をして弟を追ひ廻したことだつて別にびつくりさせて氣違ひにするつもりぢやなかつたらうに、あの母親の自慢したほど容貌よしの子供を一生馬鹿にしてしまつたんぢやねえか、だから、トム、お前だつて、二週間前にお嬢さん方がお前の温室の戸を開け

つばなしにしておいたために、冷い東風が吹き込んでお前の大事な植木を澤山枯らしてしまつたつて大變怒つてゐたぢやねえか。」

「それや澤山どころかい、若い接木の芽一つだつて助かつたのはありやしねえ、もうすつかりやり直さねばならねえが、困ることは何處に新らしいのがあるかわからねえのさ。這入つていつてその有様を見た時、癩に觸つて癩に觸つてたまらなかつたことはないよ。」

「それでもお嬢さん方はさうするつもりでもなかつたんだからね、唯、知らなかつたばかりさ。」とジョンがぶつきらぼうに言つた。

藥が利いて眠つたので後の話は聞えなかつた。翌朝になるとかなり氣も好くなつてきた。それから世間のことがいろいろわかるやうになつた時、私は屢々その時のジョンの言葉を考へてみた。

ジョー・グリーンは仕事をずん／＼覺えてきた。何をすることも注意が行届いてゐるので、ジョンからいろいろのことを任せられるやうになつた。前にも言つたやうに、ジョーは年の割に小さい方なので、めつたにジャスチスや私を運動に連れ出すことは許されなかつたか、しかし、或る朝ちやうどジョンがジャスチスに荷車を引かせて出て行つた留守だつたので、御主人はジョーに三哩ばかり隔たつてゐるところのお友だちに手紙を持つて行くやうに命ぜられた。で、ジョーは私に鞍を置いて行か

ねばならなかつた。御主人はむやみな乗り方をせぬやうにとくりかへし、注意をされた。

先方へお手紙を届けて、そろ／＼歸つて來ると、煉瓦の焼場のところへ來た。すると煉瓦を重く積んだ荷馬車が一臺、深くメリ込んだ轍の跡の粘土の中に、輪がくひ込んでゐるので、馬方は一生懸命で、二疋の馬をどなり付けたたり打つたりしてゐた。ジョーは私を止めた。その荷馬車は實にみじめな有様だつた。馬は二疋で一生懸命に、めり込んだ荷車を、引つぱり出さうとあせりもがいてゐるが、どうしても動かすことが出來ないのだ。腹や足からは汗が流れる。胸は波のやうに煽つて、體中の力を張りつめてゐるのに、馬方は前の馬の頭をこづき廻して、酷たらしくどなりつけてゐるのだ。

ジョーは、「お止しよ、そんなに馬を撲つものぢやないよ、輪がめり込んで車が動かないんぢやねえか。」と横合から叫んだ。けれども馬方はその言葉も耳に這入らぬらしくなほ打ち續ける。

「本當にお止よ、おいらも手傳つて荷を軽くしてやるからね、これぢや馬はどうすることも出來やあしねえよ。」とジョーが言つた。

「——お前のことをしなされ、生意氣な小僧め、おれはおれの勝手なことをするんだからと怖ろしい劍幕で馬方はジョーを睨みつけた。酒に酔つてゐるために馬方は、いよく荒々しくなつてひどく馬をなぐりつけた。

ジョーは直ぐ私の頭を向けかへた。私は煉瓦師の親方の家の方へと駈け出した。こんなに早く駈けたら、ジョンは怒るだらうが、私もジョーもあの馬方をひどい奴だと思ふ一心から、どうしてもぐづ